

從三位鈴鹿連胤撰  
皇典講究所講師 井上賴圀  
同 佐伯有義 校訂

# 神社叢錄

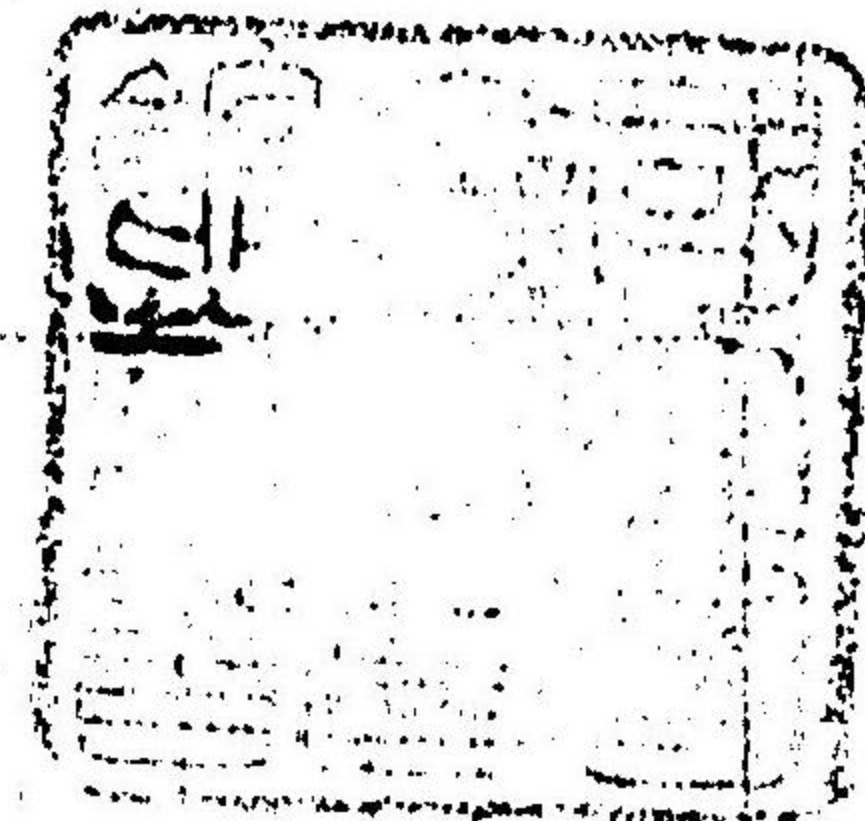
上編

皇典講究所藏版



175.9Su799z I

神皇正統記



8  
893434  
2



國之大典

辛丑冬日

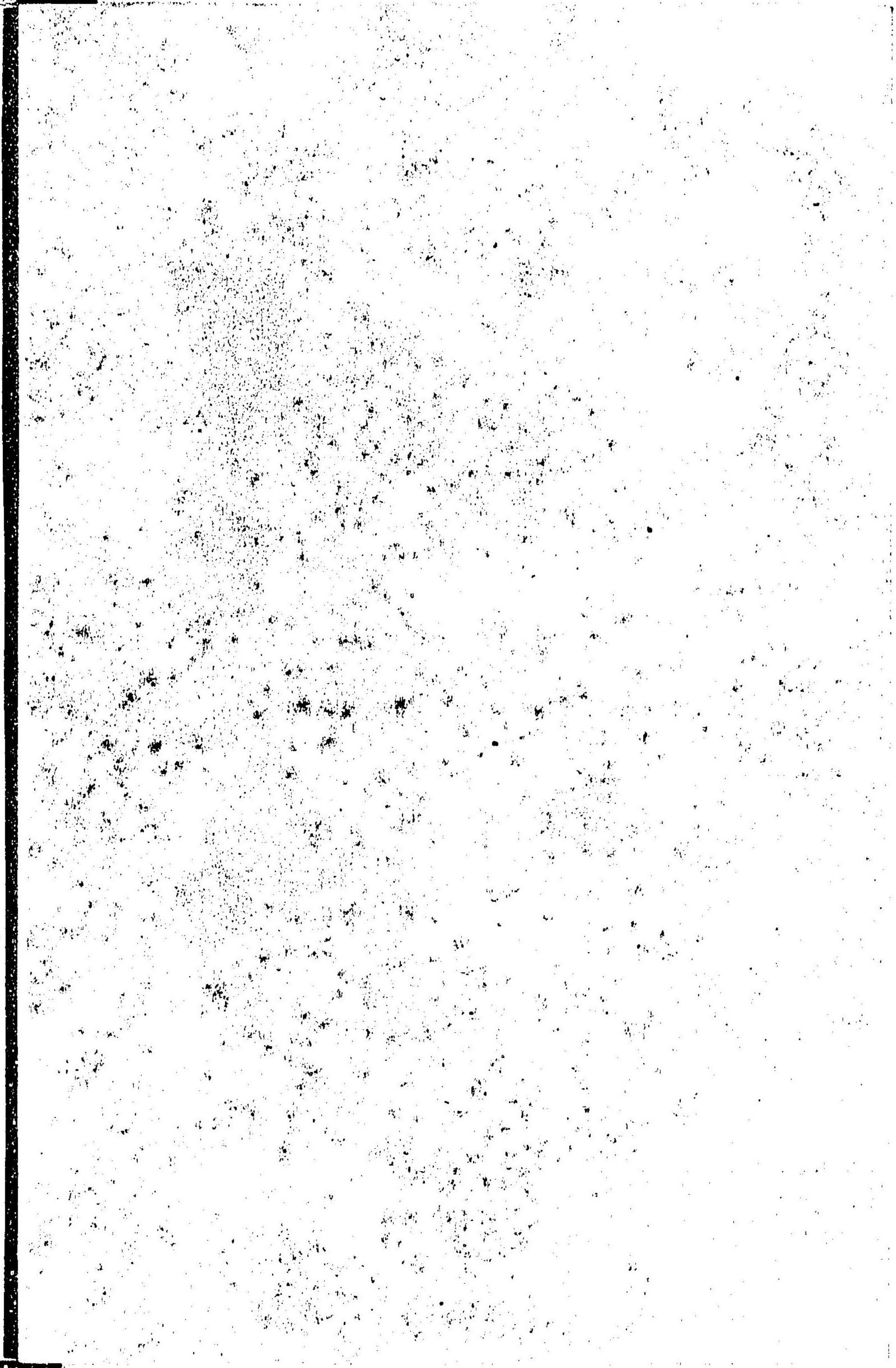
通禧題













鈴鹿連胤翁小傳

翁姓は中臣名は連胤鈴鹿はその氏なり寛政七年十月京都吉田村に生え家は世々吉田の社家にて右大臣金連の男吉子連の遠裔なり父名は降芳母は左京亮藤原經康朝臣の女なり父降芳は翁八歳の時身まかれしは祖母と母との手によりて養育せられ同族鈴鹿通益氏之が後見たり翁幼より穎悟漢學は松岡仲了に隨ひて學び皇國學は山田以文翁につきて修め刻苦勵遂に一家を成すに至れり文化元年八月年十歳の時從五位下に叙し神祇博士に任ぜられ同八年閏二月從五位上に進み神祇少輔に轉じ翌八年筑前守に任ぜられ少輔より權大輔に進む同十三年吉田社權祝に補し正五位下に叙し文政七年十二月越えて從四位下に叙せられ天保四年六月權少輔に轉す同七年四十二歳の時吉田家を致仕しこゝにはじめて神社殿錄編纂の志を起し爾來専ら之に従事せらるる同九年三月從四位下に叙し安政元年十一月正四位下に進み翌二年吉田社禰宜に補し同六年三月同權預となり慶應二年四月從三位に叙せらる是より先吉田の社殿を再建し并に二季の官祭復古の事に心を砕き三條柳原等顯要の門に入して一方ならず力を盡されし甲斐ありて今年に至りて遂にその希望を達するに至れり從三位に進められしも實にその功によりてぞ明治三年七十六歳の時神社殿錄七十二卷功成る天保七年以來三十餘年の長日月を経てこゝに本書の成功を見るに至れり翁のよるこび察すべし依りてその一本を謄寫して教部省に奉らるる今の神社局に存するもの即ち是なり翌四年正月五日薨す享年七十七歳なりき

社類  
印葉

鈴鹿連胤翁

氏名



多行本行乃

大正九年

連亂

神社叢錄上編

◎目次

卷一	(標目—式文—祈年祭—月次祭—相嘗祭—新嘗祭—祈雨祭—名神祭)………	一頁
卷二	(宮中神—附錄神祇官及諸寮司等祭神)………	五十頁
卷三	(京中坐神—附錄式外神)………	百二十八頁
卷四	(山城國式社上—附錄式外神)………	百七十一頁
卷五	(山城國式社下—附錄式外神)………	二百四十三頁
卷六	(大和國式社上—附錄式外神)………	二百九十九頁
卷七	(大和國式社下—附錄式外神)………	三百六十五頁
卷八	(河內國式社—附錄式外神)………	四百三十九頁
卷九	(和泉國式社—附錄式外神—國內神名帳)………	四百九十五頁
卷十	(攝津國式社—附錄式外神)………	五百四十八頁
卷十一	(伊賀國式社—附錄式外神)………	五百九十二頁



卷十二 (伊勢國式社上—附錄式外神)……………六百十頁

卷十三 (伊勢國式社下—附錄式外神)……………六百六十五頁

卷十四 (志摩國式社—附錄式外郡)……………七百三十二頁

卷十五 (尾張國式社—附錄式外神—國內神名帳)……………七百三十六頁

卷十六 (參河國式社—附錄式外神—國內神名帳)……………八百十頁

卷十七 (遠江國式社—附錄式外神)……………八百三十三頁

卷十八 (駿河國式社—附錄式外神—國內神名帳)……………八百六十六頁

神社敷録上編目次畢

神社敷録第一之卷

○標目

中臣朝臣連胤謹撰

延喜式卷第九

神祇九

延喜式は音讀也、卷第九は麻岐乃都以天古々乃都と讀べし、「神祇は音讀也」九は上に同じ、「さて此延喜式は、人皇六十代醍醐天皇の敕撰にて、朝廷にして行はる、祭典をはじめに、太政官及諸官の職掌を記せるもの也、是より前に、弘仁（嵯峨 貞觀 清和 天皇）等の格式ありといへども、沿革あれば、延喜五年八月に詔を下して、格式を選ませ給ふ也、さるに撰者等、いまだ竟らずして、頻に薨卒しぬ、故に同十二年二月再び敕ありて、延長五年十二月撰集畢り、延喜式と號づけて奏上す、五十卷と序表に見えたり、格十二卷は、往に奏進の由也、さて其格は世に傳はらざり、漸く類聚三代格に遺れりといへども、殘缺なるに、此式五十卷の闕るところなく存れるこそ、いさよめでたき御事也けれ、況や神祇の儀委しく記せるをや、其五十卷の中に、首め十卷を神祇とす、第一四時祭上、第三臨時祭、第四伊勢大神宮、第五齋宮祭、第六齋院司、第七踐祚大嘗會、第八祝詞、第九神名上、第十神名下也、第十一太政官、次々諸官、第五十雜々の事を載せられたり、二四時祭下、第三

神祇按るに、卷首に神祇の條をおけるは、職原鈔の開卷神祇官の條に、以當官置諸官之上、是神國之風儀重天神地祇故也、と書る趣き也、さて慶長元年戊子開板の時、戶部法印道春が跋に云、頃年中原萃菴職忠、使兒孫按讎延喜式、清原前給事中兼白漿合賢忠朝臣見而嘉之、歷給四十九卷既卒、時會胡陶氏求之鏤梓、其文字鮮明、讀者便焉、但一部五







延喜の此帳には三千二百三十七座とあるべきを、なほ元慶元年のときの數と同じきは、其後官社を停られたるもありしにや、但し三代實錄に、元慶三年十一月六日、停梅宮祭、云々、歷承和仁壽二代、以爲官祠、今永停廢焉とみえたりと、同八年四月七日、始祭梅宮神、云々、頃年之間、停春秋祀、今有勅、更始而祭とみえ、三代實錄の後は國史なければ詳ならぬを、色葉字類抄梅宮の條に、伴の兩度の廢興を載て、次に寛平又停之、永延以後祭之、十一月同之、と記せり、師光、年中行事に記せるも同じ、かくて永延の度の事は、年中行事秘抄に、兩度の事の次に、寛和二年十一月廿一宣旨云、新依御願、初復舊基、以今廿五日、令勤任、但自明年、可用式日とあり、寛和三年四月五日永延と改られたれば、此説相合へり、まかれは延長五年に撰成て上られたる此神名式に、梅宮神社を載らるべきにあらず、寛和二年の宣旨によりて、後に更に載られて、惣の座數祭式等をも、加へ改められたるなるべし、此外官社の増減のありたらんにも、元慶元年の頃の、班幣の神の座數と同じきは、あつから合へるなるべしといへり、「連風按るに、既に續日本紀、慶雲三年二月庚子、甲斐、信濃、越中、但馬、土左等國二十九社、始入祈年幣帛例、其神名具、天平九年八月甲寅、詔曰、朕君臨宇内、稍歷多年、而風化尙擁、黎庶未安、通且忘寐、憂勞在茲、又自春已來、災氣遞發、天下百姓、死亡實多、百官人等、闕卒不少、良由朕之不德、致此災殃、仰天漸惶、不敢寧處、故可優復百姓、使得存濟、其在諸國、能起風雨、爲國家有驗神、未預幣帛者、悉入供幣之例、給大宮主、御巫、坐座御巫、生島御巫、及諸神

祝部等、「類聚國史、延曆十七年九月癸丑、定可奉祈年幣帛一神社云々、と見ゆれど、座數の事は、抑此帳に、三千二百三十二座を載せられたるは、かの延曆十七年の定めにもとづきたるにもやあらん、然れども、委細は國史を考へて引競べみれば、不審の事ども出來り、况や類聚三代格、寛平五年三月二日太政官符に、祈年、月次、新嘗等の祭に預る神、京畿外國大小通計五百五十八社、とあるなども此式に合はず、わ、後世より如何とも推量りがたし、

社二千八百六十一處

社は夜之呂と訓べし、以呂波字類抄に、社、假字上の如し、但さて爰は、惣數の中に相殿に坐す神あれば、それを除きて、社は如此といふ也、さて又、出雲國は相殿に坐す神をも、別社のごとくにして、或は杵築社の相殿大穴持神を別て、大穴持神社と擧げ、又は同社坐、云々、と記したるは當國に限る一つの格也、○二千八百六十一處は音讀也、處は、同字類抄に、

前二百七十一座

前は未倍と訓べし、以呂波字類抄に、前、假字上の如し、但さて爰は、社はなくて、相殿に坐す神の數をいふ也、○二百七十一座は音讀也、

連風云、前とは、譬へば伊勢大神宮は、社は一字なれど、其社に坐す神は三座にて、主とする天照大神を社とさし、自餘の二座を前と稱し奉る類也、さはいへ、大和國添上郡春日祭神四座の中の三座は前なれど、社も四字ありて、別社に坐せば、強ち社なしともいはれぬ







新嘗祭

三百四座は音讀也、○並預は奈良毗爾安豆加留と訓べし、○祈年は登志吳比、月次は都岐奈美、「新嘗は爾比奈閉、爾を女の如く唱る也」等は音讀也、祭之は末都里乃と訓べし、○案上官幣は音讀也、○就中は那加爾爾を平の如く唱る也都久と訓べし、○七十一座は音讀也、○相嘗は阿比奈閉新嘗の嘗と訓べし、公事根源に、アムムベとよむ也と宣り、これいと古き稱と見えて、古今集大歌所の條に、云々の歌の古注に、この歌は承和の御へのきひのくにのうた、これは水の尾の御へのみまさかのくにの歌、これは元慶の御へのみのうた、これは仁和の御へのいせの國のうた、これは今上の御へのあふみのうたとあり、御へのオンムへの約也、

祈年祭の事の見えたるは、神祇令に、仲春祈年祭、儀略云、祈年祭、秋令歳災不作、時令順慶也、即於神祇官祭之故曰祈年、一集略云、周禮曰、祈年、呼吉神以求福也、四時祭式に、凡祈年祭二月四日、云々、また祈年祭、神祇官祭神七百三十七座、奠幣案上、神三百四座、宮中三十座、京中三座、畿内山城國五十三座、大和國一百一十八座、河内國二十三座、和泉國一座、攝津國二十六座、東海道伊勢國十四座、伊豆國一座、武藏國一座、安房國一座、下總國一座、常陸國一座、東山道近江國五座、北陸道若狹國一座、山陰道丹後國一座、山陽道播磨國三座、安藝國一座、南海道紀伊國八座、阿波國二座、社一百九十八所、座別、云々、前一百六座、座別、云々、とある是也、式の全文下に引く、祭儀を明かに記す、月次、相嘗、新嘗等も同下、儀式、四宮祀、北山抄、江次第抄に、天武四年二月甲申祈年祭始也、年中行事祕抄には、官史記に云ふといへり、「建武年中行事後醍醐天皇」に、二月四日、としこひのまつり、一日より御神事の由見

えたれど、白河院の仰前後齋一奉祀世本、辨かねてより、諸國のめし物もよほしとのへて、二三日かけて、神祇官に幣をつ、ましむ、忌部つ、むなり、案上案下三千餘座の神を祭る、その所々たしかならざるもあり、國司におのづかはず、諸國にも祈年をおこなふなり、云々、「公事根源に、祈年祭、二月是は太神宮已下、三千二百三十二座の神をまつらせ給ふ、其所々のたしかならざるもあり、國々におのづかはず、幣をつけらる、諸國にも年こひの祭を行ふ也、周禮に、祈年は豊年を求る也、と見えたり、天武天皇四年二月に、はじめて此祭あり、大かた祈年の祭、月次兩度、新嘗祭をば、四箇祭とて、國の大事とする也、と宣へり、「連胤按るに、日本紀天武天皇卷には、四年正月戊辰、廿三奉幣諸社、と見えて、二月には所見なし、かつ二月甲申は十日にして、後の例と違へり、大寶年中神祇令を定めらる、時も、いまだ日限はなかりけむ、諸祭ともに月ばかり載せられたり、二月四日と見えたるは、續日本後紀、承和九年二月己巳、四遣使奉幣伊勢太神宮及諸社、祈年也、」三代實錄、貞觀元年二月四日庚寅、於神祇官修祈年祭、とあるが國史に見えし始め也、是より前に、二月四日には定りけむ、國史に洩れたるは、恒例の式は省きたる例なるべし、○四時祭式祈年祭の分書に、宮中卅座とあるによりて、京中已下阿波國までを算ふれば、宮中に社廿一處前九座ならては、物計合はず、さるに其分まれば、たき故に、竊に分ち見るに、社は八神殿八處、坐摩巫祭神五處、御門巫祭神四處、四面門各一神、生島巫祭神一處、生島宮内省坐神二處、造酒司坐神一處、合して廿一處、前は御門巫祭神四座、四面門各一神、生島巫祭神一處、生島宮内省坐神一處、相殿造酒司坐神三座、大宮合して



九座なるべし、猶委しくは其社々の條にいふべし、出雲本考異に、社云々、前云々、今案宮中社殿拾遺處、たちまち一座の委ひなり、此帳廿六座とあるは、紛るる、神社私考に、祈年祭に案上案下の幣帛、國司祭等に預り給へる神名、いかなる事にか、すべて式に載られず、又其差別知らるべき例をも舉られず、たゞ奠幣案上二神三百四座と舉て、宮中京中諸國にて若干座と分注されたるのみなれば、各神名をば何れをそれと知られざるがごとし、まかるを今、其分注されたる社數によりて、神名帳に載られたる奠幣例に引合せて考ふれば、明かにしらるゝなりと云るは、甚ま紛つはしき書さまにて、心なき輩はいかにとや思ひ惑ふらん、連胤も一わたり讀て、頭を傾けたり、依て委しく解あきらめ置むとす、此文國司祭等に預る神名を、都て式に載せず、式とは、四時祭式を、又其差別の知らるべき例を舉ずといひ、今其分注されたる社數によりて、神名帳の奠幣例に引合せて考ふれば、明かにまらるゝなりといへるは、何の事ぞ、四時祭式祈年祭の條に、國司祭の神名、はた差別を舉ずといはれ、神祇官の祭なるも同じからん、何ぞ國司祭のみならんや、神名帳に引合すれば、明かにまらると云るはいかに、もとより四時祭式なる祈年、月次、新嘗等みな、此帳に引合せて見れば、今も同じく分りがたかるべし、さて此神名帳は、祈年祭三千一百三十二座の神名帳なるを、公には必天下諸社の簿あるべし、其名簿を同式に載せて、この祈年等の祭に預る社々には、其まをしを付られしものとやうに、思へるよりの事也、又云、宮中、京中、畿内五國の神社は、ことごとく案上案下官幣にて、其中月次、新嘗に預り給ふは案上、さらぬは案下の幣に預り給へり、七道の

國々には、案下の幣に預り給ふ神一座もあることなし云々、といへるもいかに、七道の國司祭にも、案上案下の差別あり、そは四時祭式祈年祭の條に、國司祭祈年神、二千三百九十五座、大一百八十八座、云々、小二千二百七座、云々、祭日并班幣儀並准神祇官、とわれは國司祭にも大とあるは案上、小とあるは案下にて祭れる事、神祇官に同じきに非ずや、信友も此式文をよくまりながら、七道の國々、案下の幣に預る神なしとはいかにいひけむ、こは神名帳の取ところを、たがへるよりの惑ひ也、近く畿内は官幣、七道は國幣と思ふべし、但し月次、新嘗、名神等の祭にも、預り給ふ社は皆官幣也けり、○月次祭の事の見えたるは、神祇令に、季夏月次祭、義解云、謂於神祇官一季冬月次祭、云々、四時祭式に、月次祭奠幣案上二神三百四座、並社一百九十八所、座別、云々、前一百六座、座別、云々、儀式、西宮祀、北山抄、江次第等にも見え、公事根源に、月次祭、六月十一日、是は先神今食以前、上卿、神祇官の北門の内、東の掖に着て、供神物具否をたづぬ、次に應につきて事を行ふ、略して六月十二月に、二度諸社へ御幣を奉らせ給ふ事也、弘仁年中にこの事はじまる、と宣へり、今日宮中にては神今食あり、神祇官にては月次祭を行ふ也、神さて此祭に預る社は、かならず新嘗祭にも加はりて、座數かはる事なし、さるるを神社私考に、此祭らるゝ由意は、神祇令、四時祭式、祝詞式に載られたり、貞治五年の年中行事歌合に、月次祭を、宗時夏のくれ年の終りに月毎のかへりまをしの神の幣帛、と讀れたるが如く、既に祈年の御幣ありしごとく、神々の天下を安平く守護たまふ事を、月毎に報養して、なほ以往の御幣、またまふを、後に事省きて、總て六月と十二



月との兩度に、集めて祭らるゝ式となりぬれど、なほ古實を失はずして、月次祭といふなるべし、但し祝詞には其祈禱言を略されたり、然るは後の例なるべしといへり、「連風按るに、月次といふこと、神祇令以前には見えず、さて根源に、弘仁年中に始るといはれたるは、記憶のまゝを書れたるものにて誤也、神祇令に載せられたれば、いと舊くよりの式なりけらし、○新嘗の事の見えたるは、先日本紀神代卷上に、天照大神當新嘗時、則陰放<sub>三</sub>於新宮、とあるを始めて、紀中に往々見え、「神祇令に、仲冬下卯大嘗祭、昭若<sub>三</sub>卯者、以<sub>三</sub>卯也、四時祭式に、十一月新嘗祭奠幣案上神三百四座、並社一百九十八所、座別、云々、社別、云々、前一百座、座別、云々、准月次祭、とある是也、抑天武天皇より以降は、御代始なるを大嘗といひ、毎年のをば新嘗と唱ふ事になれり、されど此は、此三百四座に幣帛を奉らるゝには非ず、「公事根源に、八省中和院に行幸なりて、神嘉殿にて伊勢太神宮を勸請申され、天子みづから神饌を供させ給ふにやといひ、新嘗祭の條に新嘗祭は神今食に同じ、葉盤の數十二也、其外はかはらず、と宣へるが如し、さて其日神祇官にては、同く新嘗祭と稱して、六月十一日神今食の日、月次祭あることし、此三百四座を祭る事とはなれる也、この濫觴は體に書るものなし、神社私考に、新嘗の訓をはじめ、委細に志るしたれど、かの中和院にて行はるゝと、此神祇官にて行ふとの差別は、さだかに辨へず、三代實錄に、十一月中卯日新嘗祭と見ゆるは、専ら中和院にてのかたをいふとおもはれたり、また祈年、月次兩度、新嘗の祭を四度幣と云ことは、本朝令、諸神記等に引る、延喜十一年三月六日、山城國宇治郡山科神社の事の

支道按ふに  
實の如く天  
祝の如く大  
平の如く和  
の古の如く  
大神社に相  
大和の如く  
ある類也

官符、類聚三代格寛平五年三月二日官符より、以前の事は分め難し、○相嘗の事の見えたるは、日本紀、天武天皇五年十月乙未朔丁酉、奉幣帛於相嘗新嘗諸神祇、印本奉を祭に似り、相嘗に據て、神祇令に、仲冬上卯相嘗祭、續解云、謂大後、佳吉、大神、穴師、恩智、意高、葛木、鴨、四時祭式に、相嘗祭神七十一座、云々、右預相嘗祭之社如前、十一月上卯日祭之、云々、但し此祭は、畿内、紀伊國に限れり、とありて、以上此帳に載する恒例の祭式也、「日本紀通證谷川士に、延喜諸書私記曰、調府前先祭神祇一號、相嘗、祭後奉山陵一號、荷前也」と云り、さるに儀式に、此祭の事見えず、西宮記、北山抄、江次第等にも洩れたるを思へば、早く廢れたりと見ゆ、其由縁は詳ならず、さて神社私考に、公事根源に相嘗祭の事を、近き頃は絶てきたなしと記し給へるは、延喜の式の如く行はるゝ事の、絶たりと宣へりとはきこえず、かの書は應永廿九年に書給へりときこゆるに於ては、其卅三年に云々行はれたるは、その後再行れたるにやといへり、連風按るに然らず、齋院司式に依て考ふれば、賀茂の相嘗は格別の事也、相嘗七十五座の祭は、根源にいへるぞよろしかるべき、但し賀茂の相嘗も、應永卅三年の後に記録所見なし、又云、相嘗祭はいかなるよしにて祭らるゝか、いまだ書に見あたらず、按に此祭の幣物、社別に異なる中に、酒稻幾束といふ事のみ、社別に悉ありて、酒料稻者用神稅及正稅、とあるをもて思ふに、新稻をもて醸れる、御酒を献らるゝ祭なるにや、そは天皇新釀の御酒を、開看すによりて、相伴に新酒をもて、饗し給ふ由なるべしといへり、「連風按るに、こは相嘗の義理を、強て解むとするより穿ちて云る也、この祭に、天皇相伴に饗し給ふ由は見えず、こはたゞ延喜私記の説に



從ひおきて可ならん、

一百八十八座 並預祈年國幣

祈年神、大一百八十八座、東海道卅二座、東山道卅八座、北陸道十三座、山陰道卅六座、山陽道十二座、南海道十九座、西海道卅八座、座別云々、右國司長官以下准例、散齋三日、致齋一日、共會祭之、云々、とある是也、

連胤云、爰はいはゆる案上の幣也、さて按るに、往古は官幣國幣の差別はなく、悉く官幣なりけらし、然るは神祇令義解に、仲春祈年祭、中即於神祇官祭之、とありて國幣といふ事は見え、類聚國史に、延暦十七年九月癸丑、中先是諸國祝等、毎年入京、各受幣帛、而道路僻遠、往還多艱、今更用當國物、とあれば此時よりぞ官幣國幣となれりけむ、さて又同書に、弘仁八年二月丙申、神祇官言、祈年月次等祭日、諸社祝部等、事須參集祭庭、受幣供神、而比年之間、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>參會、仍幣帛一百四十二襲、取<sub>レ</sub>諸官庫、無<sub>レ</sub>人預付、伏望准<sub>レ</sub>寶龜六年格、頒幣之口、不參祝部、不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>有位無位、一切還本、許<sub>レ</sub>之、本朝文粹に、延喜十四年四月廿八日、三善清行朝臣意見封事、朝家每年二月四日、六月十一日、十二月十一日、於<sub>レ</sub>神祇官、立<sub>レ</sub>祈年月次之祭、嚴加<sub>レ</sub>齋肅、遍禱<sub>レ</sub>神祇、乞<sub>レ</sub>其豐熟、致<sub>レ</sub>其報賽、其儀公卿率<sub>レ</sub>辨官及百官、參<sub>レ</sub>神祇官、神祇官每<sub>レ</sub>社、設<sub>レ</sub>幣帛一襲、清酒一瓮、鐵鉢一枝、陳<sub>レ</sub>列棚上、又社或有<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>馬者、祈年祭一匹、月次祭二匹、亦皆左右馬寮、奉<sub>レ</sub>列神馬、爰神祇官讀<sub>レ</sub>祭文一畢、以<sub>レ</sub>件祭

物、頒<sub>レ</sub>諸社祝部、奉<sub>レ</sub>本社、祝部須<sub>レ</sub>潔齋捧持、各奉進、而皆於<sub>レ</sub>上卿前、即以<sub>レ</sub>幣絹、挿<sub>レ</sub>着懷中、拔<sub>レ</sub>棄梓柄、唯取<sub>レ</sub>其錄、傾<sub>レ</sub>其盃酒、一舉飲盡、會無<sub>レ</sub>一人空持、出神祇官之門者、况其神馬、則市人於<sub>レ</sub>都芳門外、皆買取而去、然則所<sub>レ</sub>祭之神、豈有<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>馨<sub>レ</sub>乎、若不<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>馨<sub>レ</sub>者、何求<sub>レ</sub>豐饗、伏望中救<sub>レ</sub>諸國、差<sub>レ</sub>史生以上一人、率<sub>レ</sub>祝部、令<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>此祭物、體致<sub>レ</sub>本社、以<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>如在之禮、とあるをみれば、其最初より官幣國幣の分別あるに非ず、是みな祝部の懈怠に起りて、徃々神威の衰微に至れる事、いと<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>に餘りあり、さはいへ今この文華の世に及びては、誰かかゝる墮弱の振舞あらん、願くは再興の時いたらば舊慣に復し、各官幣たらん事を、後の世かけて申しおくは、連胤が此要録を誌す本意也、

小二千六百四十座

小二千六百四十座は音讀也、小とは、祈年祭に、神祇官並國司等の案下の幣に預る神といふ目安也、小社といふにあらざる事、大の下にいふが如し、

四百三十三座

四百三十三座は音讀也、○並預云々は前に同じ、さて四時祭式に、不<sub>レ</sub>奠<sub>レ</sub>幣案上、祈年祭四百三十三座、並小、宮中六座、畿内山城國六十九座、大和國一百五十八座、河内國九十座、和泉國六十一座、攝津國四十九座、社三百七十五所、座別、云々、前五十八座、座別、云々、右神祇官所<sub>レ</sub>祭幣帛一依<sub>レ</sub>前件、具<sub>レ</sub>數中<sub>レ</sub>官、云々、とある是也、

連胤按るに、此社三百七十五所の下に、就中六十五座各加<sub>レ</sub>鐵一口、廿八座印本廿座とするは誤



也、今桂家御本、各鐵一口、三座各鞆一口、並見神とあり、此帳其加ふる社の下に、鐵、鞆、また小槻家本に從ふ、名無、鐵、また鞆と記せる是也、さて今の印本、社の下に記せる處誤り多くして、諸本を比較し改正する事左の如し、

加鐵一口鞆一口社

山城國愛宕郡小野神社二座、宇治郡宇治神社二座、宇治彼方神社、久世郡水度神社三座、伊勢田神社三座、綴喜郡昨岡神社、高神社、佐牙乃神社、以上八社

大和國添上郡奈良豆比古神社、大和日向神社、添下郡菅田比賣神社二座、葛上郡多太神社、長柄神社、宇陀郡阿紀神社、門僕神社、丹生神社、高角神社二座、八咫鳥神社、城上郡狹井坐大神荒御魂神社五座、桑内神社二座、曳田神社二座、城下郡岐多志太神社二座、倭恩智神社、

比賣久波神社、服部神社二座、富都神社、高市郡治田神社、波多神社、御歲神社、鳥坂神社二座、十市郡坂門神社、畝尾郡多本神社、以上廿四社

河内國石川郡成古神社、讚良郡須波麻神社、茨田郡津島部神社、交野郡片野神社、若江郡御野縣主神社二座、川俣神社、志紀郡樟本神社三座、伴林氏神社、印本鐵鞆の二字を脱す、今、丹比郡

丹比神社、阿麻美許曾神社、大津神社三座、酒屋神社、印本鐵鞆の二字を脱す、今、櫛本神社、以上十

和泉國大鳥郡山井神社、大鳥神社、生國神社、等乃伎神社、日根郡日根神社、加支多神社、以上六社

攝津國住吉郡草津大歲神社、神須牟地神社、印本鐵鞆の二字を脱す、今、島下郡須久々神社、阿爲神

社、并於神社、走落神社、幣久良神社、溝昨神社、太田神社、武庫郡名次神社、菟原郡河内國魂神社、大國主西神社、保久良神社、有馬郡公智神社、以上十四社

右通計六十五社 八十  
七座

加鐵一口社

大和國添上郡神波多神社、廣瀬郡於神社、宇智郡高天岸野神社、落相神社、高天山佐太雄神社、吉野郡高梓神社、川上鹿鹽神社、波寶神社、波比賣神社、印本鐵鞆の字を脱す、今、卜部家本に從ひて加ふ、○以上九社九座

河内國安宿郡伯太彦神社、伯太姬神社、大縣郡若倭彦命神社、印本鐵鞆の字を脱す、今、卜部家本に從ひて加ふ、若倭姬命神社、河内郡梶無神社、栗原神社、兼永加本に、鐵の字脱たるは誤也、茨田郡細屋神社、交野郡久須々美神社、若江郡都留美島神社、長柄神社、志紀郡長野神社、諸本鐵の字を脱す、今、出雲本考異に從ひて加ふ、○以上十一社十一座

和泉國大鳥郡蜂田神社、陶荒田神社二座、大鳥波神社、大歲神社、和泉郡積川神社五座、齋府神社、聖神社、日根郡比賣神社、以上八社十三座

右通計二十八社 三十  
三座

連胤按るに、諸本丹波國氷上郡知乃神社、とわが、出雲本考異云、案祈年案下幣注載、宮中幾内座數、而不言七道、七道亦知乃耳、恐京貞享一本是と云て、鐵の字に圈を加へたるは然ることなり、今桂家御本に依て削る、

加鐵一口社



酒社三社而已、此三座之數、高市郡鷲栖神社、  
全合可從、と云るは然り、

右通計三社

連風云、前件鐵轡を加ふる事、いかなる義か未考(得ず、神社私考に、鐵は殊に耕作の事に依り、轡は武事によりて、御所ありける由縁などにて、御世々々に別に加へて奠られつるが、例となりたるなるべし、と云り、さもありなむか、然れども社々の差別、考ふべき便りなければいかんはせむ、○又按るに、此三等の座敷前に擧るが如し、社敷ならでは員數符合せず、新嘗祭、祈雨祭等の條に、社別の幣あり、此例とみるべし、社云々の座別とあるは、則ち社別也、爰に座別とあるより紛らはしく思ふは、却りて愚見の過ちならんか、

二千二百七座 並預祈年國幣

二千二百七座は音讀也、○並預云々は前に同じ、さて四時祭式に、國司祭祈年神、小二千二百七座、東海道六百八十座、東山道三百四十座、北陸道三百三十八座、山陰道五百二十二座、山陽道百二十四座、南海道百三十四座、西海道六十九座、座別、云々、とある是也、  
連風云、爰はいはゆる案下の幣也、なほ上の文に准らへて考ふべし、

○式文

祈年祭

神祇令曰、仲春祈年祭、中其祈年月次祭者、百官集神祇官、中臣宣祝詞、忌部班幣帛、

儀式曰、二月四日、祈年祭儀、六月、十二月十一日、  
日月次祭儀亦同、

前祭十五日、月次充忌部八人、鍛工共作木工各二人、令造供神調度、但轡者鞆編氏造之、神祇官忌部官一人監造、若官内無忌部官人、及神部之中忌部不足八人者、兼取諸司氏人充之、其潔衣料布人別二丈七尺、官人細布一端一人白米二升、酒六合、五位三兩、五位五兩、加東地鹽二勺、五位海藻二兩、但鍛工共作木工者、不賜潔衣及食、其日卯四刻、月次祭六月卯一刻、十二月辰一刻所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、京職實白鷄一隻、近江國豚一頭、月次不食、次神祇官人率御巫等、入自中門、就西舍座、東而北上、大臣以下入自北門、就門内座、大臣在四掖東面、參議以上在東掖、西掖東面、外記中、庶事辨畢之狀、共起就北舍座、大臣南面、參議以上西面、諸王東面、並北上、其大臣用北戶、參議以上東面、諸王四向大臣喚召使二聲、召使稱唯進立舍前、大臣宣、式部乎刀禰奉入止宜禮、召使稱唯由命云、式部乎刀禰奉入止宜、輔稱唯、率群官入自南門、就南舍座、北而東上、御巫降就西舍前庭座、左右馬寮各率御馬廿疋、察別立南舍東頭、月次祭左右各二疋神祇官掌二人率祝部等、入自南門、立西舍南頭、神祇官人降就舍前座、大臣以下及諸司共降就舍前座、中臣進就庭座、讀祝詞、每一段了、祝部稱唯、讀訖中臣退出、神祇官拍手兩段、次大臣以下五位以上、次諸司主典以上、次祝部並不稱唯、然後皆復本座、伯命史、奉班幣帛、史二人共稱唯、各取札分立案西頭、東向、忌部二人率神部二人、進夾案立監、頌幣事、史以次唱御巫及諸神祝、各稱唯、神部執幣頌之、大神幣帛者、悉使進之、史復本座、中頌幣畢、伯命云、史共稱唯、訖大臣以下、次退出、



延喜式一四時 曰、二月祭

祈年祭神、三千一百三十二座、大四百九十二座、三百四座案上幣、一百小二千六百四十座、四百卅三座、二千二百七座、國司所祭、

神祇官祭神、七百三十七座、奠幣案上、神三百四座、宮中卅座、京中三座、畿內山城國五十三座、大和國一百卅座、伊勢國十四座、伊豆國一座、武藏國一座、安房國一座、下總國一座、常陸國一座、東山道近江國五座、北陸道若狹國一座、山陰道丹後國一座、山陽道播磨國三座、安藝國一座、南海道紀伊國八座、阿波國二座、社一百九十八所、座別總五尺、五色薄繩各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、倭文纏刀形、倭文纏刀形、布纏刀形、各一口、四座置八座置各一束、柄一枚、槍鋒一竿、弓一張、鞆一口、鹿角一隻、鉞一口、酒四升、鰓鯉魚各五兩、醋二升、海藻滑海藻雜海菜各六兩、鹽一升、酒坏一口、粟葉薦五尺、前一百六座、座別繩五尺、五色薄繩各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、倭文纏刀形、繩纏刀形、布纏刀形各一口、四座置八座置各一束、柄一枚、槍鋒一竿、粟葉薦五尺、不奠幣案上、祈年神四百卅三座、並小、宮中六座、畿內山城國六十九座、大和國一百五十九座、伊勢國九十九座、和泉國六十一座、攝津國四十九座、社三百七十五所、座別繩三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置八座置各一束、柄一枚、槍鋒一口、庸布一丈四尺、粟葉薦三尺、就中六十五座各加鉞一口、鞆一口、廿八座各鞆一口、三座各鞆一口、並見神、前五十八座、座別繩三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置八座置各一束、柄一枚、槍鋒一口、粟葉薦三尺、

右神祇官所祭幣帛一依前件、具數中、官、三后皇太子御巫祭神各八座、並奠幣案上、但臨時加減、仍不入恒數、太神宮度會宮各加馬一疋、布一段、御歲社加白馬白猪白雞各一、高御魂神、大宮女神、及甘檉飛鳥石根忍坂長谷吉野巨勢賀茂常麻大坂膽駒都那養布等山口并吉野宇

陀葛木竹籬等水分十九社各加馬一疋、其神祇官人以下醬料安藝木綿一斤、中臣宣祝詞、料庸布五段、矮帖一枚、月次大幣料祝詞、前祭十五日充忌部八人木工一人、令造供神調度、但初編氏作、粉米者、暇岐國送納、當曹忌部官一人監造、若曹內無忌部官人、及神部之中忌部不足九人者、兼取諸司充之、其潔衣料布人別二丈七尺、布一段、一人白米二升、酒六合、五位、鮭三兩、五位五兩、又加東願鹽二勺、五位、海藻二兩、但木工者不給、潔衣及食、致齋之日平明奠幣、物於齋院案上并案下、所司預敷掃部寮設座於內外、神祇官人率御巫等入、自中門、就西應座、東面北上、大臣以下入、自北門、就北應座、大臣南面、參議以上就東應座、御巫就廳下座、群官入、自南門、就南應座、北面東上、神部引祝部等、入立於西應之南庭、既而神祇官人降就廳前座、大臣以下及諸司共降就廳前座、中臣進就座、宣祝詞、每一段畢、祝部稱唯、宣訖中臣退出、大臣以下諸司拍手兩段不稱唯、然後皆還本座、伯命云奉、幣帛、史稱唯、忌部二人進夾案立、史以次唱、御巫及社祝各稱唯進、忌部頌幣帛畢、置別案上、俟使進、史還座中頌幣訖、諸司退出、月次祭之、

國司祭祈年神、二千三百九十五座、大一百八十八座、東海道卅二座、東山道卅八座、北陸道十三座、山陰道三座、關東道六座、東山道三座、北陸道三座、西海道卅八座、座別絲三兩、綿三兩、小二千二百七座、東海道六十八座、東山道三十四座、北陸道三座、山陰道五座、關東道三座、西海道卅四座、南海道卅三座、四海道六十九座、座別絲二兩、綿二兩、

右國司長官以下准例、散齋三日、致齋一日、共會祭之、祭日并班幣儀、其幣皆用正稅、同式八國日、祈年祭



集侍神主祝部等諸開食登宣、神主祝部等共稱唯此宣此

高天原爾神留坐、皇陸神漏伎命神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、今年二月爾御年祈將賜登為而、皇御孫命能、宇豆能幣帛乎、朔日能豐逆登爾、稱辭竟奉久宣、

御年皇神等能前爾白久、皇神等能依志奉乎、奧津御年乎、手肱爾水沫並垂、向股爾泥並寄豆、取作乎奧津御年乎、八束穗能伊加志穗爾、皇神等能依志奉者、初穗乎千穎入百穎爾奉置豆、眼爾高知、眼腹滿雙豆、汁爾爾稱辭竟奉乎、大野原爾生物者、甘菜辛菜、青海原爾住物者、鱈能廣物能狹物、奧津

漢葉邊津藻葉爾至爾、御服者明妙和妙荒妙爾稱辭竟奉乎、御年皇神能前爾、白馬白豬白雞種種色物乎備奉豆、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、祝部等

大御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主登、御名者白而、稱辭竟奉者、皇御孫命御世乎、手長御世登、堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸爾奉故、皇吾陸神漏伎命、神漏彌命登、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

坐塵乃御巫乃稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、波比支登御名者白氏稱辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知豆皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉豆、天、蔭日御蔭登隱坐豆、四方國乎安國登平久知食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

御門能御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、櫛磐間門命、豐磐間門命登御名者白豆、稱辭竟奉者、四方能御門爾湯津磐村能如塞坐豆、朔者御門開奉、夕者御門閉奉豆、疎夫留物能自下往者下乎

守、自上往者上乎守、夜能守日能守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

生島能御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、生國足國登、御名者白豆、稱辭竟奉者、皇神能敷坐島能八十島者、谷蠟能狹度極、鹽沫能留限、狹國者廣久、峻國者平久、島能八十島堅事無、皇神等能依志奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

辭別、伊勢爾坐、天照太御神能太前爾白久、皇大御神能見露志坐四方國者、天能壁立極、國能退立限、青雲能靄極、白雲能墜坐向伏限、青海原者棹柁不干、舟能至留極、大海爾舟滿都都氣豆、自陸往道者荷緒縛堅豆、磐根木根履佐久彌豆、馬爪能至留限、長道無間久立都都氣豆、狹國者廣久、峻國者平久、遠國者八十綱打掛豆引寄如事、皇太御神能寄奉波、荷前者皇太御神能太前爾、如橫山打積置豆、殘乎平爾看、又皇御孫命御世乎、手長御世登、堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸爾奉故、皇吾陸神漏伎神漏彌命登、宇事物頸根衝拔豆、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

御縣爾坐、皇神等能前爾白久、高市、葛木、十市、志貴、山邊、曾布登御名者白豆、此六御縣爾生出、甘菜辛菜乎持參來豆、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

山口坐皇神等能前爾白久、飛鳥、石寸、忍坂、長谷、畝火、耳無登御名者白豆、遠山近山爾生立留、大木小木乎本末打切豆持參來豆、皇御孫命能瑞能御舍仕奉豆、天御蔭日御蔭登隱坐豆、四方國乎安國登平久知食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、











口、裴葉薦五尺、

右所祭之神、並同祈年、其太神宮度會宮高御魂神大宮女神各加馬一匹、但太神宮度會宮、各加籠頭料麻布一段、前祭五日充忌部九人、木工一人、令造供神調度、其監造并潔淨、祭畢即中臣官一人奉宮主

及下部等向宮內省、卜定供奉神令食之小齋人、

同式八祝日、六月月次十二月

集待神主祝部等諸聞食登宣、

高天原爾神爾坐、皇陸神漏伎命神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、今年乃六月月次幣帛、十二月者、云今年、明妙照妙和妙荒妙爾備奉、朝日能豐榮登爾、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

大御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮寶、御膳都神、辭代主登御名者白豆、稱辭竟奉者、皇御孫命乃御世乎、手長御世登、堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸爾奉故、皇吾陸神漏伎命神漏彌命登、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

坐摩乃御巫能稱辭竟奉、皇神等乃前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、波比伎登御名者白豆、稱辭竟奉者、皇神能敷坐、下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知豆、皇御孫命瑞乃御舍乎仕奉、天御蔭日御蔭登隱坐豆、四方國乎安國登平久知食須故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

御門乃御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、櫛磐間門命、豐磐間門命登御名者白豆、稱辭竟奉者、

四方能御門爾、湯都磐村能如久、塞坐豆、朝者御門開奉、夕者御門閉奉、疎留物乃自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜乃守日乃守爾守奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

生島乃御巫能稱辭竟奉、皇神等乃前爾白久、生國、足國登御名者白豆、稱辭竟奉者、皇神乃敷坐、島乃八十島者、谷蟻能狹度極、鹽沫乃留限、狹國者廣久、嶮國者平久、島乃八十島事無久、皇神等寄志奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

辭別、伊勢爾坐、天照太御神乃太前爾白久、皇太御神乃見靈志坐、四方國者、天乃壁立極、國乃退立限、青雲能靄極、白雲乃向伏限、青海原者樟柁不干、舟艦乃至留極、大海原爾舟滿都都氣豆、自陸往道者、荷緒結堅豆、磐根木根履佐久彌豆、馬爪至留限、長道無間久立都都氣豆、狹國者廣久峻國者平久、遠國者八十綱打掛豆、引寄如事、皇太御神寄志奉、波、荷前者皇太御神乃前爾、如橫山

打積置豆、殘波乎平爾看、又皇御孫命御世乎、手長御世登、堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸爾奉故、皇吾陸神漏伎命神漏彌命登、彌自物頸根衝拔豆、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

御縣爾坐、皇神等乃前爾白久、高市、葛木、十市、志貴、山邊、曾布登御名者白豆、此六御縣爾生出、甘菜辛、菜乎持參來氏、皇御孫命乃長御膳乃遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、

山口坐、皇神等乃前爾白久、飛鳥、石寸、忍坂、長谷、畝火、耳無登御名者白豆、遠山近山爾生立流、大木小木乎本末打切氏持參來氏、皇御孫命乃瑞乃御舍仕奉氏、天御蔭日御蔭登隱坐豆、四方國乎安國登平久知食須故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登宣、







外祀申<sub>二</sub>供神物辨備畢<sub>一</sub>由於上卿<sub>四宮配申云々</sub>然而若有<sub>三</sub>不具諸司<sub>二</sub>者外祀申<sub>一</sub>代官<sub>一</sub>上卿著<sub>一</sub>北應座<sub>二</sub>式<sub>三</sub>大臣者入<sub>一</sub>自<sub>二</sub>北面東戶<sub>一</sub>著<sub>一</sub>東第三間北壁下座<sub>二</sub>南面<sub>一</sub>參議以上入<sub>一</sub>巽角<sub>一</sub>著<sub>一</sub>東第一間<sub>二</sub>北山抄西面<sub>一</sub>青標書物西面北上<sub>一</sub>傍書云延長二年伯安則申先例大臣入自西戶納言入自東戶參議入自北山抄西面云々而儀式及元年例納言入巽角王大夫入自神角著西第一間東四<sub>一</sub>或川<sub>一</sub>上卿召<sub>二</sub>召使<sub>一</sub>使稱唯參立<sub>二</sub>二人立<sub>一</sub>長<sub>一</sub>下壇<sub>一</sub>同音<sub>一</sub>唯<sub>一</sub>上宣<sub>一</sub>式乃省爾刀禰奉<sub>一</sub>入止宣戶<sub>一</sub>召使稱唯出<sub>一</sub>召<sub>一</sub>之<sub>一</sub>唯<sub>一</sub>式<sub>一</sub>部<sub>一</sub>省<sub>一</sub>率<sub>一</sub>群官<sub>一</sub>入<sub>一</sub>自<sub>二</sub>南門<sub>一</sub>著<sub>一</sub>南屋座<sub>一</sub>東上北面<sub>一</sub>五位<sub>一</sub>前<sub>一</sub>六位<sub>一</sub>後<sub>一</sub>入<sub>一</sub>御座座<sub>一</sub>西應前庭<sub>一</sub>左右馬寮各引<sub>一</sub>馬<sub>一</sub>二匹<sub>一</sub>立<sub>一</sub>力<sub>一</sub>禰<sub>一</sub>神部祝部等入<sub>一</sub>立<sub>一</sub>西應南庭<sub>一</sub>神祇官人降座<sub>一</sub>次上卿以下降<sub>一</sub>著<sub>一</sub>應前庭<sub>一</sub>兩儀砌上敷<sub>一</sub>南<sub>一</sub>中臣進宣<sub>一</sub>祝詞<sub>一</sub>十段<sub>一</sub>度別祝<sub>一</sub>唯<sub>一</sub>中臣退<sub>一</sub>上卿以下拍手<sub>一</sub>兩段<sub>一</sub>各復<sub>一</sub>本座<sub>一</sub>祝還<sub>一</sub>座<sub>一</sub>御巫廻<sub>一</sub>見<sub>一</sub>幣<sub>一</sub>物<sub>一</sub>三人出<sub>一</sub>自<sub>一</sub>西屋<sub>一</sub>始<sub>一</sub>史<sub>一</sub>二人持<sub>一</sub>簡<sub>一</sub>召<sub>一</sub>使<sub>一</sub>諸<sub>一</sub>社<sub>一</sub>祝<sub>一</sub>次第<sub>一</sub>班<sub>一</sub>幣<sub>一</sub>兩儀砌上<sub>一</sub>傍書<sub>一</sub>官<sub>一</sub>殿<sub>一</sub>朝集使入<sub>一</sub>京<sub>一</sub>訖<sub>一</sub>申<sub>一</sub>其<sub>一</sub>由<sub>一</sub>上<sub>一</sub>卿<sub>一</sub>以下<sub>一</sub>退出<sub>一</sub>近代<sub>一</sub>上<sub>一</sub>卿<sub>一</sub>立<sub>一</sub>伊<sub>一</sub>勢<sub>一</sub>幣<sub>一</sub>後<sub>一</sub>令<sub>一</sub>召<sub>一</sub>使<sub>一</sub>觸<sub>一</sub>辨<sub>一</sub>諸<sub>一</sub>社<sub>一</sub>幣<sub>一</sub>體<sub>一</sub>可<sub>一</sub>領<sub>一</sub>由<sub>一</sub>退出<sub>一</sub>自<sub>一</sub>左<sub>一</sub>近<sub>一</sub>陣<sub>一</sub>發<sub>一</sub>遣<sub>一</sub>伊<sub>一</sub>勢<sub>一</sub>使<sub>一</sub>延長十六<sub>一</sub>臨時<sub>一</sub>幣<sub>一</sub>使<sub>一</sub>在<sub>一</sub>月<sub>一</sub>次<sub>一</sub>祭<sub>一</sub>明<sub>一</sub>且<sub>一</sub>仍<sub>一</sub>付<sub>一</sub>伊<sub>一</sub>勢<sub>一</sub>幣<sub>一</sub>於<sub>一</sub>彼<sub>一</sub>使<sub>一</sub>同<sub>一</sub>十<sub>一</sub>延<sub>一</sub>引<sub>一</sub>停止<sub>一</sub>時<sub>一</sub>於<sub>一</sub>建<sub>一</sub>禮<sub>一</sub>門<sub>一</sub>前<sub>一</sub>行<sub>一</sub>大<sub>一</sub>被<sub>一</sub>更<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>上<sub>一</sub>卿<sub>一</sub>令<sub>一</sub>勘<sub>一</sub>日<sub>一</sub>行<sub>一</sub>之<sub>一</sub>辨<sub>一</sub>史<sub>一</sub>職<sub>一</sub>用<sub>一</sub>代<sub>一</sub>官<sub>一</sub>延長<sub>一</sub>外<sub>一</sub>記<sub>一</sub>職<sub>一</sub>用<sub>一</sub>代<sub>一</sub>官<sub>一</sub>以<sub>一</sub>收<sub>一</sub>立<sub>一</sub>馬<sub>一</sub>令<sub>一</sub>奉<sub>一</sub>天<sub>一</sub>所<sub>一</sub>伯<sub>一</sub>勘<sub>一</sub>事<sub>一</sub>五<sub>一</sub>位<sub>一</sub>已<sub>一</sub>上<sub>一</sub>副<sub>一</sub>無<sub>一</sub>之<sub>一</sub>依<sub>一</sub>無<sub>一</sub>代<sub>一</sub>官<sub>一</sub>例<sub>一</sub>免<sub>一</sub>伯<sub>一</sub>天<sub>一</sub>所<sub>一</sub>以<sub>一</sub>野<sub>一</sub>放<sub>一</sub>馬<sub>一</sub>令<sub>一</sub>充<sub>一</sub>天<sub>一</sub>德<sub>一</sub>五<sub>一</sub>二<sub>一</sub>上<sub>一</sub>卿<sub>一</sub>弁<sub>一</sub>外<sub>一</sub>記<sub>一</sub>史<sub>一</sub>皆<sub>一</sub>穢<sub>一</sub>仍<sub>一</sub>於<sub>一</sub>門<sub>一</sub>外<sub>一</sub>行<sub>一</sub>事<sub>一</sub>不<sub>一</sub>著<sub>一</sub>齋<sub>一</sub>院<sub>一</sub>貞<sub>一</sub>觀<sub>一</sub>以<sub>一</sub>大<sub>一</sub>炊<sub>一</sub>頭<sub>一</sub>直<sub>一</sub>恒<sub>一</sub>朝<sub>一</sub>臣<sub>一</sub>爲<sub>一</sub>辨<sub>一</sub>代<sub>一</sub>天<sub>一</sub>所<sub>一</sub>三<sub>一</sub>三<sub>一</sub>諸<sub>一</sub>社<sub>一</sub>致<sub>一</sub>闕<sub>一</sub>意<sub>一</sub>弁<sub>一</sub>少<sub>一</sub>納<sub>一</sub>言<sub>一</sub>令<sub>一</sub>侍<sub>一</sub>從<sub>一</sub>等<sub>一</sub>同<sub>一</sub>留<sub>一</sub>位<sub>一</sub>祿<sub>一</sub>到<sub>一</sub>公<sub>一</sub>卿<sub>一</sub>俸<sub>一</sub>祿<sub>一</sub>尤<sub>一</sub>可<sub>一</sub>宣<sub>一</sub>令<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>云<sub>一</sub>依<sub>一</sub>定<sub>一</sub>中<sub>一</sub>康<sub>一</sub>保<sub>一</sub>二<sub>一</sub>七<sub>一</sub>七<sub>一</sub>

相嘗祭十一月

神祇令曰、仲冬上卯相嘗祭、謂大倭、住吉、大神、穴師、恩智、意富、葛木、鴨、紀、伊國、日、前、神、等、類、是、也、神、主、各、受、音、幣、而、祭、

延喜式<sub>二</sub>四時<sub>一</sub>曰、十一月祭  
相嘗祭<sub>七十一</sub>座

太詔戶社二座、坐左京絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鯢一斤四兩、堅魚五斤四兩、腊八斤、凝海藻六斤、鹽二升、海藻四斤、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波管瓶酒垂匣等呂須伎高盤片盤短女坏管坏陶白各四口、酒稻百束、神  
鴨別雷社一座、絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻三斤、凝海藻三斤、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波管瓶酒垂匣等呂須伎高盤片盤短女坏管坏陶白各二口、酒稻五十束、神  
鴨御祖社二座、絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鮑一斤四兩、堅魚五斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、腊八斤、鹽二升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波管瓶酒垂匣等呂須伎高盤片盤短女坏管坏陶白各二口、酒稻百束、神  
鴨川合社一座、絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊四斤、鹽一升、筥一合、海藻凝海藻各二斤四兩、廻缶水瓮山都婆波小都婆波管瓶酒垂匣等呂須伎高盤片盤短女坏管坏陶白各二口、酒稻五十束、神  
松尾社二座、絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鮑一斤四兩、堅魚五斤四兩、腊八斤、海藻四斤、凝海藻六斤、鹽二升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波管瓶酒垂匣等呂須伎高盤片盤短女坏管坏陶白二口、酒稻百束、神



出雲井上社一座、絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、堅魚二斤十兩、鮑十兩、海藻二斤、凝海藻三斤、腊四斤、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏管坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神

水主社一座、絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、堅魚五斤四兩、鮑一斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、鹽二升、腊八斤、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏管坏陶白各二口、酒稻百束、稅、神

片山社一座、絹二匹、絲一絢一分、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏管坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神

木島社一座、絹二匹、絲一絢、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤四兩、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏管坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、正

已上九箇社坐山城國、

大和社三座、絹六匹、絲八絢四銖、調布十二端一丈六尺、庸布三段二尺、木綿八斤四兩、鮑二斤、堅魚九斤四兩、脯魚十九斤十四兩、海藻凝海藻各十三斤四兩、鹽二斗、筥三合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏管坏小坏片盤短女坏陶白各四口、酒稻二百束、稅、神

石上社一座、絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤一兩、鮑

十斤十兩、海藻二斤、凝海藻三斤、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏管坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神

大神社一座、絹三匹、絲三絢四銖、調布六端八尺、庸布一段一丈四尺、木綿四斤二兩、鮑一斤五兩、堅魚五斤、與理刀魚三斗、鹽一斗、脯魚海藻凝海藻各六斤十兩、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏管坏小坏陶白各二口、酒稻二百束、稅、神

宇奈足社一座、絹二匹、絲一絢一兩三分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、海藻二斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏管坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神

村屋社一座、絹一匹、絲一絢三分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊一斤、海藻一斤十兩、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏管坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神

穴師社一座、絹二匹、絲一絢一分、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿一斤、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏管坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神

卷向社一座、絹二匹、絲一絢一兩三分、調布三端四尺、庸布一端一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤十兩、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏管坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅、神



池社一座、絹二匹、絲一絢一兩一分三銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、海藻二斤十兩、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、神稅

多社二座、或作大社絹二匹、絲三絢四銖、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤十兩、鹽一升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶白各二口、酒稻五十束、神稅

葛木鴨社二座、絹二疋、絲三絢四銖、調布六端八尺、庸布三段、木綿一斤十兩、腊四斤、鮑十兩、堅魚二斤十兩、海藻二斤十兩、鹽四升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波高盤片盤酒垂匱等呂須伎短女坏筥坏陶白各二口、酒稻百束、神稅

飛鳥社四座、絹八疋、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、堅魚八斤十兩、腊二斗、海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏酒坏陶白各八口、酒稻二百束、百八束神稅、九十二束正稅

甘橙社四座、絹八疋、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、堅魚八斤十兩、腊五斤、海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏酒壞陶白各八口、酒稻二百束、神稅

高鴨社四座、絹八疋、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤十兩、海藻八斤八兩、凝海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片

盤短女坏筥坏小坏酒盞陶白各八口、酒稻二百束、正稅

高天彦社一座、絹二疋、絲一絢一分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、綿三屯、木綿十三兩、鮑十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、鹽一升、海藻凝海藻各二斤十兩、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶白各二口、酒稻五十束、神稅

金峯社一座、絹二疋、絲一絢一分、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤十兩、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶白各二口、酒稻五十束、神稅

葛木一言主社一座、絹二疋、絲一絢、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鹽一升、鮑一斤十兩、腊四斤、堅魚二斤、海藻凝海藻各二斤、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶白各二口、酒稻五十束、神稅

火雷社二座、絹四疋、絲二絢、綿六屯、調布六端二丈、庸布二段二丈八尺、木綿二斤四兩、鮑二斤四兩、堅魚五斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、腊八斤、鹽二升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各二口、酒稻百束、神稅

已上十七箇社坐大和國、

枚岡社四座、絹八疋、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、堅魚八斤八兩、腊二斗、海藻凝海藻各八斤八兩、鹽四斗、筥四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏酒盞陶白各八口、酒稻二百束、正稅



恩智社二座、絹二疋、絲三絢四銖、調布三端四尺、庸布一端一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四升、海藻二斤六兩、鹽一升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶白各二口、酒稻五十束、稅神

弓削社二座、絹四疋、絲四絢、綿四屯、調布六端、庸布四段、木綿二斤、鮑一斤四兩、堅魚二斤、腊四升、海藻四斤、鹽四升、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏陶白各四口、酒稻二百束、稅正

已上三箇社坐河內國、

住吉社四座、絹四疋三丈、絲四絢八兩四銖、綿三屯三兩、木綿三斤十兩、調布八端三丈四尺、庸布一段一丈三尺、齋人潔衣絢二疋、鮑二斤八兩、堅魚六斤十五兩、腊一斗、鹽五升、海藻九斤十兩、凝海藻九斤十五兩、筥四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各八口、酒稻二百束、稅神

大依羅社四座、絹八疋、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、腊五升、堅魚八斤十兩、海藻八斤八兩、凝海藻八斤八兩、鹽四斗、筥四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各八口、酒稻二百束、稅正

難破大社二座、絹四疋、絲六絢、綿六屯、調布六端、庸布一段二丈三尺、木綿二斤、鮑十兩、腊五升、鹽一斗、堅魚四斤四兩、海藻四斤四兩、凝海藻四斤四兩、筥二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏短女坏陶白各六口、酒稻百束、稅正

下照比賣社一座、或號比賣社絹二疋、絲三絢、綿三屯、調布三端、庸布一段一丈七尺、木綿一斤八兩、鮑十兩、堅魚十兩、腊五升、海藻二斤十兩、凝海藻二斤二兩、鹽一升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅正

新屋社一座、絹二疋、絲三絢、綿二屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十斤三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、海藻凝海藻各三斤十兩、腊四升、鹽四升、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓶酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各二口、酒稻百束、稅正

廣田社一座、絹二疋、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波酒垂匱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅神

生田社一座、絹二疋、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、筥一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波高盤片盤短女坏筥坏等呂須伎酒垂筥瓶筥坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅神

長田社一座、絹二疋、絲一絢、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、筥一合、海藻二斤十兩、廻缶水瓮山都婆波小都婆波酒垂匱等呂須伎筥瓶高盤片盤短女坏筥坏小坏陶白各二口、酒稻五十束、稅神

已上八箇社坐攝津國、

目前社一座、絹四疋、絲三絢四銖、綿八屯五兩、調布六端八尺、木綿二斤八兩、酒稻百束、稅神



國懸社一座、絹四疋、絲三絢四銖、綿八屯五兩、調布六端八尺、木綿二斤八兩、酒稻百束、神稅  
 伊太祁曾社一座、絹二疋、絲三絢、調布三端一丈七尺、木綿十三兩、酒稻百束、神稅  
 鳴神社一座、絹一疋、絲三絢、調布三端、木綿十三兩、酒稻五十束、神稅  
 已上四箇社坐紀伊國、

右預相嘗祭之社如前、十一月上卯日祭之、其所須雜物、預申官請受、付祝等奉班、酒料稻者用神稅及正稅、

同式三臨時日、凡因幡伯耆兩國所進相嘗祭料荒筥八十八合、國別四十四合每年以神稅交易、十月以前差使進上、

連胤按るに、此祭の事、西宮記、北山抄、江次第等に載せず、さるはいとやく廢れたるか、さて山城國賀茂社にのみ遺れる事、標目の條に云り、

新嘗祭

延喜式二臨時日、十一月祭、

新嘗祭奠幣案上二神三百四座、大一百九十八所、座別絶五尺、五色游繩各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍鋒一竿、社別庸布一丈四尺、蓑葉薦五尺、前一百六座、座別幣物准社法、但除庸布、

右中卯日於此官齋院官人行事、諸司不供奉但願幣及造供神物料度、中臣祝詞料准月次祭、連胤按るに、此祭の事、本文の外諸書所見なし、さるは月次祭に准じて、かへる事なけれ

ばなるべし、國史以下に、十一月中卯日新嘗祭とあるは、皆中和院にて行はる方といふ也、

祈雨祭

延喜式三臨時日、祈雨神祭八十五座、並大

賀茂別雷社一座	賀茂御祖社二座	松尾社二座
稻荷社三座	水主社十座	樺井社一座
木島社一座	羽束石社一座	乙訓社一座
和岐社一座	貴布禰社一座 <small>已上山城國</small>	
大和社三座	大神社一座	石上社一座
大社二座 <small>或作多社</small>	一言主社一座	片岡社一座
廣瀬社一座	龍田社二座	巨勢山口社一座
葛木水分社一座	賀茂山口社一座	常麻山口社一座
大坂山口社一座	膽駒山口社一座	膽駒社一座
石村山口社一座	耳成山口社一座	養父山口社一座
都祁山口社一座	都祁水分社一座	長谷山口社一座
忍坂山口社一座	宇隨水分社一座	飛鳥社四座
飛鳥山口社一座	畝火山口社一座	吉野山口社一座



吉野水分社一座 丹生川上社一座已上大和國  
 枚岡社四座 恩智社二座已上河内國 大鳥社一座和泉國  
 住吉社四座 大依羅社四座 難波大社二座  
 廣田社一座 生田社一座 長田社一座  
 新屋社三座 垂水社一座 名次社一座已上攝津國  
 座別絹五尺、五色薄繩各一尺、絲一絢、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裏鶯半枚、每社調布二端、  
 夫一人、丹生川上社貴布禰社、各加黑毛馬一疋、自餘社加庸布一段、其霖雨不止祭料亦同、但  
 馬用白毛、

凡奉幣丹生川上神者、大和社神主隨便向社奉之、

速風 按るに、此祭の事は、臨時祭式に載するのみにして、神祇令はもとより、此帳に注せ  
 らず、西宮記、北山抄、江次第等にも、其儀を舉られず、また丹生川上社、貴布禰社、および其  
 社々に祈雨の事は、國史記録等にわれども、此八十五座の座敷の事は見えず、此式祝詞の  
 卷に祝詞も載せず、さればた、炎旱霖雨の時に至り、神祇官幣物を辨條して頒つのみなる  
 べし、故に社號幣物をあつして、其班幣の次第も載せざるにやあらん、但し丹生貴布禰二  
 社の儀は左の如し、

江次第曰、祈雨止雨奉幣、上卿著仗座、藏人仰祈雨若止雨奉幣日時可令勘申由、上卿便  
 可尋問社敷并使誰人乎由、或以藏人為使之故也、上卿移著外座、令藏人召辨仰可令

勘申日時由、辨進日時、上卿召外記管入之、付殿上辨若藏人令内覽奏聞、不起被返下  
 之後給外記、作入管又仰外記可令進神祇官差文、若以藏人為使時、唯差召内記一仰可  
 草進宣命、由、外記進差文、每社祇六位官上卿見之返給、仰可度官由、近辨進神祇官幣料請  
 文、上卿見之返給、或奏之、然而依用二前料、五色繩各五尺、生絹各五尺、以上入絲各二絢、綿各二  
 屯、木綿各貳斤、麻各貳斤、調布各貳段、薦各壹枚、切各壹枚、衛士各一人、黑毛馬各一匹、止雨時  
 辨下史令成宣旨十枚、書宣旨五枚、一枚、下左衛門、一枚、下右衛門、一枚、下左馬、一枚、  
 下右馬、小宣旨三枚、一枚、下木工寮、一枚、下管內米五斗、一枚、下管內、國宣旨二枚、使一枚、下天和國丹  
 一枚、下山城、以上各使一人、從三神部一人、執幣夫一人、赤毛御馬一匹、飼丁一人、内記進宣命草  
 入、上卿見了便令内記内覽、歸來後上卿令持内記著御所、付藏人奏聞、返給之後歸仗  
 座、給内記令清書、内記進清書令内覽、并付御所奏聞如元、但今度開御湯殿了山參  
 進、歸仗座召使於賦、一一給宣命如恒、先是辨仰史令、於左衛門、立於外記門  
 南北、丹生料立南、貴御馬同立於其傍、使退出、若使中御馬者、以藏人奏聞、奉可給山仰  
 外記、上卿退出、若以藏人為使者、可給所牒、仍不成使宣旨、藏人多用行事之人小浴、日又  
 可忌穢惡事、宣命事、大内記不參者、仰成幾六位内記、若又不參者、奏事山可令大業辨若成業外記、若令  
 付御所奏聞、清書之時、即給外記令清書、更不給作者弁、或既作  
 者弁可内覽云々、隆俊既、然而依用方記令外記内覽、為云々

朔野群衆曰、祈雨

天皇我詔旨止、掛畏某大神乃廣前爾、恐美恐美中給停申久、今年春始興、雨澤時時仁降天、農稼頗宜加



倍之聞食御坐都留近來不雨之旱氣漸盛成利、百姓乃農業、損傷之都倍聞食天、如此之事波大神乃厚願廣助仁依天、攘除倍物奈利所念行天奈故是以、吉日辰辰擇定天、官位姓名乎、差使天、禮代乃大幣選、令捧持天、奉出賜布、大神此狀乎、平久聞食天、旱雲不起之、雨澤降給比、農業如意之、至于秋收仁、聊無損害之、百穀豐穰之悅、令有給天、天皇朝廷乎、實位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守仁、護幸奉給比、天下太平、萬民安樂爾、助恤給倍恐美恐美申賜止申、應和三年六月九日

天皇我詔旨其方掛畏支某大神乃廣前仁、恐美恐美申賜止申久、去春以來、年穀豐登奈留由選、度度比令申給不、冥感如念仁之、農圃可宜止聞食之、悅大坐須聞仁、近日陰雲久凝利、暴雨頻降天、農業仁有害止、驚歎給比、激情無聊之、故是以、吉日辰辰擇定天、官位姓名乎、差使天、禮代乃、御幣選、令捧持天奉出給布、大神此狀乎、平久聞食天、重雲之色早散之、洪水之愁不聞天、收獲之終末天風霜無患久、年穀豐稔仁、人民快樂天、不祥乎未兆仁消除天、天皇朝廷乎、實位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守仁、護幸倍奉給天、天下太平仁、海內靜謐仁、天地 長久仁護給倍恐美恐美申給波久申、長元三年八月十六日

止雨二社  
天皇我詔旨止、掛畏支某大神乃廣前爾、恐美恐美申賜止申久、去春以來、時雨若比、年穀豐登奈留聞食志、悅大坐須處爾、頃日呂雨脚頻灑支、農民頗愁止聞食天、早屬晴天天、稼穡豐饒其事波大神乃廣支御助其可在奈利所念行且奈故是以、吉日辰辰擇定天、官位姓名選差使天、禮代乃御幣爾、赤毛御馬一匹選奉爾天、奉出賜布、大神此狀乎平久安久聞食天、秋收冬藏之勤無妨久、風水旱蝗之難

不聞之、天皇朝廷選、實位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守仁、守幸奉給且、玉體安穩、黔首泰平仁、護恤見給倍恐美恐美申給久申、嘉承三年八月二日

名神祭

- 延喜式三臨時日、名神祭二百八十五座、
- |                            |                             |                                  |
|----------------------------|-----------------------------|----------------------------------|
| 園神社一座                      | 韓神社二座 <small>已上學宮內省</small> | 賀茂別雷神社一座                         |
| 賀茂御祖神社二座                   | 松尾神社二座                      | 稻荷神社三座                           |
| 貴布禰神社一座                    | 鴨川合神社一座                     | 御井神社一座                           |
| 葛野月讀神社一座                   | 木島坐天照魂神社一座                  | 平野神社四座                           |
| 梅宮神社四座                     | 乙訓神社一座                      | 酒解神社一座 <small>亦兼山崎神已上山城國</small> |
| 春日神社四座                     | 大和神社三座                      | 石上神社一座                           |
| 多坐神社二座 <small>或號太社</small> | 飛鳥神社四座                      | 高市御縣神社一座                         |
| 氣吹雷神社二座                    | 大神神社一座                      | 太玉神社四座                           |
| 穴師神社一座                     | 高屋安倍神社三座                    | 大名持御魂神社一座                        |
| 丹生川上神社一座                   | 金峯神社一座                      | 鴨神社二座                            |
| 葛木御歲神社一座                   | 葛木一言主神社一座                   | 高鴨神社四座                           |
| 高天彥神社一座                    | 葛木火雷神社二座                    | 片岡神社一座                           |
| 火幡神社一座                     | 廣瀨神社一座                      | 龍田神社二座                           |



- 平群坐紀氏神社一座已上大
- 杜木神社二座
- 住吉神社四座
- 比賣許曾神社一座亦號宇照比賣
- 廣田神社一座
- 阿射加神社三座
- 眞墨田神社一座
- 日御御子神社一座
- 角避比古神社一座
- 三島神社一座
- 阿波命神社一座
- 氷川神社一座
- 玉前神社一座上總國
- 大洗磯前藥師菩薩神社一座
- 吉田神社一座
- 小野神社二座
- 建部神社一座
- 恩智神社二座
- 飛鳥戶神社一座已上河內國
- 大依羅神社四座
- 新屋神社三座
- 生田神社一座
- 多度神社一座已上伊勢國
- 大縣神社一座
- 孫若御子神社一座
- 微瀨神社一座已上遠江國
- 伊古奈比咩命神社一座
- 楊原神社一座已上伊豆國
- 金佐奈神社一座已上武藏國
- 香取神宮一座下總國
- 靜神社一座
- 酒烈磯前藥師菩薩神社一座
- 日吉神社一座比叡國同
- 川田神社二座
- 枚岡神社四座
- 大鳥神社一座和泉國
- 難波生國魂神社二座
- 垂水神社一座
- 長田神社一座已上攝津國
- 太神神社一座大政作多
- 熱田神社一座
- 高座結御子神社一座已上尾張國
- 淺間神社一座駿河國
- 物忌奈命神社一座
- 寒川神社一座相模國
- 安房神社一座安房國
- 鹿島神宮一座
- 筑波山神社一座
- 稻田神社一座已上常陸國
- 佐久奈度神社一座
- 御上神社一座

- 奥津島神社一座
- 仲山金彦神社一座美濃國
- 生島足島神社二座已上信濃國
- 赤城神社一座已上上野國
- 坊田嶺神社一座
- 志波姬神社一座
- 零羊崎神社一座
- 多河神社一座
- 大高山神社一座
- 月山神社一座已上出羽國
- 大虫神社一座已上越前國
- 伊夜比古神社一座越後國
- 麻氣神社一座
- 籠神社一座
- 大宮賣神社二座已上丹後國
- 伊豆志神社八座
- 雷神社一座
- 伊香神社一座
- 南方刀美神社二座
- 貫前神社一座或作三拔
- 二荒神社一座下野國
- 志波彦神社一座
- 伊達神社一座
- 拜幣志神社一座
- 伊佐酒美神社一座
- 子眉嶺神社一座已上陸奥國
- 若狹比古神社二座若狹國
- 氣多神社一座能登國
- 出雲神社一座
- 櫛石窓神社二座已上丹波國
- 大虫神社一座
- 粟鹿神社一座
- 山神社一座
- 檜椒神社一座
- 水尾神社二座或水作三已上近江國
- 穗高神社一座
- 伊加保神社一座
- 都都古和氣神社一座
- 鼻節神社一座
- 東屋沼神社一座
- 計仙麻神社一座
- 宇奈己呂和氣神社一座
- 大物忌神社一座
- 氣比神社七座
- 射水神社一座越中
- 小川月神社一座
- 大川神社一座
- 小虫神社一座
- 夜夫神社二座
- 戶神社一座
- 海神社一座已上五馬國



- 宇倍神社一座因幡國
- 山良比女神社一座
- 伊勢命神社一座已上隱岐國
- 中臣卯邊神社一座
- 中山神社一座美作國
- 速谷神社一座
- 住吉荒御魂神社三座長門國
- 國懸神社一座
- 都麻都比賣神社一座
- 志磨神社一座
- 淡路伊佐奈岐神社一座
- 天日鷲神社一座已上阿波國
- 大山登神社一座
- 志加海神社三座
- 八幡神社一座
- 美奈宜神社三座已上筑前國
- 八幡比賣神社一座豐前國
- 熊野神社一座
- 宇受加命神社一座
- 海神社三座
- 家島神社一座
- 安仁神社一座備前國
- 伊都岐島神社一座
- 丹生都比女神社一座
- 伊太郎曾神社一座
- 鳴神社一座
- 靜火神社一座
- 大和大國魂神社一座已上淡路國
- 粟井神社一座讃岐國
- 野間神社一座
- 住吉神社三座
- 筑紫神社一座
- 高良玉垂命神社一座
- 田島坐神社一座肥前國
- 杵築神社一座已上出雲國
- 水若酢命神社一座
- 粒坐天照神社一座
- 伊和神社一座已上播磨國
- 吉備津彦神社一座備中國
- 多家神社一座已上安藝國
- 日前神社一座
- 大屋都比賣神社一座
- 伊達神社一座
- 須佐神社一座已上肥前國
- 大麻比古神社一座
- 村山神社一座
- 阿沼美神社一座已上伊豫國
- 宗像神社三座
- 竈門神社一座
- 豐比咩神社一座已上筑後國
- 健甕龍命神社一座肥後國

- 住吉神社一座
- 中津神社一座
- 和多都美神社一座
- 和多都美神社一座
- 和多都美神社一座
- 加<sub>二</sub>繩五丈五尺、以<sub>一</sub>布一端代<sub>二</sub>絲一絢、

兵主神社一座  
 天手長男神社一座  
 和多都美御子神社一座  
 太祝詞神社一座  
 高御魂神社一座  
 住吉神社一座已上對馬島  
 月讀神社一座  
 天手長比賣神社一座已上安藝國

連亂 按るに、此祭の事も祈雨祭に同じく、殊に前後の祀に見えざる也、さるに此帳其社々の下に、必名神大とあるをり、さては其品の重きに似て、幣物は殆ど軽く見え、續日本紀、天平二年十月庚戌、遣使奉<sub>二</sub>渤海信物於諸國名神社、とあるがはじめにて、同紀、天平寶字八年十一月癸丑、遣使奉<sub>二</sub>幣於近江國名神社、先<sub>一</sub>是仲麻呂之走<sub>二</sub>據近江<sub>一</sub>也、朝廷遙望<sub>二</sub>隋國神、而莫<sub>一</sub>出<sub>二</sub>境内<sub>一</sub>即伏<sub>二</sub>其誅、所以<sub>一</sub>養<sub>二</sub>宿禰<sub>一</sub>也、日本紀略、延曆十一年六月戊子、奉幣於畿内名神、以<sub>二</sub>皇太子病<sub>一</sub>也、同十三年九月戊戌、奉<sub>二</sub>幣於諸國名神、以<sub>一</sub>遷<sub>二</sub>于新都<sub>一</sub>及欲<sub>二</sub>征<sub>二</sub>蝦夷<sub>一</sub>也、この外多くは、祈雨止雨の奉幣也、さて三代實錄までは、名神を祭らるる事見ゆれど、其後は考へ得ず、また大曆には色目を増るゝ由なれど、其差別をいへる所もなし、然れど此式に載せられたれば、後も邂逅には行はれけむか、延喜の、ち程なく絶たるにや猶考ふべし



神社叢錄第二之卷

○宮中

宮中神三十六座

中臣朝臣連胤謹撰

宮中は音讀也、さて宮中とは、宮城四壁の内をいふ、拾芥抄宮城に委しく見えたり、○神は加美と訓べし下なる神の字、皆これに倣へ、○三十六座は音讀也、此後國郡の下に、幾千座とある皆この例也、この三十六座は、宮中に坐て、

毎年二月四日の祈年祭に預り給ふ限り也、

神祇官西院坐御巫等祭神二十三座

並大月次新嘗並以下本書分注也、下皆是に倣ふべし

神祇官西院は音讀也、今は廢亡せり、さて神祇官は、拾芥抄百官に、宮城内、郁芳門南掖、また同抄宮城指圖に、在郁芳門内大炊寮南、また指圖に、雅樂寮北、大炊寮南、廩院東にありと云り、皆同所の西院とは、此宮内に、東院西院とてある、其西院をいふ也、大内裏圖考證松入道に古文書曰、神祇官内東西兩院事、八足門内北兩院、御幣殿、謂之齋院、或曰棟門内東中屋、謂之東院、或曰厨とあり、○坐は末須と訓べし、下なる坐の字、皆これに倣ふ、○御巫等は美加牟古良と訓べし、和名鈔には、巫加牟祝女也、とあれど、はかくよみならへり、御巫は、職員令集解に、釋云、巫者知鬼神之道者也、まして少女を用ゐるれば、道を知るといふべきは、巫の字も、よくかなはむ事を知るべし、在男曰巫、在女曰覡、一説在男曰覡、在女曰巫、此説に倣ふべし、此令取此説、

別記云、御巫五人、倭國巫二口、各給一廩守一人、又免戸調役、臨時祭式に、凡御巫御門巫生島巫各一人、取庶女堪事充之、但考選准散事官人、○祭神は末都留加美と訓べし、下なる祭に倣へ、○二十三座は音讀也、

明徳記に、畠山右衛門佐は、神祇官の北、大庭の椋木を南にみて、土御門の末に陣を取る、云々、大内介義弘は、神祇官の森を後にあて、二條大宮に陣を取る、○伯家部類に、神祇官屋敷事、秀吉太閤檢地の後より無之候歟、八神殿は慶長二年吉田へうつす、此時分迄は二條の城は曾て以てなかりしなり、又云、雅朝王維時、雅陳王明書、寛永元年月日雅朝王云、神祇官は大内裏の辰巳也、今は二條道の北に當るべし、其屋敷卅九年許已前、予が卅余の時迄屋敷あり、其頃は芝に成てありしを、太閤檢地の時かはりて、それより絶たると也、○吉田家寛文九年の注進に、神祇官之舊跡者、二條御城之近邊也、應仁兵亂之時令回祿候、其後社頭計有之候得者、天正十四年十一月十二日、後陽成院御即位由奉幣之儀式迄者、於彼地被執行畢、同十五年豊臣秀吉公聚樂亭造畢之刻、以伴地願賜諸士之宅地、因茲神祇官斷畢、天正十八年三月十三日、神祇官之八神殿、於吉田齋場所境内可有御再興之由被仰出、云々、慶長十四年八月十五日、伊勢兩宮造替被奉官幣二付、神祇官之事於吉田可有執行之由、東照宮之御説、神宮傳奏大炊御門大納言經頼卿、被申渡於卜部兼見養治候、同年九月十六日、奉幣使發遣之刻、於八神殿前、神祇官之作法被執行訖、是於吉田神祇官作法之始也、○御湯殿上の日記に、慶長十四年九月十六日、一しやほう(いちん



のきあり、略一しやほうへむかしはぢんぢくわんにてとりあこなはれ候へども、いまは  
 そのところなきによりて、よし田にてあこなはる、さしゆいせへくたりありよし御あ  
 ん内申、○小槻孝亮宿禰肥に、元和三年三月七日、神祇官代之事、今度吉田者不可被用、  
 仍内野に神祇官屋敷四町有之、彼地今度八神殿被勸請、山有風聞、同月十日參、廣橋中  
 納言神祇官參向之事、令言談、向神祇官屋敷假屋、内野之古跡神祇官屋敷也、同月十二日、東照社就一社  
 奉幣、神祇官參向、内野也云々、連風竊に按るに、吾神國の風儀にして、神祇を重じ給ふ事  
 は、昔家遺誠の初條に、凡仁君之要政者、以撫民爲本、民者神明賚也、本朝之綱教以敬  
 神明爲最上、神德之微妙豈有他哉、禁秘御鈔の開卷に、凡禁中作法、先神事、後他事、  
且恭敬神之敬慮無懈怠云々、と宣へるが如く更に辨をまたず、然るにこの神祇官の形  
もなく廢絶たるは、枉津日のいかに禍れる時ならし、元和の頃、太平の御世に及ばむとす  
るや、再興の企もありけむか、今に不成就して二百餘年に至れり、時節ありて舊儀に復し  
なば、神明の歡喜かぎりなく、いよく寶祚無窮千秋萬歳を護り給はむものをや、

雜事

御記云、中右記大治二年、天曆七年二月十二日壬戌、丑刻藍蘭町有出火事、延及神祇官、後應一  
 宇燒亡了、遣左少將國紀、防止其火、十三日癸亥、令有相朝臣仰左大臣、可令卜神祇官  
 火事祟事、可令行大祓事、遣失火百姓賑給例宜、中、又令給祿今夜失火登神祇官商  
 倉撲滅者事、左大臣令有相朝臣奏、陰陽寮擇中大祓日文、十四日、令改勘申、又令陰陽寮

卜申今夜有失火事、延及神祇官事、文推之合、怨靈氣所致、云々、中左大臣令有相朝臣  
 奏、少外記御船傳說勘申、失火百姓賑給例文、承和九年七月十九日、寛平三年六月十九日、延喜十一年二月十九日、同日、同十四年四月二日、同年五月二日、有此例云々、  
 又勘申今夜失火、登高倉、消火者次名、山城國乙訓社、祝部良茂、陰陽寮改擇中大祓日時文、今日、令仰  
 遣檢非違使注申燒亡烟、依前例以米鹽令賑給、中撲滅火者眞茂可令給祿、又大  
 祓日依定日、卅日庚寅、天快晴、今夕有大祓、左大辨右少辨著行、依圓韓神并神祇官火事、  
 被行大祓也、○百練抄、大治二年二月十四日、圓韓神社、神祇官以下八神殿、并内外院門  
 垣、中燒亡、但後日兼俊宿禰曰、八神殿自元無御正躰、下略、○中中右記、大治二年三月廿日  
 天晴、上神祇官内有古木、於件木本准小社奉幣帛、供祭之木燒亡了者、難不入定詞、何  
 様可被沙汰哉如何、予申云、件官之中樹木甚多、皆悉燒了非此限、若他之樹不燒者、於  
 彼木本被行歎、殿下仰云、尤可然也、以頭中將尋之處、實檢火事之史中云、樹木不燒  
 木多者、然者於彼木下可奉幣歎、神祇官之内木也、有何憚哉、人々皆同予申也、○五  
 海、安元三年四月廿八日、燒亡所々、神祇官八神殿御正躰燒失、○百練抄、治承元年四月廿八  
 日、亥刻火起、自樋口宮小路、火焰如飛、八省、大極殿、小安殿、青龍白虎樓、應天、會昌、朱雀  
 門、大學寮、神祇官八神殿、眞言院、民部省、式部省南門、大膳職、勸學院等拂地燒亡、中此以  
 後大極殿無造營、○同抄、貞應元年六月五日、今夜神祇官八神殿遷宮、○帝王編年記、永仁二  
 年九月丁丑晦神祇官八神殿御戶自開盜犯所爲歎、○正和御記、正和三年四月十二日乙未、神  
 祇官八神殿修造日時文奏之、今月十五日戊戌時已若中、云々、○玉英、曆應三年三月十九日、



大藏卿雅仲卿爲敕使來、神祇官可有修造武家教發於神祇者、凡無御座之由、伯業資王所申也、此事如何、又任先例、先可有假殿造營、歟、將又直可被作正殿如何、且可計申、且可相尋卜部證者、予申云、早可相尋一候、神祇官神祇爲榊木之條勿論歟、伯中條不審、又須直作正殿也、其故者神體御座之時、先作假殿奉遷神體之後、有正殿造營、於此度者神祇已紛失給、假殿無其陰、雖片時可被急正殿也者、

御巫祭神八座

並大月次新嘗中宮東宮御巫亦同

御巫は前に同じ、さて八座は、舊事紀天皇に、神武天皇元年、仰從皇天二祖詔、建榊神籬矣、復所謂高皇產靈、神皇產靈、魂留產靈、生產靈、足產靈、大宮寶神、事代主神、御膳神、今御巫齋祭矣、古語拾遺とあるが濫觴也、○中宮東宮御巫亦同とは、臨時祭式の末に、凡御巫、云々、其中宮東宮唯有御巫各一人、とありて其職掌大御巫にかけらねば、亦同といへり、

伯家部類に、文保元年二月十一日應始及拜賀記に載する神祇官圖に、西院西築垣内面、八

社相並東面北爲第一殿、とあり、

神産日神

高御産日神

神産日は加牟美武須昆、高御産日は多加美武須昆と訓べし、古語拾遺四時祭式、祝詞祝詞式祈年祭等には、神魂高御魂と書り、○祭神明か也、○日本紀神代卷上、一書曰、天地初判、中又曰、高天原所生神名、曰天御中主尊、次高皇產靈尊、次神皇產靈尊、皇產靈、此云古事記神代天地初發

之時、於高天原成神名、天之御中主神、次高御産日神、次神産日神、舊事紀、神代七代、耦生天神、中別高皇產靈尊、亦名高魂尊、亦名高木尊、下略次神皇產靈尊、亦名神古語拾遺に、天地初判之初、天中所生之神名、曰天御中主神、次高皇產靈尊、古語多賀美武須昆、是皇親神留命、此神子○日本紀神武天皇卷に、昔我天神、高皇產靈尊、大日靈尊、舉此豐葦原瑞穗國、而授我天祖彥火瓊杵尊、又云、敕道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、用汝爲齋主、授以嚴姫之號、同四年春二月壬戌朔甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑿、光助朕躬、今諸虜已平、海内無事、可下郊祀天神、用申大孝者也、乃立靈時於鳥見山中、其地號曰上小野榛原、下小野榛原、用祭皇祖天神焉、古事記に高倉下夢に、天照大神、高木神二柱神之命以、召延御魂而詔云々、とあるも此條なるべし、

舊説に八神殿の起り也、八神殿に日神なきは、高木神と同殿に祭る故、別に殿を建ざるか、日神は天皇御同殿御同躰に齋祭り給ふ也、といへり、連胤按るに、八神殿は、もとより天皇が御壽命を守ります神の御魂に、朝御食夕御食たゆる事なく、奉仕らむ神等を加へてかの鎮魂に祭るなれば、こゝに日神を齋くべき由縁は非る也、日神は崇神天皇の御世まで、牀を同くし殿をひとつにしておれませれば也、○祝詞考賀茂良頭書に、古事記、日本紀とも、高御魂神魂とあるを、神祇官には、神魂を先に申來しにや、貞觀元年正月の紀にも、この祝詞と同じくあり、と云り、連胤按るに、惣て神の祭りかたは、後世より道理コトワザを以ていふとは、いたく違へるが多し、爰も其一也、祈年祭の幣にも、高御産日神と大宮女神のみ、馬一匹加へられし事なども、いかなる由縁かはかりまられず、○古事記傳三の卷に、神



産巢日神は、高御産巢日と並びたる御名なれば、此も必神御とあるべきことなり、然るに延喜式出雲國造神賀辭にも高御魂神魂命、また祈年祭詞にも神魂高御魂、また御巫祭神八座の中なるも、神産日神高御産日神とある、此等に此二柱を並舉たるに、何れも神魂の方には御字無し、故考るに、凡て古言に同音の二つ重なるをば、約めて一つに云例此彼とあれば、これも神御と美の重なる故に、多く約めて申しならへるなり、と云り、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位神産日神、高御産日神並從一位、同年

二月丁亥朔、神祇官從一位神産日神、高御産日神、並奉授正一位、

玉積産日神

玉積産日は多麻都女武須昆と訓べし、四時祭式鎮魂に、魂留魂、祝詞式祈年祭には、玉留魂と書り、さて足魂の次に載たるは、やごとなき申傳へのありしなるべし、○祭神詳ならず、按るに、十種神靈の一なる死反玉、または道反玉の靈なるべし、○舊事紀天島に、神武天皇元年十一月丙子朔庚寅、宇麻志麻治命奉齋殿内於天璽瑞寶、奉爲帝后、崇鎮御魂、祈禱禱祥、所謂御鎮魂祭自、此而始矣、凡厥天瑞、謂宇麻志麻治命先考饒速日尊、自天受來天璽瑞寶十種是也、所謂瀛津鏡一、邊津鏡一、八握劍一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比禮一是也、天神教導、若有痛處者、令茲十寶謂一二三四五六七八九十而、布瑠部山良山良止布瑠部、如此爲之者、死人返生矣、即是布瑠之言本矣、所謂御鎮魂祭是其緣矣、連龍云、此舊事紀の文、また古語拾遺に據り、玉留魂生

魂足魂の神實を、長くしよく辨ふべし、

印本玉積産日の訓タマルムスビとあり、此外も皆同じ、眞淵は舊説に従ひ、宣長はタマツムムスビと讀り、大祓後釋に、神祇官に坐八座の中の、玉留魂と申す神名を、たまるとすびと訓るは、いみじきひがことにて、是も多麻都米牟須比にて、つめはといめなり、うかれゆく魂を留め給ふ靈にます神也、神名帳には、玉積産日と書れたるを以て、たまると訓ことの誤をも知べく、又此神名にて神留りは、即ち留まる意なることをもさるとべし、と云るは然るべき事也、故今は此説に従へり、連龍 按るに、諸社根元記に、玉積産日神は足産靈尊といひ、土佐國式社考の文也 大系圖載木系帳云、天見屋命父神與登魂命娶玉主命女許登能麻遲媛命所生也、萬葉集玉主訓多麻毛利、與多麻留語通、神祇官西院坐玉積産日神、古語拾遺作魂留産靈、姓氏錄又云、神牟須比命見安牟須比命、蓋魂靈皆訓牟須比、而與玉主、義相通、合而考之、天石都倭居命、玉主命、玉積産日神、安牟須比命、四名一神、而天見屋命外祖父神也、故神祇官八神以此神爲其一乎、といへるなど皆諸書に出たる神名に附會せむと、さまざま臆説を加へたるもの也、猶足産日神の條にいふを考へ合すべし、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位玉積産日神從一位、同年二月丁亥朔、神祇官從一位玉積産日神奉授正一位、



生産日神

生産日は伊久武須昆と訓べし、「四時祭式、鎮魂祝詞式祈年祭等には、生魂と書り、○祭神詳ならず連風に按るに、十種神寶の一なり、生魂の靈なるべし、上に同じ、

祝詞考に、古事記に、大年神、娶活須昆神之女、生大國御魂神、と見え、且其生魂神は、神魂の御子也と、或ものに書しは、さぞ有なむ、足魂は、右の生魂神の和魂なるべし、といひ、「古事記傳三の卷、活杙神の注に、活杙は、生イハカフ動き初る山の御名なり、神祇官坐御巫祭八神中の生産日神は、此神なるべし、と云り、連風按るに、此説覺束なし、猶前後にいふを考へ合すべし、

神位

三代實錄貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位生産日神從一位、

連風按るに、上なる神産日神、高御産日神、玉積産日神、下なる足産日神等は、同年二月奉授正一位とあるに、此神のみ遺りたるは、いふが如し、恐らくは脱文にもやあらむ、

足産日神

足産日は多留武須昆と訓べし、「四時祭式、鎮魂祝詞式祈年祭等には、足魂と書り、○祭神詳ならず、連風に按るに、十種神寶の一なり、生魂の靈なるべし、上に同じ、

祝詞考に、足魂は、生魂神の和魂なるべし、云々、饒速日命自天降る時、天の神の授給へる、生玉、足玉、死反玉、道反玉、蛇比禮、蜂比禮、云々、十種神寶の中、四つは、即ちこの生魂

より、下三神と、言も功も、均しきをおもふに、天皇の御命長く、御稜威足ひ、また死たる魂を、よみかへらせ、黄泉の道より、反りなどし給ふ、かの伊邪那伎命の、御功有、神たちなりけり、と云り、連風按るに、かく云るは、即ち此玉の功を神といはるにあらざるや、さるをまた、さぼるげに説をさめたるは、いはゆる古轍に泥みての事ならん、今考るところ爰にきざせるをや、○古事記傳三の卷、淤母陀琉神の注に、神祇官坐御巫祭八神中の足産日神と申すは、此神なるべし、此七代十二柱神の中に、たゞ活杙神と此淤母陀琉神とをのみ、取分て彼八神の列に收て祭り給ふことは、彼八神は、もはら天皇の大御身を御守護のためなれば、活と申し足と申す神靈の由縁を以てなるべし、と云るは、覺束なき事上の件に同じ、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位足産日神從一位、同年二月丁亥朔、神祇官從一位足産日神奉授正一位、

前件三柱の神の出處、明かならざるによりて、先達等ともくの説あり、何れの當れるや、未ならず、連風按るところ前の如し、是も更に發明せしにあらざる、諸社根元記に、玉積産日神、足産生産日神、足産足産日神、道反道反大神、といひ給ひ、舊説みな然り、さるはかの出處に迷ひて云るものなるべし、やがて足産靈は、足産日神あるを玉積産日神とし、足玉産靈道反大神は、足産日神とさせる、こは何によれるにや、すべて神代卷、舊事紀等に見えたる、神違ならではと思へるより、いと狭く推量りて、かくはいへる也、されど道反大神を引出さ







古語拾遺  
の御年神の  
事な以て  
上代より  
りし機に  
え待るい  
いあらむ

觴は、祈年祭を主とせらるにあらず、鎮魂祭を起源なる、さて其神を祈年にも祭らせらる、也、抑祈年祭は、天武天皇の御時より始れり、こはもと漢風に習ひての事なれば、神祇令の集解義解ともに、漢意を以ていへるもの也、故この八神殿を祭らせたる根本は、鎮魂祭にあれば、其祭の式文をこゝに擧てまらしむ、さて鎮魂祭には、此八神に大直日神一座を加へて、九座として祭れり、大直日神の祈年に預らざるは故また毎年九月神嘗祭あり、其式文も便覽の爲にこゝに贅す、

鎮魂祭十一月

神祇令曰、仲冬寅日鎮魂祭、朱云、上卯之次寅日也、

儀式曰、鎮魂祭儀、十一月申寅日、中宮祭、准此、但東宮用己日、其日所司預敷神座於宮内省廳事、次大臣以下座於西舍南、少西設辨大夫座、其南外記史座、其南太政官及左右史生座、共東西、其南少東官掌、北東舍有座三列、北第一間設外記史式部丞錄座、第二間太政官并左右史生式部史生座、第三間官掌省掌座、北西二點大臣以下就西舍座、神祇伯以下率琴師御巫神部下部等、著袿摺衣令持供神物、左右相分入立庭中、神部升自東階、置神寶於堂上、次昇神机、升御巫從之、次神部四人各持琴、左右相分升盤、堂上、神祇五位已上官人升自西階、六位已下升自西側階、就座、伯已下使部以上東面、次大膳職造酒司供八代物、縫殿寮率媛女、升自東側階、就座、次内侍令齎御衣匣、自大内退出、升自東階、就座、治部省率雅樂寮歌人歌女等、升自西側階、就座、訖大臣出、自西舍、升自西側階、就座、喚召使二聲、召使稱

唯越就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣喚式部、召使稱唯越出立、南外喚之、丞已上一人入就版位、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣奉、入刀禰、丞稱唯出復、本列、仰云令奉、入刀禰、錄稱唯喚、省掌稱唯、錄仰云奉、入刀禰、省掌稱唯、少進云、大夫等參拜、五位以上先入就堂上座、外記史率史生官掌等、出自西舍、立於屏下、待式部省相引入、就東舍座、訖大臣喚、召使二音、召使稱唯越、版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣喚、大藏省、召使稱唯退出喚、之、丞稱唯進就版、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣喚、緜木綿、丞稱唯退、丞率錄史生藏部等、實木綿於篋、入、先賜神祇官人、次丞賜大臣、錄賜五位已上、次史生賜判官以下主典已上、藏部賜史生以下、主典已上安藝木綿、史生以下凡木綿、訖神祇伯喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、伯命琴笛相和、和云、樂許登爾、和云、安波世、四人共稱唯、先吹笛一曲、次調琴聲、訖琴師彈絃、與神部共歌二成、次雅樂歌人同音歌二成、神部一人候拍手、御巫始舞、每舞巫部舉舞三廻、舞云、阿奈、遂不止、大藏錄以安藝木綿二枚、實於篋中、進置伯前、御巫覆宇氣槽、立其上、以梓撞槽、每十度畢、伯結木綿鬘、訖御巫舞、訖、次諸御巫媛女舞畢、次宮内丞一人、次侍從二人、次内舍人二人、次大舍人二人舞訖復本座、辨大夫喚官掌二音、官掌稱唯越就版、大夫問阿誰官掌稱姓名、辨大夫命喚、宮内省、官掌稱唯退喚二音、丞稱唯就版、辨大夫問阿誰丞稱官姓名、辨大夫命御飯早速令賜、丞稱唯退出喚、臈部、五六人共稱唯、丞仰云賜御飯、臈部共稱唯、大膳進屬以下共起賜神祇官、次大臣以下、訖大膳進就版中云、御飯賜畢共拍手三度、先後、觴三行亦拍手一度、不稱、訖各退出、







人雜使舍人二人入候、戊刻內侍令史生并召繼舍人持御服案、盛平宮一合、絲帶、內侍一人藏人一人女孺等列立案後、雜使二人乘燭分、左右立案前、史生立燭後、至宣陽門北候之、乘輿御服案自內裏出、相共陳列向宮內省、入自南門、就於廳座、御巫等受御服案、如常、祭畢以次和舞、先神祇官、次宮內省、次侍從、次奏、次通儀、次前、大舍人寮式曰、凡鎮魂園韓神平野等祭、官人一人、史生一人、率舍人能、和舞者四人參之、但踐祚大嘗二十人、便取、縫殿寮式曰、鎮魂齋服、新嘗祭、神祇官伯已下彈琴已上十三人、榛摺帛袍十三領、別一匹、袴十三腰、別三、綿五十二屯、袍別一屯半、袴別一屯半、絲三兩一分三銖、綴女四人、綠袍四領、綴女四人、綿八屯、別二、兩面紅四條、別長一尺九寸、汗衫四領、別三、綠袴四腰、別三、袴腰料縹帛四條、別一、綿八屯、別二、下裙四腰、別一、袴四腰、別三、綿四屯、別一、縹帶四條、別長六尺、縹布髮髻四條、別一、緋絨四條、別一、緋布袴四兩、別三、絲鞋四兩、別一、武部省式曰、凡鎮魂祭夜、省率諸司參入之時、外記史屏下相待、就列而入、凡中務所移鎮魂儼人侍從、若有不參者、勿預大嘗會節、諸祭和儀、人外皆同、凡御井中宮鎮魂所、辨官中務輔、和儼侍從四人、式部輔治部輔雅樂頭大藏輔宮內輔、及預御膳諸司五位已上、令必參集、若闕怠者、停預節會、其有隙者、先申其由、東宮、鎮魂祭、其日所司依例供備、各有常儀、是日哺時、輔以下就宮內省南門外座、省掌置版位、五位已上受點如常、儀式、雅樂寮式曰、凡園韓神平野等祭、并御及中宮春宮鎮魂祭、省丞錄各一人率允屬各一人歌人歌

女等供奉、鎮魂祭、五位已上、官各一人供之、大藏省式曰、鎮魂祭、於宮內省懸幔、結魂料木綿二兩、預送神祇官、祭日輔率屬官須給、中宮藏、安藝木綿二斤、凡木綿十斤、東宮藏、安藝木綿一斤、凡木綿二十斤、宮內省式曰、凡新嘗之寅日、供御井中宮鎮魂祭、神八前、大直神一前、供奉諸司上十人、中三十人、下二百六十人、並給食、新嘗之後、已日、東宮鎮魂祭、并大直神、及人數亦准此、凡神今食解齋、及鎮魂祭等日、辨官令官掌召省、錄稱唯進就版位、即宣令結食、錄稱唯差退、唱膳部二聲、膳部稱唯、錄宣給食、即給饌行酒、凡新嘗會解齋、并鎮魂亦同、東宮、園韓神祭、丞已上一人與諸司共和儼、大膳職式曰、鎮魂、皇宮、大直神一座、座別東殿十三兩、大直、烏賊三兩一分、大直神加、堅魚六兩二分、大直神加、鮭一隻、大直、鰯魚二斤五兩、大直、鰯魚十兩、大直神加、鹽一合八勺、大直、米三升、大直、大豆一合八勺七撮、大直、小豆二合八勺、大直、生栗子三升、大直、搗栗子二升、大直、干柿子一升二合、大直、橘子二蔭、已上、七種神四座、大直、酒四座、大直、別壺一口、大直、四座、大直、別壺一口、大直、大直神一缶、大直、木綿二分四銖、大直、鹿筍十三合、大直、各長一尺四寸、大直、食薦五枚、大直、與籠二脚、大直、置簀二枚、大直、右職司料理與神祇官供之、

雜給料參議已上、人別糯米一升四合、大豆一合八勺七撮、小豆二合八勺、鹽酒一合、酢四勺、醬三合、大直、澤醬二合九勺、大直、東腹二兩二分、大直、隱岐鰻五兩、大直、堅魚二兩一分二銖、大直、烏賊二兩、大直、熬海鼠三兩二分、大直、與理刀魚五兩二分、大直、鮭二分、大直、鮭二分、大直、鮭二斤四兩、大直、雜給十一



兩、紫菜海松各三分、海藻二兩、漬菜二合、漬蒜房蒜蕪各二合、生栗子一升四合、搗栗子六合、干柿子三合、橘子三十三顆、木綿二分四銖、五位已上三十人、別糯米七合五勺、大豆七勺、小豆一合五勺、醴酒三勺、酢一合、醬一合、鹽二合九勺、東腹一兩二分、隱岐鰻四兩二分、堅魚二兩二分二銖、烏賊二兩、熬海魚三兩二分、與理刀魚五兩、鮭二分隻之一、雜魚楚割三兩、堅魚煎汁一兩一分、鮭二斤四兩、腊十兩、紫菜海松各三分、海藻二兩、漬菜二合、漬蒜房蒜蕪各二合、洋醬二合、生栗子五合、搗栗子二合五勺、干柿子一合五勺、橘子十五顆、木綿二分四銖、六位已下二百六十人、別糯米六合七勺、大豆四勺七撮、小豆六勺、醬五勺、鹽一合七勺、東腹二兩、堅魚二兩一分二銖、鮭二兩、鮪三兩二分、海藻二兩、漬菜二合、生栗子三合、橘子五顆、鹿筍十五合、鹿筍九合、茶餅四合、納言鹽二合、各長一尺四寸、廣一尺二寸、深三寸、陶高盤大盤各十口、參議已上盛、櫛三俵、食籠一百六十合、廣八寸、深三寸、箸竹一百六十株、筥坏二百三十口、五位已上別八口、五位已上別五口、

右依前件、其五位已上食並盛筥、菓子雜肴盛以干拍、結以木綿、下食用、籠其籠山城  
大炊寮式曰、鎮魂祭、亦同神八座、大直神一座、右座別米一升、用田稻二、東付神祇官供奉諸司、人別米八合、大膳式薪一百五十斤、

中宮鎮魂、官人已下雜色已上料、米五斗四升四合、八別薪三十斤、

主殿寮式曰、鎮魂料、東宮寮、亦同櫻椒油二升四合、燈蓋八口、油瓶一口、燈炷布二寸四分、

掃部寮式曰、十一月鎮魂祭日、於宮內省廳設大匠已下歌女已上座、

神祇官諸祭料、折薦、御并東宮鎮魂料二枚、葉薦、御并東宮鎮魂祭料二枚、大膳職食薦、御并東

宮鎮魂料十枚、

造酒司式曰、鎮魂祭料、東宮酒二斛、一石一斗神九座、亦同櫻椒油二升四合、燈蓋八口、油瓶一口、燈炷布二寸四分、波四口、別受土蓋四口、小區四口、已上雜缶一口、篋竹六株、已上供窪坏四十口、加匏十二柄、給料東宮並以此器通用、

春宮坊式曰、凡東宮鎮魂日、所司裝東宮內省同御、皮刻主膳監官人二人、位已上一人、率膳部八人、身御膳高机二脚、主藏監官人二人、位已上一人、率舍人八人、身御服高机二脚、坊官二人、身御服各一行列、主殿署官人二人乘燭相從、左右兵衛各四人陳列前後、向祭處入自南門、到堂南東階前而留立、舍人昇階、陳高机於東壁前、訖官人以下相率而出、宣旨量時乃參就座、式部引刀禰參入就座、坊官已下相從就東細殿、所司給木綿鬘、訖坊官率屬官等、移就堂東帳、神祇官二人、宮內丞一人、侍從二人、坊進已上一人、內舍人大舍人坊舍人各二人和舞、訖坊官已下率舍人參入立階前、令舍人昇机、退出如初儀、絲綿鬘御巫、御安奉返北山抄曰、十一月中寅日鎮魂祭事、若有二寅下寅行之、有例云々、御巫殿、高机收坊

細殿座、北下、南即召外記、問諸司參否、示辨問供神物具否、神祇官參著、治部雅樂同著、內侍女藏人御巫子等、又就堂上、外記申諸司代官等訖、上卿并辨、昇自西階著座、東第三宣讀、音稱唯進立、上宣讀、召使申職姓名、上宣式部省召世、丞以上一人參進、上宣讀、音稱官姓名、上宣刀禰奉入、求伊禮云々可、如伊禮輔率五位著堂上座、丞率六位著東細殿、外記更座定、上召召使、召使參入、同上宣召大藏省、丞參、同上宣、續木綿賜、稱唯退出、賜



之、委奉上卿、取之給冠、錄所司兼、饌如常、事畢、中宮同行、職司差神樂了、倭舞、神祇副一人、史人、侍從二人、內舍人二人、大舍人二人宮內省、仰可給御飯之由、如常、大膳申給了由、上卿以下退出、延喜御記云、內裏有職、不可用御座、御座、內裏察人夜中皆在、內裏察所、仍仰給殿察、命給安部卿子爲內侍代、空志厚子爲藏人代、云々、○天曆九年、宮內省有職、於神祇官行之、藤原年停否例、延長八年、天曆八年、保元四年行之

江次第曰、鎮魂祭、十一月廿五日、有行、行、之、有例上卿以下入、自宮內省南門、著曹廳、須先著西細殿、召外記、問諸司具否、召辨問、祭物具否、後著曹廳也、而近代彼省無一屋、仍曹廳跡立平張行之、東第一間立檜棚置祭物、又倚付鈴賢木、其西安木體、置上卿座第三間、辨座第四間、神祇并治部雅樂座西第一間、上官不著座、在帳外、若辨參著之後、上卿參辨、懸懸帳西方、後著、上卿并北向、自餘西向、內侍自乘車立、帳北、難須著座、女官持御衣匣置東第二間、須五位藏人奉仕、也、然而近代如作、次上卿召召使、二召使稱唯進立庭中、上卿宣、誰、召使申官姓名、上宣刀禰入末津禮、召使稱唯出召之、諸司須、此後著座之、上宣召使如前、上宣大藏省召世、召使稱唯出召、次大藏丞立庭中、名謁如例、上宣賢木綿給、丞獻上卿、上卿取之結冠額、近代供、錄獻辨、史生分、諸司、次神祇雅樂神樂、次御巫衝宇氣、神學師彈和琴、衝宇氣神遊儀也、又儀也、以賢木、衝宇氣也、結系自一至十、字麻志麻治、神代上卷、ウク船フミト、ロカ命十種神靈、之、返死之結也、用系自一至十、也、次神祇一人進結、系於葛篋、自一至十、此間女官藏人開御衣篋、振動、畢神祇官著座、次諸司供膳居、葛篋蓋、次造酒司獻、盃三獻、上卿不擬飲之、次後宮行之、儀同宮司居膳棚二人昇之、次盃酌三獻、次神樂畢、次有倭舞事、南庭敷筵、東西其前置机、机上置賢木、神祇官一人、史一人、宮內丞一人、侍從二人、內舍人二人、大舍人

二人、宮內進一人、舍人二人、次第舞、次辨召官掌、二官掌立庭中、辨問曰誰、官掌申官姓名、辨宜宮、乃內省召世、官掌出召、宮內丞立庭中、辨宜誰、丞申姓名、辨宜御飯加多良加仁給、丞稱唯出、次大膳屬進庭中、申、云々、御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、宮內省有職於神祇官行之、天曆八年內裏有職不用、內藏寮御匣殿御衣、仍縫殿請、大藏御服帛綿、忽調御服御衣篋、內侍女藏人皆有隙、以女史爲代官、行事藏人雖參不著座、乍立行事、諒閣之時或行或不、行、延長不、行、天曆康保行之、近代皆行之、長祿三或二月廿六日於春燈下、傳授先舍著者也、他日清涼記云、當日薄暮、內侍經奏、率藏人一人、御匣殿藏人、女孺洗人等、內令、從三位藤原隆盛、當日薄暮、內侍經奏、率藏人一人、御匣殿藏人、女孺洗人等、侍式云、神命斷二人、令、內藏寮侍、御服、置机、職延引例、康保二十一年延引時、宮內省爲大嘗會行事近代所、行此、其、令、內藏寮侍、御服、置机、職延引例、勅、日、時、天永二年、宮內省爲大嘗會行事所、時、於神祇官行之、諒閣年無倭舞、御衣或白、天曆八年、后宮懷妊尙祭、元慶元十、依、諒閣、不用、歌舞、元慶五十、東宮御輕服間、東宮鎮魂如例、天慶七十、中宮御輕服間、中宮御鎮魂祭如例、承平六十、東宮御輕服間、御衣遺白、一十七、

春宮鎮魂、上卿著座、外記申代司、其詞曰、司司乃中、上卿答云、誠、外記云、其司丞申、障、世、代、仁、其司屬其生其丸、候、不、上卿云、令、候、此間神祇官人、猿女古止支著座、上卿召召使二音、召使庭中參進、上卿問、其詞召使稱、姓名、上卿云、宮、乃省召世、唯出召、丞參入、上卿問丞申、姓名、上卿云、刀禰令、入、丞唯、天、出、輔著、堂上、丞以下入間、外記史已下著、上卿召召使二音、使參入如前、上卿問如前、姓名、上卿云、大藏省召世、唯、天、召使出、天、召、須、大藏省參入、天、立、利、上卿問申、姓名、上卿云、かつらゆふ給、丞唯出、かつらゆふ給、神樂倭舞本宮居、酒肴、宮



内省令<sub>レ</sub>役、次辨召<sub>二</sub>官掌、官掌立進、辨問官掌申<sub>二</sub>姓名、辨仰云宮内省召<sub>二</sub>世、唯天出<sub>二</sub>天召<sub>二</sub>須、省進立辨問中<sub>二</sub>姓名、辨云御飯早給<sub>一</sub>、錄唯<sub>二</sub>天出<sub>二</sub>津、召<sub>二</sub>膳部、大膳屬進出<sub>一</sub>、申云、御飯加太良加仁給畢、上下各分散<sub>一</sub>、院鎮魂、立<sub>二</sub>帳於此中門北<sub>一</sub>、<sub>東四行帳、東北</sub>、第一間立<sub>二</sub>棚伏<sub>一</sub>、槽、第二間立<sub>二</sub>案、御衣、以<sub>二</sub>帳東一冊、當<sub>二</sub>車寄戶一立、第三間設<sub>二</sub>公卿別當座<sub>一</sub>、<sub>其傍</sub>、第四間設<sub>二</sub>四位別當座<sub>一</sub>、<sub>前設</sub>、第五間設<sub>二</sub>判官代座<sub>一</sub>、<sub>座前設</sub>、第六間設<sub>二</sub>神祇官五位座<sub>一</sub>、第七間設<sub>二</sub>同六位座<sub>一</sub>、以上各先居<sub>二</sub>饌立<sub>一</sub>、燈臺、<sub>判官代以上机</sub>、於<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>相<sub>二</sub>尋事具否於行事<sub>一</sub>之後著<sub>二</sub>帳<sub>一</sub>、判官代以上東上北面、神祇官南上東而二行、召<sub>二</sub>主典代<sub>一</sub>、<sub>不齋</sub>、在<sub>二</sub>座之人傳召<sub>一</sub>之、主典代著<sub>二</sub>膝突<sub>一</sub>、神祇官以下仰<sub>二</sub>可<sub>一</sub>著<sub>二</sub>山<sub>一</sub>、神祇官著<sub>二</sub>座<sub>一</sub>、女房候<sub>二</sub>車寄戶下<sub>一</sub>、又召<sub>二</sub>主典代<sub>一</sub>如初、參入仰<sub>二</sub>可<sub>一</sub>給<sub>二</sub>鬘木綿<sub>一</sub>、由<sub>二</sub>主典代參入<sub>一</sub>、<sub>職官以下入折</sub>、次神遊御琴師歌女奉仕、御座於<sub>二</sub>棚下<sub>一</sub>、舞、中臣一人結<sub>二</sub>絲<sub>一</sub>、<sub>衝</sub>、宇氣<sub>二</sub>間女藏人開<sub>一</sub>、御箱<sub>二</sub>振<sub>一</sub>、動之、年年女官振<sub>二</sub>之如何<sub>一</sub>、羞<sub>二</sub>饌<sub>一</sub>、<sub>判官代</sub>、勸盃、<sub>大夫判官</sub>、神樂<sub>二</sub>饌鋪<sub>一</sub>、<sub>倭舞座</sub>、<sub>北庭</sub>、<sub>神祇代</sub>、<sub>判官</sub>、<sub>會人</sub>、給<sub>二</sub>神祇官人祿<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>差<sub>一</sub>、官人以上上<sub>二</sub>糾<sub>一</sub>、<sub>或加</sub>、自餘布各一段、御玉結絲令<sub>二</sub>入<sub>一</sub>、御齋神之鍋、官司付封、件鍋二口也、隔年入<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、舊事神武紀曰、元年十一月丙子朔庚寅、宇摩志麻治命奉<sub>二</sub>齋<sub>一</sub>、殿內於<sub>二</sub>天璽瑞寶<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>爲帝后<sub>一</sub>、崇<sub>二</sub>鎮御魂<sub>一</sub>、祈<sub>二</sub>禱壽祚<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>謂御鎮魂祭自此而始矣、凡厥天瑞、謂<sub>二</sub>宇摩志麻治命先考饒速日尊<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>天受來<sub>一</sub>、天璽瑞寶十種是矣、所<sub>レ</sub>謂瀨都鏡一、邊都鏡一、八握劍一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比禮一是也、天神教導、若有<sub>二</sub>痛處<sub>一</sub>者、令<sub>二</sub>玆十寶<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>一三三四五六七八九十<sub>一</sub>而布瑠部、由<sub>二</sub>其由<sub>一</sub>其止布瑠部、如此爲<sub>二</sub>之者<sub>一</sub>、死人返生矣、即是布瑠之旨本矣、所謂御鎮魂祭是其緣矣、其鎮魂祭日者、媛女

君等率<sub>二</sub>百歌女<sub>一</sub>、舉<sub>二</sub>其旨本<sub>一</sub>而神樂歌舞、尤其是其緣者矣、  
年中行事祕抄曰、鎮魂歌

アチノ一度	オケケ々三度	アメツチニ	天地	キユラカスハ	玲瓏
サユラカス	カミワガモ	カミコソハ一		キユラカスハ	
キユラナラバ	アチメ一度	オケケ々三度		キユラカスハ	
フルヤシロノ	オケケ々三度	子ガフソノコニ		キユラカスハ	
アチメ一度	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
奥山	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
オクヤマニ	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
オケケ々三度	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
木金 <sub>子</sub>	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
モトハカナホコ	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
ミワヤマニ	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
アチメ一度	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
山ノ山モト	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
オケケ々三度	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
御魂上	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
ミタマカリ	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
オケケ々三度	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
魂 <sub>匣</sub> 持	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	
タマハコモチテ	オケケ々三度	サツチラガ		キユラカスハ	



次一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十度讀之、毎度中臣玉結也

神嘗祭九月十日

四時祭式曰、御巫奉齋神祭、中宮東宮此繩一匹四丈、五色帛各四丈、絲四絢、綿六屯、倭文四尺、調布六端、庸布四段、紙一百張、凡木綿麻各二斤、釜八口、錢五百文、酒一斗、米六斗、糯米四斗、稻八束、大豆小豆各二斗、蝦堅魚腊海藻各十二斤、鮭八隻、鹽四斗、明椒二合、折櫃八合、筍八合、杓二柄、盆塙各四口、瓶八口、坏八十口、櫛五十把、席二枚、薦二枚、食薦八枚、簀二枚、右御巫以下諸祭、並於神祇官齋院祭之、

掃部寮式曰、神祇官諸祭料、狹席、御巫等奉齋神祭十枚、折薦十二枚、食薦三十一枚、簀十二枚、

坐摩巫祭神五座 並大月次新嘗

坐摩は爲加須里と訓べし○職員令集解に、巫右京居座一口、給廬守一人、又免戸調役、臨時祭式に、凡坐摩巫取部下國造氏童女七歳以上者充之、若及嫁時、申辨官充替、四時祭式に、四月御川水祭坐摩巫、行、事、

祝詞考新年祭に、座摩は、本攝津國、西生郡の所の名にて、式にも、同郡に、同神の社あり、此次に、皇神の敷坐云々も文にも依に、いにしへより、この大神の敷坐し所に、仁徳天皇、宮造りし給ひて、宮中に齋まし、故に、其後大和、山城と、京を遷されても、同じくうつし

齋はれて、そこを即座摩といひしなるべし、といへり、猶考ふべし、又云、是をめぐすといふ言は、令集解に、居とも替しかば、るとよむ事は定かなり、然れども、居も摩も借字井之後ちふ、所の名にや有けん、志を、すといふは、音便なり、さてこは御井の神の祭也、又式に、御川水の祭にも、此座摩御巫を、用ゐらるゝをおもふに、そのはじめ、井の邊に坐す神を、御井の神と祭られしにや、と云り、

生井神

生井は伊久爲と訓べし○祭神詳ならず

福井神

綱長井神

福井は左久爲、綱長井は都奈賀爲と訓べし、祝詞式新年祭には、榮井津長井と誓り、○共に祭神詳ならず○舊事紀天皇紀に、神武天皇元年、中坐摩は大宮地之靈、今坐摩御巫齋祭矣、古語拾遺亦同前件三柱は、いかにも井の邊に坐せる水神なるべし、さて攝津國西生郡坐摩神社に在す神ぞかし、

神社

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位生井神、福井神、綱長井神、並從四位

波比祇神



波比祇は假字也、祝詞式祈年祭には、波比支と書て、阿須波神の次に載せたり、○祭神明か也

阿須波神

阿須波は假字也○祭神明か也○古事記、神代大年神、又娶天知迦流美豆比賣、生子、中次阿須波神、次波比岐神、舊事紀亦同

前件二柱は、大嘗會悠紀主基の齋郡にても、八神の中に祭れり、萬葉集廿、上總國防人歌に、爾波奈加能、阿須波乃加美爾、古志波佐之、阿例波伊波々牟、加倍利久麻留爾、とよめるにても、阿須波神の庭中を護り給ふことは明か也、連風按るに、坐摩以下の御巫の祭れる神、悉く本社あり、阿須波神は越前國足羽郡足羽神社也、然るに波比伎神を重に祭れる所を知らず、故つらつら考るに、伯耆國河村郡波々伎神社は、即ち國名神號ともに波比伎の轉訛にて、調度の帶といふ物の名し、此神號によれるにや、宜長が波比岐は名義の強首は從ひ、たけれど、伯耆の名義は、祭より出たる由なるにや、といへるは、近きことなり、此神も庭中を掃清むる事を、もはらとせるより、阿須波神と等しく祭るにぞ有べき、猶考ふべし、  
神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位波比祇神、阿須波神、並從四位上、前件五柱の神を祭れる事は、當時すら明かなるを、舊事紀に、大宮地之靈とのみありて、此神號を載せざるは、故ある事なるべし、大宮地之靈とは、即ち水土をいふなるべし、此神は攝津國西生郡坐摩神社、大月次が本社也といふ、されど五座とはなければ、恐らくは井の神

を祭れるが初にて、阿須波神波比伎神は、後に合せたるにもやあらむ、また和泉國和泉郡積川神社五座並も、此五柱の神也とぞ、

○因に云、此五神を祭らせ給ふ濫觴は、御巫祭神八座と同じく、御川水祭ぞ起源なるべき、さて後に祈年にも祭らせらるゝ也、神祇令、儀式等に載せられねば、當時に近き頃までは、いかゞ有けむとされねど、そは鎮魂祭など、は、輕易なれば洩せるにもあらん、されど四時祭式に加へられて、根本は此祭にあれば、其式文をもこゝに擧ておらしむ、また九月神嘗祭あり、

御川水祭

四時祭式曰、四月祭

御川水祭、十二月推此五色帛各二丈五尺、繩二丈五尺、綿五屯、倭文二尺、絲五絢、木綿麻各五斤、紙一百張、布五端、錢八十文、釜五口、酒二斗、米精各五斗、大豆小豆各一斗、糯米三斗、稻五束、鮭五隻、鰯堅魚腊海藻各二斤、鹽五顆、明櫃二合、坏五十口、食薦五枚、席薦各二枚、折櫃五合、輦籠一脚、櫛一俵、匏五柄、

右御川水祭坐摩巫、行事、

掃部寮式曰、神祇官諸祭料、狹席、御川水神春秋祭料四枚、食薦十枚、

神嘗祭、九月十一日

四時祭式曰、坐摩巫奉齋神祭、繩一疋二丈五尺、五色帛各二丈五尺、絲二絢、綿三屯、倭文二



尺、調布二端、庸布二段、紙五十張、凡木綿麻各二斤、釜五口、錢二百文、酒九升、米四斗、糯米二斗、稻五束、大豆小豆各一斗、鰯鯉魚脂海藻各六斤、鮭五隻、鹽二斗、明櫃二合、折櫃五合、筥五合、杓二柄、瓮塙各二口、甍五口、坏五十口、榑四十把、席二枚、薦二枚、食薦五枚、簀二枚、右御巫以下諸祭、並於神祇官齋院一祭之、

御門巫祭神

並大月次新嘗

御門は美加止と訓べし○職員令集解に、巫右京御門一口、給廢守一人、又免戸調役、四時祭式に、四月四面御門祭、此御門巫、行事、

祝詞考新嘗祭に、御巫一口して、四方の御門の祭に仕奉るなり、といへり、

櫛石窓神

四面門各一座

豊石窓神

四面門各一座

櫛石窓は久志伊波未止、豊石窓は止與伊波未止と訓べし○古事記、神代天石門別神、亦名謂櫛石窓神、亦名謂豊石窓神、此神者御門之神也、舊事紀、天皇元年、中櫛磐間戸神、豊磐間戸神、並今御門御巫所奉齋矣、古語拾遺云、天兒屋命、太玉命、以日御綱廻懸其殿、令大宮賣神侍於御前、豊磐間戸命、櫛磐間戸命二神守衛殿門、是並太玉命之子也、又云、殿祭門祭者、元太玉命供奉之儀、齋部氏之所職也、○四面門は音讀也、四面門とは、宮城四壁の御門にて、即ち建禮、建春、宣秋、朔平、北等の御門也、○仲資王記、文治五年三月六日の裡書に、權大副卜部兼衛來、略談云、本官西院北舍坐四面御門神、大内建禮建春門等令坐

比保古云一院既永承五年六月十六日建禮社同日天喜元年四月始奉官幣

之神也、本社在但馬國、今坐宮城門之上□□鎮坐當官北舍也、社非本官四面門神也、而或官人存本官門之由令新見、尤不可也、云々、

比保古曰、二神者、今世左右衛門官名之起也、武官尤曰結構官、依自此二神起也、冷泉殿門表二神於磐石祝祭之、今世斷絶、今中國四國俗、門守神曰門客人、衣冠昧黒赤色五位裝束、綏負矢籠持弓矢、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位櫛石窓神、豊石窓神、並從四位上、前件二柱の神、此帳を以て見れば、四面の御門に、各一座在すが如く聞ゆれど然らず、こは御門祭の時、四面の御門にて祭らるれば、かくいふ也、抑新年祭のとき、社別の幣四妻、前神の幣四妻を奉らるれば、其數を知らしめむ爲にかく載せたる也、猶標目の卷併せ考ふべし、此神は丹波國多紀郡櫛石窓神社二座並名とあるが本社也とぞ、

○因に云、此二神八座と祭れるも、坐摩巫祭神五座と同じく、御門祭之起源なるべき、さて祈年に預りしも前に同じ、依て其式文を擧るもの也、また九月神嘗祭もあり、

四面御門祭

四時祭式曰、四月祭

四面御門祭、此五色帛各四丈、緇四丈、絲八絢、木綿麻各八斤、綿八屯、紙二百張、倭文四丈、布八端、錢一百文、銀十六口、黄蘗五十枚、糯米八斗、大豆小豆各四斗、米八斗、酒五升、糟



八斗、稻十六束、鹽十六顆、鮭十六隻、鰻堅魚脂海藻各四斤、席薦各四枚、食薦十六枚、明櫃折櫃各八合、坏八十口、輦籠四脚、匏五柄、櫛二俵、

右四面祭御門巫、行事、

祝詞式曰、御門祭

櫛磐陽命豐磐陽命登御名乎申事波、四方内外御門爾如湯津磐村久塞坐、四方四角利疎備荒備來武、天乃麻我都比登、云神乃言武惡事爾、古語云麻我相麻自許利相口會賜事無久、自上往波上乎護利、自下往波下乎護利、待防掃却言排坐、朝波開門夕波開門、參入罷出人名乎問所知志、答過在波神直備大直備爾、見直聞直坐、平其氣安其氣、合奉仕賜故爾、櫛磐陽命豐磐陽命登御名乎稱辭竟奉登、白、

掃部寮式曰、神祇官諸祭料、狹席、四面御門神春秋祭料八枚、折薦八枚、食薦三十二枚、

神嘗祭九月十日

四時祭式曰、御門巫奉齋神祭、料物同、御巫祭

右御巫以下諸祭、並於神祇官齋院祭之、

生島巫祭神二座 並大月次新嘗

生島は伊久之麻と訓べし、○職員令集解に、巫左京生島一口、給慮守一人、又免戸調役也、

連胤云、四時祭式を考ふるに、此巫は、六月供奉神今食、御巫等裝束、十二月御巫云々、坐座御門生島東宮巫各絹三疋、絶各九尺、綿一屯、細布六尺、紅花一斤、錢百卅文、云々、と見え

て、神今食の外、生島巫の所役はなかりし也、○祝詞考新年祭に、生島は、難波生國魂神、坐座神など出たり、然れば、本この御名に依て、所を生島といひしを、二郡に分て、東生西生とのみいふ、その生を、後には奈利と唱へ誤りつ、今も生魂神社の、難波に坐にて知るべし、云々、仍ていづくはあれど、難波生島に依べくもぼゆるなり、といひ、

勅旨田

類聚國史第百五十九卷云、天長七年二月癸亥、攝津國米五百斛、充開生島救旨田料、

生島神  
足島神

生島は前に同じ、「足島は多留之麻と訓べし、祝詞式新年祭にには、生國足國と書り、○祭神生

國神、足國神、○舊事紀、天皇元年、中略復生島是大八洲之靈、今生島御巫齋祀矣、古語拾遺亦同

祝詞考上にに、生島は地の名、此生國足國は、國を知らず神の、御功を稱へ申なり、といひ、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官無位生島神、足島神並從四位上、二月十一日丁酉、奉授神祇官從四位上生島神、足島神並正四位下、

前件二柱の神を祭れる事は、當時すら明かなるを、舊事紀に大八洲之靈とのみありて、此神號を載せざるは、坐座神と同じく故ある者なるべし、大八洲の靈は、即ち國魂をいふべ







支道云大倭  
神國社進狀  
三座大神社  
年曆曰養老  
社建國神  
古記云件神  
等祭也  
之子孫守  
と神也  
給ふべし  
入

神、延曆以前坐此、遷都之時、造宮使欲奉遷他所、神託宣云、猶座此處、奉護帝王云々、仍鎮座宮内省、此由古事記とある是なり、さて常に園神と一に述べて申しならへる故に、此の曾富理神を、即園神ならむと、誰も思ふことにて、信に然もありぬべし、但園神とは別にても有りなむか、彼宮内省なるは、上古よりたゞ二神並て鎮座故に、都遷されて後常に連れて申しならへるに、其故は、若此曾富理神ならば、韓神の御弟に坐せば、韓園と序次べきことなるに、園神と序次て、其祭禮も園を先にせらる、且彼は園とのみ何の書にも見えて、曾富理と云ることなく、又曾能と曾富理と、言の通ふ由も無ればなり、若くは韓神二座のうちの一座や、曾富理神にてはあらん、又神樂歌に韓神あり、云々と云り、梁塵愚案抄に、韓神は宮内省に坐、韓神二座を申侍るにやと宣へり、運風按るに、宣長が園神は、曾富理神にはあらず、曾富理神は、韓神二座のうちの一座と考へられたるは然るべし、また曾富理神は、韓神の御弟に坐せば、韓園と序次べきなるをといへるはいかゞ、都て弟神を先にし、兄神を後にして祭れる事多し、近く生島巫祭神五座の中に、阿須波波比岐の兄弟を、波比岐阿須波と序次し、また庭高日神は此兩神の弟なる、大嘗會齋院にては、兩神に超越して、高御魂神の次に祭りたり、大和志に、韓神園在、此の韓神と同神なるべし、帝都の咫尺に必坐て、守護り、都漢國町云々と云り、奉らるる事、自然の値過なる事、深き由縁、そあらめ。○當社舊地の事を、京雀明曆年、今醍井通高辻北に荒神社あり、是遺跡也、和漢三式圖、昔はからかみ町、今は荒神町といへり、都名所圖會には、此荒神社は、文祿年中攝州勝尾山より勸請す、近衛川原清荒神最初の地なりといふ、共に其證とせる書詳ならず、皆但談に従へるならめど覺束なし、若韓神なりとも、宮内省に坐し社、遺跡は申しがたくや、北地理のこと

なれば也、さて別社の在しも知られず、既に聖神は抑當社は、殊に朝廷よりも重じ給ひ、應仁以前まで左京四條に坐り、また東三條にも祭れるも如し、オモシも、祭祀怠らせ給はぬ事、諸記録に著しきに、其省はともわれ、かく社壇の頽敗せるは、神慮いかゞあらん、推量り奉るも畏からずやは、然はいへ、神祇官すらすの如し、況や他におきてや。

神位 名神

文德實錄、嘉祥三年十月甲子、遣右大辨兼右近衛中將從四位下藤原朝臣氏宗、向園神韓神等社、策命曰、天皇我詔旨附申給久、御冠奉、授无碍申賜比之依天、從五位下乃御冠爾奉、授利崇奉留狀乎、御位記令持天奉出須、此狀聞食天、天皇朝廷乎常磐堅磐爾、護幸奉賜止申給久申、齊衡元年四月癸亥、園神韓神並加從三位、同二年九月癸丑、以園神韓神一列於名神、三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授宮内省從三位園神韓神並正三位、

祭祀

儀式曰、園并韓神祭儀、二月春日祭後丑、其日早且神祇官奉、神部下部炊女等、向於神院、辨備供物、掃部寮鋪設、神祇官立高机於神殿前、園神在、韓神在北、其立机先南後北、内侍就座、二月戊一刻、十次大臣就座、次諸司依次就座、神祇官供神饌、訖神部二人執賢木、建於庭中、即燃庭火、于時大臣喚、召使二聲、召使稱唯就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣喚治部省、召使稱唯差退喚之、省丞一人稱唯就版、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣奉、歌人參來、丞稱唯、率雅樂寮并歌人歌女等就座、訖大臣喚、召使二聲、召使稱唯就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣神御馬將參、共稱唯奉、神馬入、訖大臣喚、召使、召使稱唯就版、大臣問阿誰、召使稱姓



名、大臣宣喚、大藏省、召使稱唯出、外門、差退喚、之、省丞一人稱唯就、版、大臣問阿誰、丞稱、  
 官姓名、大臣宣賜、鬘木綿、丞稱唯退出、即容、木綿於篋、相率而入、先賜、神祇官人、訖丞賜、參  
 議已上、錄賜、五位已上、次史生賜、諸司判官已下召使已上、次藏部賜、諸司史生已下歌女已  
 上、並拍手受、之、主典已上安藝木、綿、自餘凡木綿、訖御巫先進再拜兩段、神祇官共拜、御巫微聲宣、祝詞、再拜如  
 初、御巫拍手兩段、次神馬退出、訖神祇副、神祇副、神祇副、喚、樂師名、二人共稱唯、次喚、笛工名、二  
 人共稱唯、命云、琴笛相和、和云、美并止仁、布江安流也、四人共稱唯、笛工先吹、笛一成、次調、琴聲、始奏、歌  
 舞、訖御神子先廻、庭火、供、湯立舞、次神部八人共舞、訖移、北神殿、供、祭、其儀同、南殿、訖更  
 歸、南殿、副喚、樂師名、二人共稱唯、命云、變、調琴聲、共稱唯、始奏、歌笛、祈已上和舞、次宮內  
 丞一人、次侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人舞、訖辨大夫喚、官掌二聲、官掌稱唯就、版、  
 辨大夫問阿誰、官掌稱、姓名、辨大夫命喚、宮內省、官掌稱唯出、外門、差退喚、之二聲、錄稱唯  
 趨入就、版、辨大夫問阿誰、錄稱、官姓名、辨大夫命、御飯早速令、賜、錄稱唯退喚、膳部二聲、  
 膳部五六人共稱唯、錄仰云、御飯賜了、神祇官拍手三段、先後、酒盃三行、了拍手一段、大臣已下  
 已下、屬趨入就、版、中云、御飯賜了、神祇官拍手三段、先後、酒盃三行、了拍手一段、大臣已下  
 以、次退出、神祇官率、御巫物忌神部等、歌舞、即調、神樂於兩神殿前、遣酒司史生酒部等、候  
 進、朝神樂料酒一缶、主殿寮殿部等、供、庭燎、事了退出、  
 四時祭式曰、二月祭

圖并韓神三座祭、圖神一座、韓神二座、五色帛各八尺、夾額帛紫額帛緋帛淺綠帛赤練帛各四尺、帛二

支道云臨時  
 祭式に凡開  
 韓神に凡開  
 國封戸云  
 小

丈、練絲二兩、細布四丈、商布二段、安藝木綿一斤、凡木綿八斤、錢一貫文、鈴四口、五色玉一百  
 枚、紙三十張、米二斗、糯米二斗、大豆小豆各五升、酒一斗二升、油二升、橘子一百八十顆、筥二  
 合、荒筥八合、食薦四枚、盃塙各十口、椀四口、瓶六口、坏四十口、酒盃六具、盤四口、匏四柄、柏  
 九十把、炭四籠、薪二擔半、置寶四枚、已上神、五色帛各三尺、初神、五色帛各一丈二尺、繩一匹、縹  
 帛四尺、絲二約八兩、綿二屯、五色薄繩各一丈、調布一端、洗布二丈、商布四段、凡木綿四斤、麻  
 二斤、紙三十張、色紙三十張、錢八百文、鐵四口、稻八束、神祇官、米一斗、酒一斗二升、糟一斗、鹽  
 二顆、坏十口、瓶二口、合盛膳四籠、黃麩三十枚、柏二十把、已上解、黑米一石、白米五斗、繩一疋、  
 錢五百十二文、已上鹽、飯五斗六升、酒一斗八升、已上膳部八人、下部二、齋服料、物忌二人、別夾額帛  
 淺綠帛各三丈、繩一疋二丈五尺、帛一疋五丈六尺五寸、表裾一腰、帶一條、縹帛二丈四尺、緋帛  
 一丈五尺、紫絲二兩、綿四屯、東繩三尺五寸、履一兩、紅花五兩、支子五升、御巫一人、繩一疋、  
 淺綠帛一匹、綿二屯、表裾一腰、物忌御巫別練繩一匹、備、供神物、女孺一人、繩一疋、綿二屯、  
 調布一端、表裾一腰、女丁二人、別調布二丈一尺、緋布二丈一尺、細布五尺、神祇官人當色一  
 領、彈琴二人、別黃帛三丈六尺、帛三丈六尺、綿三屯、下部二人、別調布二丈七尺、膳部八人、別  
 調布二丈七尺、紅花二兩、守神殿一人、商布一段、右春二月、冬十一月廿日祭、之、春用、春日祭後  
 五、冬新嘗祭前  
 丑、參議已上一人就、祭所、行事、其內侍到來乃始、祭之、但雜給料所司各供、備之、儀式、  
 太政官式曰、凡園并韓神祭、二月春日祭後丑、十一月新嘗會前丑、參議已上一人參赴、亦見、  
 儀式、  
 凡園韓神祭、辨外記史史生左右史生官掌各一人參、祭所、行事、



新抄格勅符  
に國神廿月  
神國十月廿  
禮國十月廿  
神國十月廿  
元國十月廿  
年國十月廿  
充國十月廿  
り  
とあるに  
さよく符へ

○神社要録

大舍人寮式曰、凡鎮魂園韓神平野等祭、官人一人、史生一人、奉舍人能<sub>二</sub>和舞<sub>一</sub>者四人<sub>一</sub>參之、  
雅樂寮式曰、凡園韓神平野等祭、并御及中宮東宮鎮魂祭、省丞錄各一人奉<sub>二</sub>允屬各一人<sub>一</sub>歌人歌  
女等<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>、

大藏省式曰、二月十一月園韓神祭懸<sub>二</sub>幔<sub>一</sub>、又所<sub>レ</sub>須盤料安藝木綿二斤、五位已上料凡木綿四斤、六位以下料  
丞率<sub>二</sub>屬官<sub>一</sub>依<sub>レ</sub>例班給、

宮内省式曰、凡神今食解齋、及園韓神祭等日、辨官令<sub>二</sub>官堂召<sub>一</sub>省、錄稱唯進就<sub>二</sub>版位<sub>一</sub>、即宣令  
給<sub>レ</sub>食、錄唯差退唱<sub>二</sub>膳部<sub>一</sub>二聲、膳部稱唯、錄宣給<sub>レ</sub>食、即給<sub>二</sub>饌行<sub>一</sub>酒、

凡新嘗會解齋、并鎮魂<sub>東宮</sub>亦同園韓神祭、丞已上一人與<sub>二</sub>諸司<sub>一</sub>共和舞、

大膳職式曰、園韓神祭雜給料、春冬白米二斗、糯米四斗、小麥二斗二升、大豆小豆各一斗九升、

胡麻七升二合、酢一斗、鹽酒一斗、醬六升、鹽二斗、胡麻油八升二合、東鯨隱岐鰻鳥賊各十六  
斤、細貫鰻佐渡鰻堅魚各十四斤、熬海鼠腊干峭各十二斤、煮堅魚十一斤、雜腊三十斤、鮪五十

斤、雜鮪三岳、堅魚煎汁一升四合、海藻二十三斤、芥子一升四合、饌案六脚、菽敷料曝布十二  
條、菽敷各六尺、折櫃六十合、敷料□□□條、各長三尺大等六十合、調布六十條、片盤四十八口、案別片

碗十二口、案別窪坏二百四十口、案別四口、折<sub>二</sub>窪坏二百七十六口、案別六口、折<sub>二</sub>平坏三百六十口、折櫃別  
瓮六口、塙五口、食薦五十枚、弓絃葉五撥、蒜一斗、葱二斗、蘿菔五十把、芹六斗、高菹五斗、芸薹

二斗、胡蘇五升、關十把、蔓菁六斗、葵二斗、已上三種內筋竹四十株、山城國鮮魚直充<sub>二</sub>餘餘祭同料<sub>一</sub>、鮮魚菓子直布六端  
布敷<sub>二</sub>、糖八升、松明八十把、炭二斛、薪三百十斤、松明以下官人當色一領、膳部六人明衣佐渡布人

別二丈一尺、

大炊寮式曰、園韓神祭料、夏冬稻八束、受神雜給米二斛六斗二升八合、折櫃五斗、平飯五土塙六合、  
石八斗二升料加鏡形六十口、柏三十把、薪百五十斤、其當<sub>二</sub>祭日<sub>一</sub>允屬史生各一人奉<sub>二</sub>炊部使部等<sub>一</sub>、共赴<sub>二</sub>祭

所<sub>二</sub>供事<sub>一</sub>、

主殿寮式曰、園韓神祭料、油二升、油瓶一口、燈蓋八口、燈炷布二寸、

掃部寮式曰、凡園並韓神春祭、宮内省神院南方舍西第一間設<sub>二</sub>內侍已下御神子等座<sub>一</sub>、次西面北  
上神祇官治部省雅樂寮並御琴師歌人等座、南壁下北面西上歌女座、北舍西第一間設<sub>二</sub>御神子

座第二間北邊南面東上御琴師座、北南歌人座、第三間南面西上公卿座、其東五位已上座、公卿  
座後外記史中務丞錄內舍人大舍人等座、外記史座後太政官並諸司史生以下座、冬祭亦同、

内膳司式曰、諸祭雜菜、春秋園韓神祭三斛、

造酒司式曰、園韓神祭神、春冬酒二石、醋三總言尺、醋三細布三尺、酒壺二具調布三丈六尺、一丈四尺街七口  
丈二尺机二前、折敷料坩二合、折敷料坩七口、酒坏二合、折敷料窪坏四十口、盤四十口、瓮四口、八足机二前、一前五位已  
覆<sub>二</sub>折敷料<sub>一</sub>、命婦坩七柄、命婦黑苳三斤、命婦結料

主水司式曰、園韓神祭料、春冬漿料米四升、高盤四口、土塙四口、陶碗六合、瓮四口、布篩一口、

四匏二柄、炭五斗、右官人一人奉<sub>二</sub>水部二人及仕丁等<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>祭所<sub>一</sub>供事、

左馬寮式曰、園韓神祭擬飼馬二匹、白備入匹別馬部二人、每<sub>二</sub>祭官人一人奉<sub>一</sub>馬醫<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>、其馬  
祭畢並還<sub>二</sub>本寮<sub>一</sub>、

○神社要録

八十九







日乙丑、今夕付賜園韓神社司等奏狀、件狀趣、假令去々年彼御社爲大風顛倒、仍爾已來彼祭停止、太不可然、可有修造之由也、中抑件社于今無沙汰、尤不可然、先例彼社顛倒之間、有被相憚事等歟、近年不及其沙汰、陵夷甚也、十一月十二日辛丑、今日園韓神祭也、而御社依無其實停止、中原康富記、文安六年二月十四日乙丑、今夜園韓神祭也、中祭儀如常、云々、とみえ、其後記錄所見なし、恐らくは此頃よりこそ絶たりけめ、

社職

臨時祭式曰、凡園韓神社殿守者、以封丁一人充之、其月糧者、以神封庸米内給之、月別六斗、

雜事

三代實錄、貞觀十六年二月十五日乙巳、欲修鎮魂祭、而十二日皇太后宮火死、今日内裏火産、神祇官卜云、園韓神、今年春秋不祠、仍成祟、○朝野群載曰、園韓神社、請特蒙天裁、被下宣言、差賜官使、勘註神殿雜舍廻垣等損色、令別功置致修造狀、右謹檢按内、御社去治曆二年修造以後、漸及廿箇年、神殿舍垣等、多以破損、難避風雨、二季禮奠、諸官供奉、祇敬之間、蒸嘗有煩、望請天裁、被下宣言、差賜官使、勘註損色、將令別功置早致修造、仍勒在狀、謹解、永承二年正月十三日、預宮主從五位下行神祇大祐卜部宿禰兼宗、○百練抄、大治二年二月十四日、園韓神社、神祇官以下八神殿、并内外院門垣、中燒亡、中園韓神御正躰同奉取出之、但後日兼俊宿禰曰、八神殿、園韓神、自元無御正躰、但園韓神有神寶劍

梓云々、○長秋記、大治四年三月廿一日己亥、參院、中仰云、去夜本院御夢想有老人、稱宮内省住人、申云、近日居住近邊、雜人等亂入、甚難堪也、此事可令訪給也、今朝被尋之處、彼園韓神二社、入夢驚申歟、件社燒亡後、未突四面垣、仍雜人等亂入、○壬生古文書曰、文殿、勘園韓神社注進可被造進神殿御鎮式具例事、右件例宜令勘申者、引勘文簿之處、件鎮不被修造神殿之時、臨時被造進之例無所見、但去永久二年八月、大原野社神殿四宇金物并鏢等爲盜人、被放取之由、彼社司所言上也、仍以榮衛一人叙料可造修之狀、同三年六月十八日被下宣言、隨以件叙料、被造修既了、仍勘申、治承二年五月十一日、右史生泰信人、中原國行、左史生紀守康、安倍貞友、園韓神社言上、依今月廿日中時大風、南門西砌榎樹片侯口徑一尺折懸間門、北方橋破損事、右當社神殿南門四面築垣等、去建長二年若狹國所被造進也、而件大木折懸間、門北方皆破損、恐可有修造沙汰歟、二季祭并鎮魂祭之時、依無一字之舍屋、雨雪之日、雖用帷幄、因茲上卿以下、可被着此門座、及大破者於事不便歟、且去年冬長角築垣覆一本餘、雖被盜取、爲少事、未言上、以此次注進如件、謹解、建長七年七月廿二日、權祝宗岡行包、祝安倍久種、權禰宜宗岡包、員、禰宜安倍久賴、○康富記、應永廿六年二月五日、大風、園韓神御社顛倒、

大膳職坐神三座 並小

大膳職は音讀也、または於保加志波氏乃拾井抄部に、大膳職、宮城内待賢門南腋、また同抄部指圖に、待賢門南腋、大炊寮北、主水司東にありと云り、















水神  
埴山姫

祭神明か也○日本紀神代卷上、一書曰、伊弉册尊生火産靈時、爲子所焦而神退矣、亦云神退矣、其且神退之時、則生水神罔象女及土神埴山姫下略

祭祀

四時祭式曰、六月祭鎮火祭、於宮城五色泮繩各四尺、倭文四尺、木綿五兩、麻一斤、庸布二段、釜四口、米酒各二升、鰯堅魚各一斤五兩、腊四升、海藻一斤五兩、鹽一升、埴埴坏各四口、榲四把、匏四柄、藜四圍、

祝詞

祝詞式曰、鎮火祭、高天原爾神留坐、皇親神漏義神漏美能命持豆、皇御孫命波豐葦原乃水穗國乎、安國止平久所知食止、天下所寄奉志時爾、事寄奉志天都詞太詞事乎以豆申久、神伊佐奈伎伊佐奈美乃命、妹背二柱嫁繼給豆、國能八十國島能八十島乎生給比、八百万神等乎生給比、麻奈弟子爾、火結神生給豆、美保止被燒豆石隱坐豆、夜七夜盡七日、吾乎奈見給比、吾奈妹乃命止申給比、此七日爾不足、隱坐事奇豆、見所行須時、火乎生給豆、御保止乎所燒坐支、如是時爾、吾奈妹乃命能、吾乎見給布奈止申乎、吾乎見阿波多志給比津申給豆、吾名妹能命波、上津國乎所知食志、吾波下津國乎所知止申兵、石隱給氏、與美津枚坂爾至坐氏所思食久、吾名妹能所知食上津國爾、心惡子乎生置豆來止宜豆返坐豆更生子、水神、匏、川菜、埴山姫四種物乎生給豆、此能心惡子乃心荒比、水神匏、埴山姫川

93435

菜乎持豆、鎮奉事教悟給支、依此豆稱辭竟奉者、皇御孫命能朝廷爾、御心一速比給止波志爲豆、進物波明妙照妙和妙荒妙、五色物乎備奉豆、青海原爾住物者、鮭廣物鮭狹物、與津海菜邊津海菜爾至爾、御酒者眼邊高知、眼腹滿雙豆、和稻荒稻爾至爾、如横山置高成豆、天津祝詞乃太祝詞事以豆稱辭竟奉止中、

道饗祭 同上

神祇令義解に、季夏道饗祭、謂卜部等、於京城四隅道之上而祭之、自欲令鬼魅自外來者不敢入、故預迎於道而饗也、季冬道饗祭、公事根源に、六月晦日、是は疫神の祭也、毎年に必行はるべき事也、近比は絶て侍るにや、是も卜部の人、京城の四角の路にて、鬼魅の他方よりきたるを、京路に入ざらしめむ爲に、路上に供物を備て祭る也、鎮火、道饗の祭をば、四角四堺の祭と申也、と宣へり、  
祝詞考に、此式は、今本に大祓、鎮火、道饗、と次て、書しは、古への書體を、まらぬものゝわざ也、云々、神祇令の古本には、一神衣、三大忌祭、と書て、右左右左と、横に讀ことにて、其次も、二月次祭、三鎮火祭、とあり、其よむべき次てを、義解に、凡讀此四祭者、先讀神衣、其次三枝、其次大忌、其次風神、即與公式令連署義同、以下諸祭並准此例、といへるにて、知るべし、此式の祭とももの次も、同晦日の中時に、先大祓、次道饗、その夜に入て、鎮火は行ふなれば、例をまたずして、まるかりけり、と云るは然るべし、

八衢比古神  
八衢比賣神



祭神明か也

祝詞考に、古事記に道之長乳齒神、その長乳齒は、紀に、長道磐と書しかば、上にいふ磐村の如く、塞坐いさをしきす神にて、即ちこの八衢比古、八衢比賣を申すなり、云々、「古事記傳六の卷、道侯神の註に、道饗祝辭にいほゆる八衢比古八衢比賣は、此神なるべし（昔紀に神を衝神とあれ、そは別なり、と云り、何れならん、猶考ふべし、）

久那斗神

祭神明か也○日本紀神代卷上、一書曰、伊弉諾尊已至泉津平坂、中遂建絶妻之誓、時伊弉册尊曰、云々、伊弉諾尊乃報之曰、云々、即投其杖、是謂岐神、（岐神此云布、加斗能加登、亦一書曰、投其杖、）曰、自此以還雷不敢來、是謂岐神、同卷下、一書曰、經津主神以岐神爲郷導、周流削平、○古事記神代段に、於投棄御杖所成神名、衝立船戸神、

祭祀

四時祭式曰、六月祭道饗祭、（於京城、）五色薄繩各一尺、倭文四尺、木綿一斤十兩、麻七斤、庸布二段、鑿四口、牛皮二張、猪皮鹿皮熊皮各四張、酒四斗、稻四束、鰯二斤五兩、堅魚五斤、腊八升、海藻五斤、鹽二升、水盆坏各四口、擗八把、匏四柄、調薦二枚、○掃部寮式曰、神祇官諸祭料、折薦、道饗祭料四枚、

祝詞

祝詞式曰、道饗祭、「萬天原爾事始豆、皇御孫命止稱辭竟奉、大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神

等之前爾申久、八衢比古八衢比賣久那斗止、御名者申豆稱辭竟奉（久根國底國與龜備疎備來物爾、）相率相口會事無豆、下行者下乎守理、上往者上乎守理、夜之守日之守爾、守奉齋奉止、進幣帛者、明妙照妙和妙荒妙爾備奉、御酒者越邊高知腹滿雙豆、汁爾爾、山野爾住物者、毛乃和物毛乃荒物、青海原爾住物者、鱒乃廣物鱒乃狹物、奥津海菜邊津海菜爾至（爾、）横山之如久置所足豆進宇豆乃幣帛乎、平久聞食豆、八衢爾湯津磐村之如久塞坐豆、皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉、茂御世爾幸爾奉給止申、又親王王等臣等百官人等、天下公民爾至（爾、）平久齋給止、神官、天津祝詞乃太祝詞事乎以豆稱辭竟奉止申、

鎮魂祭

神祇令集解に、仲冬寅日、（朱云、上卯之、）四時祭式に、十一月中寅日晡時、「公事根源に、十一月中寅日、鎮魂祭は、それ人には魂魄の二の玉あり、魂は陽氣、魄は陰氣也、この祭は、離遊の運魂をまねきて、身軀の中府にまつむる功能あり、宇麻志麻治命の時より事おこるよし、舊事本紀などに見えたり、此祭を如法におこなはるれば、殊勝の御祈と成べきにや、されば白川院は、御脱履の後も、院中にて猶行はれ侍りき、東宮中宮にても年々ある事也、天安二年に止められ侍りしを、興行せられて、貞觀元年十一月、神祇官にて行はる、今は年々の事になれり、と宣へり、

神八座

此神は、神祇官西院坐御巫祭神八座也、



大直神一座

日本紀神代卷上、一書曰、伊非諾尊、遂將<sub>レ</sub>盪<sub>レ</sub>滌身之所汚、乃興言曰、<sub>レ</sub>次將<sub>レ</sub>矯<sub>レ</sub>其枉而生神、號曰<sub>レ</sub>神直日神、次大直日神、<sub>レ</sub>又曰、伊非諾尊、親見<sub>レ</sub>泉國、此既不祥、故欲<sub>レ</sub>濯<sub>レ</sub>除其穢惡、<sub>レ</sub>中還<sub>レ</sub>向於橘之小門、而拂<sub>レ</sub>濯也、于時<sub>レ</sub>中出<sub>レ</sub>水吹<sub>レ</sub>生大直日神云々、

此神を八神と等しく祭れるに、社壇もなく、祈年祭にも預り給はぬは、故ある事なるべし、さて右祭の式等は、此宮中の卷、神祇官八神の條に委く云り、此祭の事、中原康富記、文安四年以後所見なき事、御體御卜に同じ、然て近年は、伯の里亭に於いて形ばかりの式あり、大嘗會齋院祭神

大嘗會は、神祇令集解に、仲冬下卯大嘗祭、相嘗者三卯者以中卯爲祭日、不更待下卯也、爾云、如諸神大嘗祭、謂若一月內有卯日三日者、中卯可<sub>レ</sub>釋下卯也、於上卯二釋下卯二、然則鎮魂祭之後、可<sub>レ</sub>爲大嘗祭、但職員令爲<sub>レ</sub>文禮連、大嘗祭下云耳、每年每世大嘗、並此日可<sub>レ</sub>祭、但每世大嘗祭年者、每年大嘗不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>祭也、踐祚大嘗祭式に、凡踐祚大嘗、七月以前即位者、當年行事、八月以後者、明年行事、此據<sub>レ</sub>受禰即位、非其年預令<sub>レ</sub>所司卜、定悠紀主基國郡、奏可<sub>レ</sub>訖即下知依<sub>レ</sub>例准擬、又定<sub>レ</sub>檢校行事、○齋院は、悠紀、近主基、丹兩國齋郡の齋場をいふ也、

- 御歳神
- 高御魂神
- 庭高日神
- 大御食神

大宮女神

事代主神

阿須波神

波比伎神

右八座の中、御歳神の事は、大和國添上郡葛木御歳神社の條、高御魂神、大御食神、大宮女神、事代主神の事は、神祇官八神殿の條、阿須波神、波比伎神の事は、神祇官坐摩巫祭神の條に委しく云り、<sub>レ</sub>庭高日神は古事記上に、大年神又娶<sub>レ</sub>天知迦流美迦流美豆比賣<sub>レ</sub>生子、<sub>レ</sub>中次庭高津日神とありて、阿須波波比伎兩神の弟神也、庭高日と中も、共に庭中を守り給ふ由なるべし、

但し大嘗會の記文は、數多あれど、齋院八神の祭を記せるものは此式に限れり、尊とからずや、

祭祀

踐祚大嘗祭式曰、凡拔穗田者、國別六段、川百姓所營田、其代以正稅二給之、八月上旬、申<sub>レ</sub>官差<sub>レ</sub>宮主一人卜部三人發遣、兩國各二人、其一人號<sub>レ</sub>稻實卜部、一人號<sub>レ</sub>禰宜卜部、到<sub>レ</sub>國各於<sub>レ</sub>齋郡<sub>レ</sub>大祓、馬一疋、太一杖、魂皮一枚、麻布一段、木綿一斤、堅魚鮓各四斤、海藻滑藻各四斤、米、訖卜<sub>レ</sub>定田及齋場雜色人等、歌人歌造酒各四斗、鹽四升、當郡備<sub>レ</sub>又稱別刀子一柄、箭一雙、鹽二口、麻一斤、稻一束、訖卜<sub>レ</sub>定田及齋場雜色人等、歌人歌造酒兒一人、神語佐可郡古、以<sub>レ</sub>當郡大<sub>レ</sub>御酒波一人、節粉一人、共作二人、多明酒波一人、已上稻實公一人、燒炭一人、採薪四人、歌人二十人、歌女二十人、訖鎮<sub>レ</sub>齋場、其幣五色薄繩各五尺、木綿麻各



三斤、倭文五尺、鐵二口、斧小斧鎌各二柄、下部二人、明衣料繩二疋、調布二端、綿八屯、造酒兒酒波等調布三端一丈四尺、綿一屯半、縫糸一兩一分二銖、並用大藏物但鎮祭所須酒者、當國供之、所作八神殿一宇、長四丈、廣一丈、稻實齋屋一宇、長二丈、廣八尺、使衛屋一宇、長四丈、廣一丈二尺、稻實公等屋一宇、造酒兒等屋一宇、長各二丈、廣一丈二尺、並以黑木及草構葺、壁葺以草、堀井一處、蓋以片屋、院內方十六丈、以柴爲籬、編木爲廡、即於齋院祭神八座、御哉神、高御魂神、庭高日神、大御食神、大宮女神、交代主神、阿須波神、波比伎神、其幣座別絹四尺、五色薄繩各一尺、倭文一尺、木綿一兩、絲一絀、綿一屯、布一段、鐵一口、稻一束、米酒各四升、鯉堅魚海藻各二斤、腊鹽各二升、並用國物、又曰、凡齋郡之齋院祭神八前、下部二人、兩國各給、又曰、凡在京齋場者、預分設兩處、悠紀在左、主基在右、兩國所、送拔穗稻、到京即先鎮祭其他、訖造酒兒先執齋飯、始掃地并堀院四角柱垣、下部奉國郡司以下及役夫等、入下食山探材、即祭山神、訖造酒兒先取齋斧始伐木、然後諸工下手、探大齋宮、又下部奉郡司以下雜色人等、入下食野刈草、即祭野神、訖造酒兒先刈、次諸人下手、刈大齋宮、其齋場者、分爲內外兩院、以柴爲籬、編木爲門、內院所造八神殿一宇、稻實屋一宇、黑酒白酒屋各一宇、倉代屋一宇、贊屋一宇、白屋一宇、大炊屋一宇、麴室一宇、外院所造多明酒屋一宇、倉代屋一宇、供御料理屋一宇、多明料理屋三宇、麴室一宇、已上倉屋皆以長廣稻、宜皆以黑木及草構葺、以草爲葺、但麴室裏以長薦、其酒屋麴室席爲承座、曝布爲裏、其井二處、卜訖御井者造酒兒始堀、造酒兒井者、稻實下部始堀、其二院營造既訖收御稻於稻實屋、但御飯稻造棚別置祭御膳八神於內院、其幣上、又曰、凡大管祭畢差禰宜下部二人、造兩齋國祭御膳神八座、即爲解齋、明日燒

却齋場、其供神物者以當國物充之、

前件五祭、殊に大祀齋郡の儀は、御代始一度の事にして、尋常の神社祭禮には拘はらず、臨時に招禱し奉る式なれども、重き神事なれば、其由をままねく知らしめむために枚舉せ

齋宮寮祭神

寮の在所詳ならず

大宮賣神四前

造酒司に祭る處に同じ○齋宮祈年祭條大社とす

御門神八前

御門巫の祭る處に同じ○齋宮祈年祭條前に同じ

忌火神一前

庭火神一前

大炊寮、内膳司等に祭る處に同じ、

竈神二前

大膳職、大炊寮、造酒司等に祭る所、皆四座也、

御井神二前

主水司に祭る處一座也○齋宮祈年祭條大社とす

支道云、伊勢國の齋宮村に在る也、詳ならず、は言がたし、



卜庭神二前

左京二條に祭る處に同じ○齋宮祈年祭條前に同じ○印本二月當寮祈年祭の條に、此二前を脱す、今桂家御本、小槻家本に依て補ふ、

地主神一前

祭神詳ならず○齋宮祈年祭條前に同じ

祭祀

齋宮寮式曰、二月祈年祭廿一座、大宮寶神四前、御門神八前、忌火神一前、庭火神一前、座別絹五尺、五色薄 繩各一尺、倭文一尺、庸布一丈、木綿二兩、麻五兩、槍鋒一口、釜一口、酒四升、鯨堅魚海藻各六兩、腊二升、鹽一升、埤坏各一口、

右供神物如前、但宮寶神加馬一匹、其惣祭所、須缶二口、菟二柄、喪調薦四枚、短帖一枚、祝詞料庸布五段、造幣忌部三人、明衣料調布一段三丈五尺、

又云、六月祭、十二月月次祭、

右供神調度准祈年祭、但除釜、

炊殿忌火庭火神二前

水部忌火庭火神二前

殿部御竈神一前

御川水神一前

酒殿神一前

膳部御食神一前

大炊竈神一前

以上祭神明か也

前件九前、祈年祭神に准ふべし、

祭祀

齋宮寮式曰、十一月新嘗祭廿八座云々、自餘供祈年祭、座別絹五尺、倭文并五色薄繩各一尺、庸布一丈四尺、木綿二兩、麻五兩、酒四升、鯨堅魚海藻滑海藻各六兩、腊二升、鹽二升、壺坏各一口、馬一匹、宮寶神料布六口、

右供神料物如前、但預祈年二神座別加槍鋒一口、其惣祭所、須葉薦六枚、祝詞料庸布五段、造幣忌部三人明衣料布一段三丈五尺、

○印本祈年祭廿一座として、卜庭神二前を脱せり、然れば、其神の前十九座也、また新嘗祭廿八座とありて、其神を算ふれば、載する處九座にて、自餘は祈年、月次神是と見ゆ、依て或説に、祈年祭の條廿一座とあるは、恐らくは十九座の誤と云り、連胤按るに、こは祈年祭は廿一座にて、卜庭神二前の脱たる事疑ひなし、そはいかにといふに、齋宮祈年祭に預る卜庭神二座の、爰に漏すべきためしなれば也、されど如此いふ時は、新嘗祭廿八座を、卅一座に作らざれば、合がたきに似たれど然らず、忌火庭火神は、炊殿水部兩所に在すを、



祈年祭には、たゞ忌火庭火神として、二座に祭り、新嘗祭には、炊殿水部と兩所にて、四座に祭り、竈神は、殿部大炊兩なるを、祈年には、竈神二前と載せ、卜庭神は祈年に預れど、新嘗には預らざるなるべし、式の書様簡古に過て、前後の座數合ざるより、後人轉寫の時、祈年の卜庭神二前を省けるならん、されど惣數廿一座を十九座には改めず、其まゝに寫し來れるにて、取捨の明かなる事を知るべし、

齋院司祭神

在所詳ならず

忌火竈神

祭神明か也

祭祀

齋院司式曰、祭祈、五色繩各一尺、倭文一尺、庸布一段、釜二口、木綿麻各二斤、東腹堅魚海藻各一斤、鹽一升、酒米各二升、椀二口、水戸一口、柏二把、匏一柄、

右神祇官直移二所司二請取、令二宮主祭一、

相嘗祭

若七月以前定齋王者當年祭之、八月以後者待二明年一祭、

神座二前

下上兩社料南面東上

祭神明か也

祭祀

同式曰、五色帛各四尺、酒二斗、供神料  
請所司一

右毎年十一月上卯日、鷄鳴齋王潔齋、遙拜奉幣於神社、夕時設二上件神座於齋殿、座別設二齋王供承座一祭之、中救使至二社奉幣之後、於二社前一給二兩社禰宜祝及忌子等祿、同二四月祭一

例、下

相嘗祭の事は、標目の卷にいる如く、都てはいとはやく絶たるを、此式に殊に載せられ、應仁亂の以前まで行はれしをみれば、大かたの相嘗祭とは、格別の事なるべし、さては賀茂兩社にのみ、彼式の遺れりと思ふべからず、

雜事

中右記、寛治八年十一月七日、五日齋院相嘗延引、元永二年十一月朔日癸卯、今日依二相嘗一供二新穀一、二日庚辰、中頭辨顯隆朝臣下二社解并官外記勘文一云、中社解云、去夜戌剋火出、從御庫二及二正殿一、中門廻廊舍屋廿宇已燒了、中今日齋院相嘗、後朝御神樂延引、云々、大治二年十一月五日辛卯、齋院相嘗也、云々、同四年十一月十一日、賀茂相嘗、云々、同五年十一月四日癸卯、賀茂相嘗依二式日一行二之一、吉記、山槐記治承四年に、さて薩戒記、應永卅三年十二月二日、今夜見ゆ、是記錄のある所也相嘗祭也、云々、爰も賀茂社の事  
全文にまゐるし此後所見なし、程なく絶たるなるべし、

竈神

祭神明か也

祭祀



同式曰、祭新、五色帛各二尺、倭文二尺、木綿麻各一斤、鰯堅魚腊海藻雜海菜各一斤、鹽米酒各二升、坏四口、瓶一口、水戸一口、柏四把、匏一柄、

右祭料、神祇官毎月直移<sub>二</sub>所司<sub>一</sub>請取、令<sub>二</sub>宮主祭<sub>一</sub>云々、

縫殿寮祭神二座夏祭 冬祭准此

今は廢亡せり、下の路寮拾芥抄<sub>宮城</sub>指圖に、大藏省南、内藏寮東、また同抄<sub>京程</sub>指圖に、縫殿町、一條南、油小路東にあり、

御匣殿神一座

祭神詳ならず

祭祀

縫殿寮式曰、五色薄繩各三尺、絹二匹、綿二屯、絲二絢、納<sub>レ</sub>幣明櫃一合、其細繩等重冬祭賜物酒二斗、饌食二案、脚別机四前、二盛<sub>二</sub>幣料<sub>一</sub>、二盛<sub>二</sub>禮<sub>一</sub>、食料、並<sub>二</sub>内膳司備<sub>一</sub>、調布一端、敷<sub>二</sub>幣案<sub>一</sub>二丈八尺、祝史料庸布二段、

縫殿神一座

祭神詳ならず

祭祀

同式曰、木綿大八兩、酒二斗、米糲各一斗、大豆小豆各五升、鰯五斤、腊乾魚海藻各六斤、

著酒神一座

祭神詳ならず

祭祀

同式曰、五色薄繩各二尺、木綿大一斤、鮮物、並<sub>二</sub>酒四斗<sub>一</sub>、米三斗、糯米一斗、大豆小豆各五升、鰯五斤、腊乾魚海藻各六斤、物忌童女裝束絹一匹、又<sub>二</sub>紫絹三丈<sub>一</sub>、調綿二屯、<sub>料</sub>

以上三前神、四月十一月上卯日祭、前三日受<sub>二</sub>件料物<sub>一</sub>、

陰陽寮祭神

拾芥抄<sub>宮城</sub>指圖に、美福門内、中務省東にあり、

庭火並平野竈神祭 坐<sub>二</sub>内膳司<sub>一</sub>

内膳司祭神の條見るべし

神座十二前 各六前

祭神詳ならず

祭祀

陰陽寮式曰、名香二兩、紙六十張、布一丈六尺、黍稷飯各一斗二升、酒二斗、鯉魚四俵、乾魚鮓各二斤、東鰯二斤、堅魚六斤、鰯鹽各二升、赤白餅各卅六枚、棗栗各二升、糯米鳥穀各二斗、堀十二口、坏四十口、繼四十口、折櫃六合、桶一口、杓二柄、缶一口、中取一脚、柏六把、炭五斗、松明廿把、席四枚、食薦八枚、淨衣六具、料麻布巾二條、福酒料錢一貫文、

右毎月癸日之中擇<sub>二</sub>其吉日<sub>一</sub>祭、若<sub>二</sub>當<sub>一</sub>御其料物者、前<sub>レ</sub>祭申<sub>レ</sub>省、省移<sub>二</sub>所司<sub>一</sub>請受、

御本命祭



こは本命星を祭る也、本命星とは、七星を云也、拾芥抄星部に、子年人貪狼星、丑亥年巨門星、寅戌年祿存星、卯酉年人文曲星、辰申年人廉貞星、巳未年人武曲星、午年人破軍星と見え、日曆雜考にも出したるが如し、

神座廿五前

祭神詳ならず

祭祀

同式曰、名香廿五兩、紙七百五十張、作禮形二万五千文、粗形二百五十張、馬形五十張、料、筆一管、墨一延、小刀一柄、布一端、敷布、脯廿五胸、酒醴各三斗、米三斗、雉七枚、食薦十三枚、坏二百口、盤五十口、折櫃八合、桶二口、杓五柄、中取二脚、松明四十把、炭五斗、缶二口、瓮二口、錢二貫文、淨衣六具、巾二條、中宮、右料物前祭請内藏寮、毎年六度祭之、其中取年中一度請木工寮通用、

三三元祭

此祭の事は外に出たる處なし、陰陽の家に屬て尋ぬべし、

神座九前

祭神詳ならず

祭祀

同式曰、名香三兩、紙三百張、錢形九菓子五升、脯九胸、油七合、燈臺七基、高各布一尺、燈柱、東、爲酒醴各二斗、白米二斗、折櫃九合、坏五十口、盤廿口、薦七枚、食薦九枚、中取三脚、桶

一口、杓四柄、缶二口、炭五斗、松明十五把、錢二貫文、淨衣四具、巾十條、

右料物前祭請内藏寮、毎年三度祭之、其燈臺中取年中一度請木工寮通用、古本首書に、寮官人云、立茅不用化茅、只敷神座并結燈臺之料而已云々とあり、○此祭并神號の他に所見なし、猶考ふべし、○増鏡七、北野の雪の條に、其頃大風吹て、陰陽寮の守護神の社もまるびぬ、と見えたるは、別に社のありしにや、

織部司祭神

拾芥抄京程指圖に、織部町、正親町南、大宮東にあり、

織女神

祭神天棚機姫神歟○舊事紀神祇に、復令天棚機姫神織神衣、所謂和衣者、云爾故太倭

祭祀

織部司式曰、七月七日織女祭、五色薄籠各一尺、木綿八兩、紙二十張、米酒小麥各一斗、鹽一升、鰯魚脯各一斤、海藻二斤、土碗十六口、加坏十口、席二枚、食薦二枚、錢三十文、右料物請諸司辨備、造棚三基、二基司案料、一基臨時所料、祭官一人、祭郎一人、供奉祭所、祭郎先以供神物、次第列棚上、祭官稱再拜、祝詞訖亦稱再拜、次稱禮畢、  
掃部寮式曰、織部司織女祭所、席二枚、食薦二枚、

辰巳隅神

戌亥隅神



並に祭神詳ならず

神位

三代實錄、元慶三年閏十月廿三日己酉、授織部司正六位上辰巳隅神、戊亥隅神、並從五位下、  
連胤 按るに此二神織部司式に載せず、恒例臨時等の祭祀なければなるべし、

### 大膳職座神

大膳職は神名帳にあると同じ

### 誓院竈神四座

誓院は、拾芥抄京程部指圖に、職西、宮内省北にあり、新撰字鏡古本に、誓子匠反醴也、和名抄飲食部に、誓保、豆醴也とみえたり、○竈神の事は、神名帳高倍神社の條見るべし、

連胤 按るに、神樂歌の中に、竈殿の歌といふあり、こはもと供御の飯など調する時、炊男炊女等が、職れに誦ひたるが、みやびたる詞なれば、竟に神樂にもうたふやうになり、さて後世まで、佳例になれりし事、酒殿の歌に均しかるべし、歌は爰に要なければ、また擧す、

### 菓餅所竈神四座

菓餅所は職の内なるべし○並に祭神明か也○今は廢亡せり

### 大炊寮祭神

大炊寮は、拾芥抄宮殿部指圖に、郁芳門内、大膳職西にあり、

### 大八島竈神八座

○竈殿遊歌  
止與戸川比  
美安所比須  
其之能比左  
可大能比安  
耳能比左乃  
古惠須比古  
須比左末乃  
比左可大乃  
安仁能可與  
真比比止與  
安會比比須  
之毛比比須  
能古惠須留

大八島は嘗をいふ也、○祭神明か也

日本紀、天智天皇十年、是歲大炊省有八鼎鳴、或一鼎鳴、或二、或三俱鳴、或八俱鳴、

祭祀

大炊寮式曰、竈神八座、五色薄繩各四尺、商布八段、釜八口、木綿八兩、麻一斤、東鯨三斤、猪突

雞脂堅魚海藻各二斤八兩、鹽一升六合、米酒各八升、稻八束、但稻餅三

右奉祭料依前件、冬祭准此、

### 齋火武主比命神

### 庭火皇神

並に祭神明か也

連胤 按るに、此二神、大炊寮式に載せず、織部司の二神に同じかるべし、さて神樂歌の中に、庭燎の歌といふあり、こは酒殿の歌、竈殿の歌とは異にして、江家次第に、内侍所御神樂の事、云々、訖人長起召才男、頭一人、殿上人一兩人、殿上召人、地下召人等各一兩人、其人或至庭火前掛退、ともみえたれば、所謂庭燎をいふにて、爰の庭火神とは格別なれど、前なる二歌の縁に名の均しきより思ひ惑ふ事もあらんと引出て、其分をいひ置のみ、

神位

文德實錄、齊衡二年十二月丙子朔、大炊寮大八島竈神、齋火武主比命、庭火皇神、並授從五位下、天安元年四月癸酉、有敕、大炊寮大八島竈神授從五位下、並出三代實錄、貞觀元年正月

玄道按、庭  
火神は内膳  
司に坐す  
御紀に坐す  
此寮に坐す  
りとおぼし

比左乃古惠  
須留



廿七日甲申、奉授大炊寮印本宮大膳從五位下大八島齋神八前、齋火武主比命神、並從五位上、主殿寮祭神

主殿寮は、拾芥抄百官に、宮城内、上東門院北、大宿北、また同抄宮城指圖に、達智門内とあり、

神二十三座

主殿寮式に、神二十三座、寮寮四座、釜殿三座、松山三座、嵐山十三座、○並に祭神詳ならず

祭祀

主殿寮式曰、神二十三座、云々、五色薄綿各五尺、倭文三尺、木綿三斤、麻二斤、歛五口、酒三斗、飯一斛、米四斗、糯米二斗、大豆四升、鹽一斗五升、鰯魚各一籠、腊三籠、雜鮓一缶、海藻四籠、洋醬二斗、糯米四斗、食薦四枚、柏一俵、商布五段、並用寮物、但釜殿神、右春祭料依前件、秋祭准此、

内膳司祭神

内膳司は、拾芥抄宮城指圖に、采女司西にあり、

忌火神

庭火神

並に祭神明か也

神位

文德實錄、天安元年四月癸酉、有勅、内膳司忌火庭火皇神授從五位下、三代實錄、貞觀元年

正月廿七日甲申、奉授内膳司從五位下庭火皇神從五位上、同九年正月廿六日丁卯、授内膳司從五位上庭火皇神從四位下、元慶二年七月八日辛丑、授内膳司從四位下庭火神從四位上、日本紀略、康保三年八月廿六日戊午、授内膳司正四位下庭火神從三位、

平野齋神

祭神明か也○陰陽寮式に、庭火并平野齋神祭、座内膳司○禁秘御抄階梯に、自神代所傳、鏡有

鏡三口、一稱平野、一稱齋火、一稱庭火、已上座内膳司、或說平野座陰陽寮、

連胤按るに、平野を陰陽寮に在すといふ説は、同寮にて祭るよりの誤りにて、此司に在すといふかたや然るべからん、

雜事

續日本紀、天平三年正月乙亥、神祇官奏、庭火御齋四時祭祀、永爲常例、中右記、寛治八年十一月十一日裏書、御齋神事、長德三年三月廿一日、藏人信經私記云、今日遣召宮主令奉御祓、御厨子所兼信奉、宣旨、向彼司奉仕御禊、還參令奏聞云々、内膳司御齋神三所也、一所平野、件癸御祭奉仕之神也、一所庭火、是尋常御飯奉仕之神也、一所忌火三神也、是則十一月新嘗祭、六月神今食祭奉仕之神也、按此御齋神三所之中は、即ち鏡三口を稱する事、下に引用る諸書にて明らかし、

天曆九年六月廿三日、今夜坐内膳司忌火等御神奉遷、冷泉院内膳、仍權大納言師尹卿以下奉遷之、忌火謂二口也、庭火謂鏡一口也、各有臺長櫃等、衛府持之奉移院乾方新屋、庭火平野別々屋也、安置之後宮主申祝詞、日本紀略、永觀元年十月一日癸未、卯刻内膳



司平野庭火御竈釜被盜取一畢、十二月廿五日丙午、内膳司平野御釜如元置本司、件釜先日被盜取一畢、仍新所鑄也、百練抄、仁治三年十月九日戊午、今夜内膳御竈神渡御新造内膳云々、不相觸宮主、又上卿不供奉、未曾有事也、同抄、寶治二年十月廿二日乙未、内膳屋燒亡、御竈神燒損給云々、十一月十九日壬戌、軒廊御卜、内膳竈燒損事也、閏十二月廿二日乙丑、被定内膳御竈可鑄改日時定、來廿八日、

西宮配に、内膳御竈、奉遷他所事、以生絹覆上、衛士八人昇之、宮主先解除、納言一人、弁外記史以下步行供奉、前に出ず、天曆九年、仁治三年、波、禁秘御抄に、竈神、行幸他所之時、中納言以下供奉、尤可爲靈物、女房不忌之、男主上之外不沐浴也、四五破、但指合用之、不可說物也、

園神祭

- 京北園神二座
- 長岡園神三座
- 奈良園神三座
- 山科園神一座
- 羽束志園神三座
- 奈美園神一座
- 政所神一座

並に祭神在所等詳ならず

祭祀

内膳司式曰、園神祭、春秋十四座云々、京北六位十三座、五位神一座料、五色繩各三尺、倭文一尺、木綿麻各八兩、鑿一口、白米三斗、糯米一斗、大小豆各三升、酒一斗、鰯二斤、堅魚腊各六斤、雜鮓十一斤、海藻四斤、鹽六升、六位神料、座別五色薄繩各一尺、倭文一尺、鰯一口、木綿麻各一兩、米一升、酒七合、鰯堅魚腊海藻各五兩、鹽七合、祝料庸布二段、

逆風按るに、此神は、雜菜を作りし園ごと祭るにて、其園の段別も見ゆれば、此卷に載すべきにあらねど、國郡愷ならずもありて分ちがたく、かつ其要もなければ爰に枚擧す、

造酒司祭神

造酒司は、神名帳にありと同一、

竈神四座

祭神明か也

祭祀

造酒司式曰、祭神九座、春秋云々、四座、座別五色薄繩各二尺三寸、木綿一兩、麻二兩、猪鬃雜腊各二斤八兩、東鰯六兩、堅魚海藻各五兩、鹽二合、米酒各一升、稻一束、祝史料庸布二段、鰯四口、

大邑刀自神



### 小邑刀自神 次邑刀自神

祭神明か也、印本頭書に、古老口傳云、於保太宇女、古太宇女須伎乃太宇女止云、就字案之、於保伊於布止師、須太奈小伊於保止師、須伎乃於布止師止可讀歟とあり、

神位 官祭

文德實錄、齊衡三年九月辛亥、造酒司酒漿神、從五位下大邑刀自、小邑刀自等、並預春秋祭、三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授造酒司從五位下大戶自神從五位上、同八年十一月壬寅朔、造酒司從五位下次邑刀自饗神、准大邑刀自小邑刀自饗神等、預春秋二季祭、

此三神は、本文に依て見れば、内膳司の饗神と同じく、酒饗の稱なるべし、續古事談に、造酒司の大としといふのは、三十石入なり、土にふかくほりすゑて、わづかに一尺ばかりでたる、云々、三條院の御時、大風ふきて、かのつかさたふれにけるに、大とし、小とし、次刀自、皆打破りてけり、と云り、

祭祀

同式曰、祭神九座云々、三座、從五位上大邑刀自、從五位下小邑刀自、次邑刀自、座別五色繩各五寸、倭文五寸、木綿麻各大八兩、紫繩二尺五寸、一尺二寸五分、衣衾并雜、緋繩二尺五寸、一尺二寸五分、衣衾并雜、盛一籠、堅魚四斤八兩、海藻三斤、雜膳十兩、雜膳三斤、鹽五合、糯米五升、白米一斗、大豆小豆各二升、酒一斗五升、祀史料庸布一段、鐵二口、

### 主水司祭神

主水司は神名帳にあると同じ

### 御井神一座

祭神明か也○廿一社記に、御井神とは、生井神、榮井神也と云り、

祭祀

主水司式曰、御井神一座祭、春秋五色薄繩各二尺、倭文二尺、木綿一斤、鐵二口、酒五升、精米飯各一斗、鰯堅魚膳各一斤、海藻一斤、鹽二升、麻箸一口、杓一柄、祝料商布一段、

雜事

日本紀略、昌泰元年五月十八日丙戌、御井有聲如雷、

此祭は、主水司の内なる、供御料の井を祭るなるべし、

### 御生氣御井神一座

祭神前に同じ

運氣云、生氣とは、拾芥抄八卦に、吉神四柱の一にて、離卦に當る年は生氣卯東、坤卦に當れば生氣辰南、兌卦に當れば生氣乾北、坎卦に當れば生氣巽西、巳乾卦に當れば生氣兌西、四長卦に當れば生氣坤中、震卦に當れば生氣離南、巽卦に當れば生氣坎北と見え、但し、今に略す、拾芥抄を見るべし、日曆雜考に、生氣は玉女神向此方可香水、河上、年始出行著衣裳或騎馬、女八卦は又逸へり、



祭祀

同式曰、御生氣御井神一座祭、中宮五色薄籠各二尺、倭文二尺、木綿一斤、銀一口、酒五升、精米飯各一斗、鰯堅魚腊各一斤、海藻三斤、鹽二升、商布一段、已上祭料絹篩一口、五寸缶二口、土椀二合、加盤下片盤五口、已上汲水料

右隨御生氣、擇宮中若京内一井堪用者定、前冬土王令牟義都首濂治即祭之、至於立春日味旦牟義都首汲水付司擬供奉、一汲之後廢而不用、

氷池神十九座

祭神詳ならず

速風 按るに、此祭は氷池に到りて行ふにはあらず、司にまきての事なるべし、さらば式に其所をいはず、次なる風神祭とは格別ならん、

祭祀

同式曰、氷池神十九座祭、座別五色薄籠各五寸、木綿一兩、麻二兩、米酒各一升、鰯堅魚各五兩、腊十一兩、海藻凝海菜各五兩、鹽五合、廿一口、

右毎年十一月祭之、

氷池風神九所

祭神明か也○氷池の在所詳ならず、江家次第元日節には、氷山城國徳岡、大和國都介、河内國更占、近江國龍華、丹波國神吉とあり、「公事根源元日節に、氷様は宮内省より奉る、去年氷をを

さめたる所々の様を、今日節會のついでに奏聞する也、云々、延喜式にも、氷池、風神の祭など侍り、氷の多くるるは聖代の驗、氷のぬけ凶年にて侍れば、氷の御祈とて、大法祓法を行はれしにや、けふもよく氷て、目出よしのためしを奉る也、と宣へり、

祭祀

同式曰、氷池風神九所祭、山城國五所、大和國一所、河内國一所、近江國一所、丹波國一所所別五色薄籠各一尺、米一升、酒二升、海藻一斤、雜魚二斤、祝所料商布一段、

右若有年温氷薄、隨即祭之、尋常寒歲不在此限例、

此神は、内膳司園神と同じく、散在せる氷池にて祭れるなるべし、殊に毎年の儀にもあらず、されど祭祀の二、なれば、爰に枚擧す、

左馬寮祭神

左馬寮は、拾芥抄宮城指圖に、漢壁門内西、大宮東にあり、

生馬神

祭神詳ならず、「扶桑略記に、左馬寮乾角御坐と云り、

神位

三代實錄、元慶三年二月四日甲子、授左馬寮无位生馬神從五位下、「日本紀略、延喜元年七月一日庚戌、加左馬寮坐生馬神一級、御馬依苦助甚也、略記諸社根元記、天德三年三月廿九日正三位、



選胤按るに、此神左馬寮式に載せず、恒例臨時共に祭祀なければなるべし、

右馬寮祭神

右馬寮は、拾芥抄<sup>百官</sup>指圖に、左馬寮南、二條北とあり、

保馬神

祭神詳ならず

神位

諸社根元記、延喜三年三月十五日從五位下、

選胤云、此神右馬寮式に載せざる事、左馬寮生馬神に同じかるべし、

○前件縫殿寮より右馬寮まで、祭る神々、今は職寮司共に、其曹荒廢したれば、祭典の絶たるも諾<sup>ノカ</sup>也けり、かつ社のあるとなきと一様ならねど、式の次第を以て爰に表出す、

園池司祭神

園池司は、官位令義解の傍書に、寛平八年併内膳司と見えたり、

御氣津神

祭神明か也

此神寛平以後は、内膳司に祭るべし、されど記文所見なし、

神位

三代實錄、貞觀三年五月甲戌朔、授園池司無位御氣津神從五位下、

鑄錢司祭神

鑄錢司は、平常に置く司にあらず、鑄錢の期に臨みて置くべし、さてこは葛野の鑄錢所に、貞觀通寶を鑄させ給ふ頃の事なるべし、

黑山神

火山神

並に祭神詳ならず

神位

三代實錄、貞觀十五年九月廿七日己巳、授鑄錢司正六位上黑山神、火山神、並從五位下、



神社叢書第三之卷

○京中

中臣朝臣連胤謹撰

京中坐神三座 並大

京中は音讀也、さて京中とは、左京洛陽と右京長安をいふ、南は九條大路、北は一條、東西は京極中間に朱雀大路ありを限る、「拾芥抄京極に委しくみえたり、今右京は廢して左京のみ存り、其のは天正十八年の頃、豐臣秀吉公定め、置給ひし由、室町殿日記追加にみえたり」○四時祭式新祭に、奠幣案上神云々三座とあれば、並大なる事論ひなし

左京二條坐神社二座 並大月次相嘗新嘗

並大印本並小に誤る今古本に據て改む

左京二條は音讀也、さて左京は右京に對へたる稱也、前にいふが如し、即ち今の市中也、○今廢亡せり、二條は今も明かされず、舊在所詳ならず

古事談に、龜卜御占、春日南室町西角御坐太詔明神と申す、伴社を此占之時奉念云々、「正安三年記に、ふとのとの社春部今はひとことの堂の内に勧請歟、」中古京師圖に、春日今は丸ふの南室町西角にみえたり、故に連胤此邊を尋ねれども、社跡はもとよりにて、堂趾もわからず、如何とも爲べき便なし、  
太詔トノミコトノカミ戸命神

太詔戸は布斗能理斗と訓べし、日本紀神代卷上、一書曰、太諄辭此云布斗能理斗とあり、○命は美舉等と訓べし、同書に命訓美舉等といへり、下なる命の字、皆これに倣ふ○祭神明か也○式二、四時相嘗祭神七十一座、略太詔戸社二座、並左京○頭注に、左京二條太詔戸神、本社和州添上郡、對州下縣郡、天兒屋命也、

日本紀神代卷上、一書曰、乃使天兒屋命掌其解除之太諄辭而宣之、「同神代下、一書曰、天兒屋命主神事之宗源者也、故俾以太古之下事而奉仕焉、」釋日本紀に、龜兆傳曰、凡述龜響、皇親神魯岐、天照大神神魯美命、高御產巢日荒振神者掃平、石木草葉斷其語、中神之神也問問賜之時、取天香山白鹿名鹿、一説云、白鹿男鹿、吾將仕奉、我之肩骨内抜々出、火成ト以問之、問給之時、已致火爲、太詔戸命進啓、又按、神女住天香山、龜津比女、命今郡天津詔戸太詔戸命也云々、「江次第に、御躰御占、神祇官人自朔日籠本宮、迎太詔戸神、」

類社

大和國添上郡太祝詞神社、大月次新嘗對馬島下縣郡太祝詞神社、名神大

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授左京職從五位上太祝詞神正五位下、「日本紀略、延喜三年五月十九日、授左京太詔戸神從四位上、」承平元年六月一日丁巳、奉授左京坐正四位上太詔戸神從三位、「天慶三年七月五日戊辰、奉授左京從三位太詔戸神正三位、」  
連胤按るに、貞觀元年の紀に依れば、左京職内に在す如く見ゆれど、職は拾芥抄百官譜に、











當江次第作  
五箇日江次  
第作九箇  
日

申神祇官候御體御下之由、上卿仰可令奉奏案之由、以次入者、即度南座、次神祇副或記伯副等云々、伯可奉歟、或云伯以下昇机、中臣官人留奏者、又檢前例天曆六年六月番、奏案於文杖、入自敷政門、進膝著奉之退出、次官人四人昇案立、軒廊東第二間、政門外、退出、上卿召外記、內侍候者仰可催山、內侍臨南殿東櫓、上卿召外記、仰可召神祇官之由、即起座度、小庭立、軒廊西第一間、南面或西面、或又立二門、外發外記奉神祇官一人、進就案下、官人跪取御下、丞授外記退出、外記跪奉、上卿退出、上卿御笏取丞并階、突片膝授、內侍還著本座、官人徹案、內侍又臨東櫓、上卿進承、救答、依復陣座、召外記、仰可傳仰、即給奏案、令續收、救答見、內裏式并清涼抄、而近代不見、內侍直出之例、但延長五年十二月罷云、依云々、件罷雖有所限、有救答例也、又見承、內侍候者、猶例或中內侍代令奏、又上卿奏上令、藏人奏、或免奏、內平五年十二月九條罷、其後大宮返給自、內侍所、內侍不候者、侍不候之由、或奏御下之次、令加奏此由、今爲、仍直奏、上卿仰外記云、右神祇官外記奉、官人參入、官人取函授、外記退出、外記取之立、小庭、上卿起座、經軒廊西第二間、天曆九年六月、左大臣川中、延喜二十年、又用、進御所、付藏人、令奏、承、勅答、復本座、仰外記、其藏人所可送請、而延喜二十年、藏中有穢者、立案於左衛門陣外、令外記中事山、上卿令藏人奏、仰外記、令付內侍所、外記奉奏案、以司人、令昇御下案、付內侍所、御物忌日、又經奏、即付內侍所、元慶五年、納言以上中、藏不參、太政大臣於式當用、令奏之、參議奏例未聞、然而依納言不參、臨時所被行也、九條罷、忠文朝臣令付內侍所之由、見外記之、○天曆五年六月、依內侍不參、上令中代、又不給仍參上令、奏私記、○同三年七月十七日、右大臣令、依藏延引、仰外記、令、勅、御下七月以後、奉仕例、勅申云、其觀以後、無此例、十二月御下、不及立春、山先年神祇官有勅申、月內被行之例、多者、被仰云、不可、勅、宣日行者、依承平六年例、令、奏、賜、勅、申、可、行、之、由、仰云、延引之時、勅、日、行、乎、大臣、令、奏、云、承平六年定、日、仰下者、始、自、廿六日、三箇日之間、奉仕、廿九日、可、奏、由、被、仰、了、延引、時、或、如、社、五箇日、或、三日、廢、下、云、○同四年十二月、神祇官、中臣官人不足、代、以、散位高邪、令、候、御下、○天延二年六月十日、上卿不參、外記、藏人後

中、太政大臣、件奏付、內侍所、上卿不參之日、付、內侍所、例也、此日不可、必、有、奏、延、長、二、年、左、大、臣、仰、拜、基、廟、訖、  
江次第曰、御體御下、六月十二、上卿參議著陣、外記跪、小庭中云、神祇官御體御占候、上卿仰云、奏案令進典、外記稱唯退出、上卿度外座、以次上卿、召官人、令、敷、膝、突、著、神祇副一人、中、臣、仰、案、立、軒廊東第二間、東西、立、之、本、畢、退出、上卿召外記、先、例、御、內、侍、候、不、近、代、不、必、問、之、仰云、神祇官召世、近例或不、召神祇官、外記直函立非也、外記退出、奉神祇官人參入、官人取函授、外記、畢、退出、伴函木函、以墨塗之、以木釘指之、外記取之立、小庭、上卿起座、經軒廊西第二間、可、隨、上、卿、昇、案、中、納、進、御所、付、藏人、奏、之、御、所、置、於、費、御、不、待、返、事、歸、著陣座、先例藏人仰云、依奏行、近例上卿更不待、仍不仰、此由、召外記、給奏案、畢、是、或、依、或、依、奏、可、行、山、可、仰、外、記、非、也、是、依、又、一、通、神、司、渡、官、官、成、官、符、也、上、卿、退、出、或、能、神祇官撤案之後、給奏案於外記、近代先給即退出、御物忌時令藏人奏、聞山緒、付內侍所、仰外、禁、中、有、穢、時、立、案、於、左、衛、門、陣、外、令、外、記、中、上、卿、令、藏、人、奏、仰、外、記、令、付、內、侍、所、外、記、奉、奏、案、以、司、人、令、昇、御、占、案、付、內、侍、所、司、人、御、外、或、亦、延、引、納、言、以、上、不、參、之、例、元慶五年云々、見、北、天、慶、六、年、六、月、云々、見、北、天、曆、三、年、十、二、月、九、日、無、納、言、奏、議、依、外、記、天、延、二、年、六、月、云々、見、北、延、引、例、天、曆、三、年、七、月、云々、見、北、代、初、例、治、曆、四、年、治、部、卿、隆、俊、卿、付、御、所、奏、之、不、待、返、事、著、陣、自、御、所、被、尋、其、由、申、云、待、返、事、之、說、本、不、習、之、事、也、依、代、初、猶、可、有、救、許、云々、仍、藏、人、著、陣、仰、依、奏、可、行、由、中、臣、官、人、不、候、例、天、曆、四、年、十、二、月、



云々、見北應和四年六月、云々、見西宮抄應和三年十二月、云々、見西宮抄或肥云、六位官人四人昇案云々、然而或令伯以下昇机、中臣官人一人留奏云々、神祇官人自朔日籠本官、迎太韶神、式云、六月十二月御占之間、不得奏授封戶及田、奏後給承知官符、神祇官進使差文、次給内印官符、

朔野群戴曰、御體御下、神祇官謹奏、

天皇我御體御下爾、率下部等、天太兆下供奉留狀奏、親王諸王諸臣百官人等、四方國賓客之政、風吹雨零、旱事開食、折被置間給部長、自來七月至于十二月、御在所平氣御坐止、供奉留御下火數、百六十火之中、直下百十火、交下七火、地相下六火、天相下十二火、神相下八火、人相下六火、兆相下十二火、神相下八火、人相下二火、地相下七火、以是下求、坐伊勢國大神宮御領、伊賀神戶領、參河本神戶、同新神戶領等、遠江本神戶、同新神戶等、同宮御領服織殿神部等、依過穢神事、與給遣使科、上被可令被清奉仕事、又坐若狹國若狹比古神、常神、又坐越前國氣比神、劍神、志比前神、足羽神、枚井手神、又坐加賀國白山神、氣多神、又坐能登國氣多神、伊須流支比古神、又坐越中國鵜坂神、氣多神、白鳥神、三宅神、又坐越後國大社、伊夜比古神、河野神、氣多神、物部神、又坐佐渡國大目神、度津神、引田部神、飯持神、又坐丹後國籠神、須岐神、物部神、又坐因幡國高野神、大江神、又坐伯耆國倭文神、大神山神、國坂神、又坐出雲國杵築神、河上神、又坐阿波國天石門別神、大麻神、忌部神、白鳥神、又坐讚岐國大麻神、櫛梨神、大水上神、田村神、又坐伊豫國村山神、大山積神、野

間神社司等、依過穢神事、與給遣使科、中可令被清奉仕事、又至來秋季、可有土公之祟、鬼氣祟、逃季初、祭治大宮四隅、山城國六堺、兼又祭日供奉御禊事、此等參條事行治忌慎給波、御在所平氣可御坐狀、下供奉給止奏、

以前太兆下供奉御體御下如件、謹以申聞謹奏、

承曆四年六月十日

宮主正六位上行權少祐下部宿禰兼宗

神祇官謹奏

中臣從六位下行大祐大中臣朝臣惟維

天皇我御體乃御下、率下部等、天太兆下供奉留狀奏、親王諸王諸臣百官人等、四方國乃賓客之政、風吹雨零、旱事開食、抑放置且間給部長、自來七月至于十二月、御在所平氣御坐止、供奉御下火數、百八十二火之中、直下百三火、災下十九火、地相下十六火、天相下十四火、神相下十二火、人相下十火、地相下八火、以是下求、坐伊勢國大神宮御領織殿麻織少神部、三重郡司、柴田鄉專當、一志神戶預、安濃神戶預、河出神戶預、多氣郡司等、依過穢神事、與給遣使科、中可令被清奉仕事、又坐近江國小野神、多何神、水都惠神、又坐美濃國大領神、伊波乃西神、伊富岐神、又坐信濃國穗高神、少內神、又坐上野國貫前神、伊加保神、赤城神、又坐下野國二荒山神、三和神、又坐陸奥國都都古和氣神、菊田嶺神、多加神、鼻節神、鹿島天足別神、東屋沼神、伊佐須美神、大高山神、志波姬神、又坐若狹國宇波西神、多太神、常神、又坐越前國枚井手神、大虫神、雨夜神、志比前神、又坐加賀國菅生石部神、野間神、多



大神、又坐能登國氣多神、神代神、自比古神、又坐越中國高瀨神、林神、鵜坂神、白鳥神、選川神、又坐越後國大前神、坂本神、荒河神、古井神社司等、依過穢神事、崇給遣使科中祓可令被清奉仕事、又至來冬季可有土公崇、越季初祭治大宮四隅、京四隅、山城國六堺、兼祭日可供奉御禊事、此等式條事行治忌慎給波、御在所平氣可御坐狀、卜供奉給久奏、

以前太兆爾卜供奉留御體御卜如件、謹以申聞謹奏、

康和五年六月十日

宮主從五位下行少祐下部宿禰兼良

神祇官

中臣從五位上行權少副大中臣朝臣輔清

卜時推平否事

太兆爾卜供奉<sup>其</sup>常神能并諸例事<sup>乎</sup>、無漏久行治給<sup>乎</sup>、自來七月至十二月、東宮君平安<sup>久氣御</sup>坐哉卜問給、御卜火數廿二火、直卜十火、災卜五火、地相卜二火、天相卜二火、神相卜一火、人相卜一火、地相卜一火、以是卜求爾、可有<sup>冠</sup>神崇乎、此二條事行治給、時推之内平安爾、可御坐之狀、卜定所申如件、

康平六年六月十日

灼手正六位上下部宿禰儀時

宮主正六位上行史伊岐宿禰奉政

中臣正六位上行少祐大中臣朝臣輔長

諸本大の字を脱す今例

同京四條坐神一座

大月次新嘗

にて補ふまに印本月次新替の四文字を脱す今例

同京四條は音讀也、同京は左京を云ふ也。○四條は今も明か也、拾芥抄<sup>宮城に</sup>、後院四町云々、又四町、三條南、四條坊門北、大宮西、壬生東、此内一町號三條殿、<sup>四宮配</sup>扶桑略記に、天元四年七月八日癸卯、内裏上棟、天皇自<sup>官廳</sup>遷<sup>御</sup>四條後院、<sup>首棟抄同下、但し太政大臣以私また拾芥抄</sup>同<sup>上</sup>に、朱雀院、累代後院、或號四條後院、三條北、朱雀西四町、四條北、西坊城東、<sup>中古京師圖</sup>同<sup>上</sup>に、四條坊門<sup>今繪師坊城筋にあたり</sup>西とみえたり、俗書ながら都名所圖繪拾遺に、四條坊門千本通の東圃<sup>中</sup>にあり、今小祠となる云々、世人はやくさと誤り、又誤り略して<sup>瘡</sup>神ともいふ、瘡毒平癒を祈願の者、土にて團子の形をこしらへ、土器に盛て神供とすといへり、恐らくは説違ふまじ、さはいへ、此所後院の跡にて、其時の社地とは定めがたくや、かく廢れたる後は、名に隨ひて、式社とも申奉るぞおのづから神慮にかなふべき、○大和志に、隼神祠在<sup>南都角振町</sup>云々、事見<sup>成身院僧</sup>英俊天文十二年日錄と云へり、然れば當社も遷都の時、太<sup>詔</sup>戸神久慈真知神と同じく奉齋れるならんか、故大和國なるは此帳にも載せられぬは、當社を主と祭れるゆゑなるべし、東三條にては角振神隼神と二座に祭れるも、南都に由縁ありてきこゆるもの也、

隼神社

隼は波也布佐と訓べし○祭神詳ならず<sup>台配、久安十年十月十七日己未、奉<sup>拜</sup>隼神、奉幣七々日時</sup>○今四條坊門千本東に在す、諸社根元記云、京中式内神内隼社坐朱雀院内坐、四條坊門油小路之小社爲<sup>隼</sup>神者一説、而所<sup>載</sup>國史、坐<sup>朱雀院</sup>、東三條内角振隼者各別事也、



前件に依て考ふれば、當社四條後院の境内に坐し事明かなれど、其院頽敗せし後は、いづくとも云がたし、

神位

三代實錄、貞觀二年六月十五日甲午、授後院無位集神從五位下、同七年六月四日癸丑、授後院集神從五位上、同十年十一月十七日丙午、授後院從五位上集神從四位下、同十六年八月四日庚申、授後院從四位下集神從四位上、日本紀略、天慶三年九月四日、奉贈左京正四位上集神從三位、

○附録

式外神

宗像神三座 太政大臣東京一條第坐

祭神明加也○今は廢亡せり○太政大臣は忠仁公也○東京一條は、拾芥抄諸名に、小一條、近衛南東洞院西師尹家、一云、山吹殿、清和天皇誕生所、貞信公家坤角、有宗像社、又云、華山院、近衛南、東洞院東一町、本名東一條云々、式部卿貞保親王家、貞信公傳領之、小一條之間、號之東家、九條殿令給外家、冷泉院此所立坊、花山院傳領、名勝志に、花山院家記云、此所往古之靈地、遷都以前之舊第也、聖德太子攝政之時、衆星飛降現于靈石上、其後有宗像大神之告、閑院左大臣冬嗣公居于此、祭宗像大神、小一條宗像是也、貞信公、貞保親王亦居于此、花山院御時、此所爲皇居、自是以小一條號花山

院、京極大殿以此地被進于左大臣家忠、仍家忠公子孫號花山院、世居于此第一、帝王御年、應仁大亂爲焦土、亂後排居其舊地、至于信長公時、猶不改之、近代遷居于土御門内裏東、舊地爲民屋、諸社根元記に、勘稱由小路宗像社云々と云るも、此社とみえたり

神位

三代實錄、貞觀元年二月晦日丙辰、云々、筑前國宗像神位也、筑前國の下見合へし、太政大臣東京一條第從二位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵島姬神、並授正二位、此六社居雖異、實是同神也、同六年十月十一日甲子、坐太政大臣東京正二位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵島姬神、並進階級加從一位、

神寶 官幣

三代實錄、貞觀七年四月十七日丁卯、內藏頭從五位上藤原朝臣安方、向太政大臣東京第社、並奉楯梓御鞍等、諸神記曰、建治二年勘文云、東一條宗像神社三座、元爲式外之神、而去年建治元兼文依勘奏、子細可預四度官幣之由、宣下了、

雜事

土記、延久元年五月十八日、春宮權大夫其基來語中云、小一條本緣、內麻呂大臣爲三位之時、爲男正六位上冬嗣、自當麻松長手被買取云々、冬嗣爲內舍人、參內到東洞院近衛御門之間、虛中有聲云、暫留聞、吾者應聲暫留、乃示云、於小一條、買取件地可居住、福及子孫、我又住此邊爲汝護、有聲無形、隨有怖畏答云、如只今者、無可買取之力、云々、



其後經一兩月、又有聲、所示如初、答又同、又若自身之力不堪者、可被申嚴父也、於是彼大臣許諾、次問此聲爲誰乎、答云、我是住筑前國宗像郡及大和、以此相尋自知歟、又伴家傍作善居所、我必護汝一家、雖我住所々、有可教化洛陽之思也、云々、○兵範記、仁平二年十一月十七日丁未、被行東三條御神樂、開廻廊戶并神殿御戶、供神供、○大鏡に、小一條の南かてのこう地には、石たゝみをぞせられたりしがまだ侍るぞかし、宗像の明神おはしませば、洞院大路のつじよりありさせ給ひしに、雨などのふる日のれうとぞ承りし、大かた其一町は、人まかりあるかざりき、今はあやしき物も、馬車に乗つゝ、みしゝとあるき侍るけとよ、云々、此貞信公は、むなかつた明神うつゝにものなど申給ひけり、我よりは御位たかくて居させ給へるなんくるしき、と申給ひければ、いと不便なる御事かなとて、神位は申ませ給へる也、

天石戸開神 同所坐

祭神明か也○今は廢亡せり、諸社根元記云、宗像同社内、

名勝志に、花山院家記云、天石戸開神、大石也、有靈、

神位

三代實錄、貞觀七年三月二十一日壬寅、授太政大臣東京第无位天石戸開神從三位、  
 戌亥隅神 同所坐

祭神詳ならず○今は廢亡せり

名勝志に、天石戸開神同神歟可考と云り、

官幣

三代實錄、元慶元年四月十五日丙戌、頒幣太政大臣東一條戌亥隅神、告文曰、云々、大極殿并東西樓廊等、以今月九日吉日良辰、天始作留云々、

名勝志に、至今花山院家第鎮座と云り、

木枯神 皇太后宮東五條院坐

祭神詳ならず○今廢亡せり○皇太后宮は、仁明天皇の妃、贈太政大臣藤原冬嗣公女順子、五條后と號す、○東五條院は、拾芥抄諸名に、東五條、五條后宮、同抄註に、五條南、烏丸東にあり、山城志に、當社在太秦村といへるは非也、廣隆寺記云、勅、自乙訓郡、奉迎藥師佛之處、向日明神影向、寺門前楓木忽然枯矣、則此地祭神靈、然後再繁茂如元、仍稱神號木枯明神云々、名勝志とあれば、同名たりとて混合すべからず、

神位

三代實錄、貞觀四年四月廿四日壬戌、授皇太后宮無位木枯神從五位下、

角振神 東三條坐

隼神

祭神詳ならず○今は廢亡せり○東三條は、拾芥抄諸名に、東三條、四條院誕生所、或重明親王家云々、二條南町西、南北二町、忠仁公家、貞信公大入道殿傳領、長久四卅燒失、







剋京師雷電暴雨、所々有、颯破入屋、或説、此颯出自東三條内、木折時未有、颯云々、  
 日庚辰、參院、新院侍所司親賴語曰、臣有僕生年十六、日在納殿内之時、有一年若女、若初  
 者親賴僕與之通、事訖女去、即除瘡數日而膿腫遂落矣、先三四五許日、狐來、許間、見此少  
 男云々、奇異之甚、近代未聞事也、是大炊御門北高倉東亭也、此亭自本多狐也、先年夏比狐  
 悲見數日、禁之以弓矢、猶見無止、變予備、食置狐戶、自此之後、狐不見焉、爰知狐有  
 神靈乎、此亭郭内及乾角有古小社、若其神之所致歟、加之此亭度々免四方火災及家中放  
 火之殃者乎、久安二年四月十日己酉、入夜於乾角小社、舉神樂、右近將監近方已下  
 皆布衣、但人長遠兼衣冠、無饗祿、先之奉幣無拜、予立車聞之、是求消火食災、既有  
 火御子之號、又在冢北、似懷火於回祿者也、○今昔物語に、二條 北西洞院 八西西洞  
 院而 住僧有 東三條戊亥 角 御 神 森 筋向 見 渡 八常 經 殿  
 奉 此神 法樂 奉 ○榮花物語に、女院東三條院のせさせ給て、なやましうおぼしめした  
 り、云々、この三條院のすみの神、たゞりといふ事さういきて、其けしきいみじうあやに  
 くげ也名勝志に、此今昔物語、榮花物語を、角振筆  
 神の條に注するは不動の誤なるべし。

戊亥隅神

左京職坐

祭神詳ならず○今廢亡せり○左京職は、拾芥抄百廿に、朱雀東、姉小路北とあり、  
 神位

三代實錄、貞觀五年十二月三日辛酉、左京職正六位上戊亥隅神授從五位下、

八所御靈宮

上下二社

祭神吉備大臣、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、藤大夫、橘大夫、文大夫、火雷天神諸社根元記○八  
 座の傍に下  
 ○上御靈社は、今鞍馬口の南、京極の西に在す、名勝志に、座相國寺北、應仁記云、御靈森、  
 相國寺、大堀、西細川方要害云、中御靈は、上御○下御靈は、今京極春日南に在す、同志に、元  
 坐新町應司南、慶長年中遷座云々、下御靈御旅所、始は室町中御門南大門町にあり、今は絶  
 て當社拜殿を御旅所とす、或云、上御靈は上出雲寺、御靈、下御靈は下出雲寺御堂といへ  
 り、和名鈔に、愛宕郡出雲、伊都毛、  
 在上下

連胤云、吉備大臣は神祇拾遺に、京極上御靈、一云出雲路御靈、拾遺は元より三代實錄貞觀五年の文  
 されば七座なる故に、藤原に座す靈數天皇を加へて八  
 座とし、かつ高野御靈、藤原夫人とせらば杜撰の説也、今昔物語に、藤原廣繼惡靈靜ナル事ナカリケレ  
 バ、天皇恐レサセ給テ、吉備大臣ハ廣繼ガ師也、速ニ彼墓ニ行テ誘ヘ可捉ナリト仰セ給ヒ  
 ケレバ、吉備宣旨ヲ奉、西ニ行テ廣繼ガ墓ニシテ、勲ニ捉誘ケレバ、其靈止マリニケリ、  
 倭渡三才圖會に、吉備公出於下昇三品、靈重終三年、而有何恨爲靈神之第一乎と云り、立入經德云、京師八所  
 御靈第一吉備聖靈と云、吉備内親王なり、天平元年給死し給ふ、今世吉備大臣と云甚誤なり、凡此八所皆怨靈を和め玉ふ  
 に、吉備公何の怨あるや、且崇道天皇の上に人臣を位せんやと云れたる、皆卓見なるべし、概日本紀、天平元年二月癸酉、  
 令長屋王自盡、其室吉備内親王自縊、甲戌、遣使葬長屋王吉備内親王於生馬山、仍勅曰、吉備内親王者無罪、  
 准例送葬、但停鼓吹、長屋王者、依犯伏誅、雖准即入、交醜其葬、吉備内親王且知皇子尊之皇女也とみ  
 ゆ、されば序次も正しく疑ひなきに似たり、今年来考訂もせず、ただ今昔物語などによりて、吉備大臣の靈さのみ  
 思へるは、いかにぞや、さはいへ、今世に至りて改めんさすも能せず、○崇道天皇は、神祇拾遺に、山城國高  
 野御靈、諸社根元記に、早良親王是也、光仁天皇第三皇子、拾芥  
 抄同日本後紀、延曆十九年七月



後紀延暦十  
九年關は  
り粗略の文な

○神社要録

百四十八

己未、詔云、宜故皇太子早良親王追稱崇道天皇、故廢皇后井上内親王追復稱皇后、其墓並稱山陵。○伊豫親王は、神祇拾遺に、京極下御靈、諸社根元記に、崇道天皇御子、抄同、日本後紀、大同二年十月辛巳、蔭子藤原宗成、勸中務卿三品伊豫親王、潛謀不軌、云々、親王者桓武天皇第四御子也、十一月乙酉、徙親王并母儀夫人藤原吉子於川原寺、幽之一室、不通飲食、乙未、親王母子仰藥而薨、時人哀之、續日本紀、承和六年九月癸未、贈一品、○藤原夫人は、神祇拾遺に、伊豫親王母儀、抄同、歷代編年集成に、伊豫親王母、夫人藤原吉子、右大臣是公女也、續日本後紀、承和六年九月乙卯、贈從二位、○藤原夫人は、神祇拾遺に、木津御靈、諸社根元記に、廣繼靈、肥前國松浦郡鏡明神是也、抄同、續日本紀、天平十三年十二月戊子、大將軍東人等言、以今月一日肥前國松浦郡所廣嗣綱手訖、廣嗣式部卿馬養之第一子也、○橘大夫は、神祇拾遺に、下桂御靈、橘逸勢、編年集成に、承和九年七月、伴健峰橘逸勢等反、事發云々、橘逸勢伊豆國配流、○文大夫は、神祇拾遺に、綴喜御靈、文屋宮田麻呂、編年集成に、承和十年癸未十二月、文室宮田麻呂謀反、配流伊豆國、○火雷天神は、神祇拾遺に、上桂御靈、菅原天神、抄同、按諸社根元記に、山城國乙訓坐火雷神、名勝志に、社家數曰、非菅天神、當火雷神の乙訓坐神といふ、社火雷神傳有之といへり、今は拾遺抄抄に從ふ、其由縁は外七座各宛魂を祭るに、は前の七座に打合はば也、○樵談治要曰、八所の御靈と申は、昔謀叛をおこして其心ざしをとげず、或は又何事にても恨をふくめる人の靈をまつられたる社也、尾張師厚云、御靈五前等の事は三代實錄の文にてあるし、應安元年義滿公御元服記、また正長二年普光院御元服記等に、奉幣五靈社、また親長卿記にも、五靈とあれば、五前の靈を祭られたるよりの社號

ならん、今の如く三前を加へて八所と祭れるはいつ比か、名勝志に、亞槻集、文明十一年六月三日、御靈八所の明神に奉らるゝとて、内裏より十首の題を給りしに云々とあれば、此頃八所といへるならん、後考を俟のみと云へり、連胤按るに、拾芥抄に、外記日記云、三所御靈云々、西寺御靈堂、上和御靈堂、吉祥院等也、と見ゆれば、是を合せて八所御靈といふかと見えたり、

神位

諸社根元記に、至徳元年九月廿一日宣旨、從二位御靈神宣、奉授正一位々記、

祭祀

三代實錄、貞觀五年五月廿日壬午、於神泉苑修御靈會、勅遣左近衛中將從四位下藤原朝臣基經、右近衛中將從四位下兼行内藏頭藤原朝臣常行等、監會事、王公卿士起集共觀、靈座六前、設施几筵、盛陳花果、恭敬齋修、延律師慧達爲講師、演說金光明經一部、般若心經六卷、命雅樂寮伶人作樂、以帝近侍兒童及真家稚子爲舞人、大唐高麗更出而舞、新伎散樂競盡其能、此日宣旨、開苑四門、聽都邑人出入縱觀、所謂御靈者、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、及觀察使橘逸勢、文室宮田麻呂等是也、並坐事被、誅、冤魂成厲、近代以來、疫病死亡甚衆、天下以爲、此次御靈之所、生也、始自京畿、爰及外國、每至夏天秋節、修御靈會、往々不斷、或禮佛經、或歌且舞、令里貫之子親粧馳射、弩力之士袒裼相撲、騎射呈、茲走馬爭勝、倡優媿戲、遞相誇競、聚而觀者莫不填咽、遐邇因循漸成風俗、今茲春初、咳逆疫百姓多

○神社要録

百四十九







神御加階以上三箇度也、争可<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>正三位<sub>一</sub>哉、所謂建仁元年二月、諸神一同被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>增<sub>二</sub>一階<sub>一</sub>之間、此神可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>正五位上<sub>一</sub>也、夫下一同之時、者無越階矣、弘長元年二月、同被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>諸神之一階<sub>一</sub>、此日從四位下也、建治元七、又奉<sub>レ</sub>增<sub>二</sub>一階<sub>一</sub>、但其中於<sub>二</sub>極位之神<sub>一</sub>者、禰宜祝等宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>衆位之旨<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>宣下、然者當階可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>從四位上<sub>一</sub>之條、無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>歟、今般被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>從三位<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>宜、已下云々、同十六日、被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>一位<sub>一</sub>矣、奉行藏人頭右中辨忠光也、廣橋家記に、依<sub>二</sub>天下病事御所<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>正一位於五條天神<sub>一</sub>事、永和四、五、廿五、雨降、中宣旨到<sub>二</sub>來内記局<sub>一</sub>、上卿万里小路中納言也、同卅、今日万里小路中納言奉書到來、

五條天神御位記、明日神祇官人可<sub>レ</sub>持參候、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>書儲給<sub>一</sub>候哉、謹言、

五月卅日

嗣房

大内記殿

位記案、延文度進<sub>二</sub>正親町殿<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>其有沙汰<sub>一</sub>如例、今度不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>朴筥<sub>一</sub>只斐<sub>二</sub>紙<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>吉田神主兼熙朝臣許<sub>一</sub>、同六月一日、五條天神位記、今日吉田神主兼熙朝臣持<sub>二</sub>參社頭<sub>一</sub>云々、兼熙朝臣曰、正治神祇官持參、延文度内々只被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>社家<sub>一</sub>、延文紫野今宮時、兼豐宿禰被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>繪旨<sub>一</sub>持參了、任<sub>レ</sub>例可<sub>レ</sub>持參之由、被<sub>レ</sub>仰下之間、中領狀云々、仍被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>遣彼方畢<sub>一</sub>、

石神社 又云中山明神

祭神詳ならず○二條猪熊に在す、明徳今六角南、猪熊東、號<sub>二</sub>石上寺<sub>一</sub>、名勝志○古事談云、中山社殿神者、冷泉院中島令<sub>レ</sub>祝<sub>二</sub>火神<sub>一</sub>給云々、其後事外放<sub>レ</sub>光、後冷泉院御時歟、託宣云、門前車馬多時

出入給不<sub>レ</sub>輒、此所一向欲<sub>二</sub>住云々<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>之令<sub>二</sub>去<sub>一</sub>移他所<sub>二</sub>給云々<sub>一</sub>、

智證大師年譜云、天安二年戊寅<sub>大中二年</sub>六月八日、乘<sub>二</sub>商人李延考船<sub>一</sub>離<sub>二</sub>唐岸<sub>一</sub>、十八日、酉時素髮老翁現<sub>二</sub>于海上<sub>一</sub>曰、吾是新羅國神也、須<sub>二</sub>護<sub>一</sub>和尚教法<sub>二</sub>到<sub>一</sub>慈尊出世、言已不見、師入洛之時、其神又現、勅止<sub>二</sub>鴻臚館<sub>一</sub>、今之岩神是也後遷<sub>二</sub>三井北野<sub>一</sub>、名勝志所引也兼邦百首歌抄云、先二條大宮岩神へ付給<sub>二</sub>中山明神<sub>一</sub>と申、是三井寺北の院にまします新羅大明神是也、素戔鳴尊云々、運風按るに、此神古事談に祝<sub>二</sub>火神<sub>一</sub>、年譜に新羅國神とのみあれば、素尊にはあらず、彼三井寺新羅社の左に坐す火御子神ならんか、猶考ふべし、

鎮坐

百練抄云、或記云、永承五年六月十六日、冷泉院石上明神被<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>立神殿<sub>一</sub>、

神位 官幣 造營

年中行事秘抄云、中山祭事、坐<sub>二</sub>冷泉院石神社<sub>一</sub>也、自<sub>二</sub>後冷泉院御時<sub>一</sub>、始預<sub>二</sub>官幣<sub>一</sub>、天喜元年四月也、百練抄公事根源に、永承五年六月十六日神社を建立し、同同六年十一月八日に、從三位の神位を授け奉らる、是は冷泉院にまします石神也、後冷泉院天喜元年よりはじめて官幣あり、

山槐記、治承二年十一月十二日、奉<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>神社四十石上<sub>一</sub>、冷泉院内

燒亡

百練抄、永承五年七月三日、新造冷泉院放火、諸國木守等撲<sub>二</sub>滅之<sub>一</sub>、建保二年十一月廿一日、午時二條猪熊燒亡、冷泉院内中山明神在<sub>二</sub>其内<sub>一</sub>、



京極寺八幡宮

祭神石清水同昧歟○今上御靈西に在す○諸社根元記に、京極寺、三條京極、名勝志に、應仁以後上御靈西遷乎、坐八幡宮と云り、

祭祀

中右記云、寛治八年八月八日、申時許馳參大學寮、先寮東門南邊昇立神輿、田樂獅子鼓笛隨講、雜入成市、大驚問之、人々申云、今日彼京極寺之祭也、而於此門前、先例爲御輿迎處、仍今致如在之禮也、

山槐記云、治承二年十一月十二日、中宮御座奉使社内、京極寺、

雜事

古文書云、名勝志所引川京極寺八幡宮、年始恒例神馬一疋、爲毛可率進之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十年正月八日

伊勢守 在列

京極寺八幡宮御師

賀茂社

祭神賀茂上下の兩神歟○今廢亡せり○諸神記、四條坊門油小路賀茂社、堀川院御宇實季卿室依夢告祝之、

百練抄に、賀茂別宮云々、坊門尼大貳藤經平女、附勸請、太政大臣實季室、

鎮坐 祭祀

百練抄、康和五年正月十六日、皇子爲羽降誕于左少辨顯隆五條宅、母女御オホイコ、大納言實季女也、本朝世○台記、康治元年五月十六日、今夜御物語之次、及法皇誕生時事、仰云、朕未生以前、故堀川院被疾病也、云々、又見后無子、年闋納朕母贈后、朕在孕時贈后母所生男於賀茂、明神夢中居衣袖通言語、他日又夢當生男、可取在間木之物、夢驚探間木得銀龍、其龍傳在朕許、又以夢中明神所居之衣、爲御體作社、在坊門亭、朕于今進御

供、櫻古事、一談同

朱雀院石神社

祭神詳ならず○今廢亡せり○朱雀院は、拾芥抄云、累代後院、或號四條後院、三條南、朱雀西四町、四條北西坊城東、○名勝志云、今此地有池、土人呼尼池、泉石跡殘矣、

山槐記、治承二年十一月十二日、奉使神社四十箇所内朱雀院石上、

燒亡

百練抄、治承元年正月卅日、朱雀院鎮守石神明神燒亡、

梅忠社

祭神詳ならず○今廢亡せり

諸社根元記に、安貞二三十六、兼直參殿下、大外記師季參入而談云、一條京極梅忠社事、或記云、宗直也、今俗誤梅忠、雖道祖神、中御門右府不憚此名如何、



雜事

源平盛衰記に、治承元年四月十三日、十禪師客三社の神輿を陣頭へ振上奉、大嶽、水呑、不動堂、西坂本、下松、伐堤、賀茂河原、河合、梅忠、柳原、法成寺になりければ云々、

法成寺惣社

祭神詳ならず○今廢亡せり

祭祀

百練抄に、建久五年九月九日、法成寺惣社祭也、

山槐記、治承二年十一月十二日、奉使神社四十箇所内法成寺惣社、

雜事

後愚昧記に、應安二年四月廿日、日吉神輿入洛云々、侍所上坂左勢數百騎馬助陣法成寺角社邊、

法興院惣社

祭神詳ならず○今廢亡せり○拾芥抄に、法興院、二條北、京極東、本號東二條、二條關白傳領、大入道殿第後爲堂、

山槐記、治承二年十一月十二日、奉使神社四十箇所内法興院惣社、

穀倉院八幡宮

祭神石清水同躰歟○今廢亡せり○穀倉院は、拾芥抄云、二條南、朱雀西、在大學寮西、納畿内諸國銅鐵無主位職田及沒官川太宰稻等諸庄物、或云、朱雀門前云々、西宮記云、或抄云、大

同年中始置此院、

山槐記、治承二年十一月十二日、奉使神社四十箇所内穀倉院内八幡宮、三長記、建仁元年七月廿七日、橋盛家申穀倉院大多羅志女寶殿覆動夏兵衛、

日、橋盛家申穀倉院大多羅志女寶殿覆動夏兵衛、

橘逸勢社

祭神明か也、御靈八所の一座也、○今廢亡せり○拾芥抄に、蚊松殿、姉小路北、堀川東、橘逸勢家、名勝志に、此地有毘沙門堂、松尾社本願房領之と云り、運風云、此舊宅地の邊に祭れるにや、

山槐記、治承二年十一月十二日、奉使神社四十箇所内橘逸勢社、

祭祀

百練抄云、平治元年九月二日、橘逸勢祭、上皇有御結構、飾以金銀錦繡、天下之壯觀也、捧持面形爲風流、人以傾之、○諸神記に、姉小路猪熊逸勢神、平治元九二上皇營其事給、世人以淫祀焉、

崇神院

祭神在所等詳ならず

山槐記に、治承二年十一月十二日、奉使神社四十箇所内崇神院、○拾芥抄京城崇親院、左大臣眞相公貞觀六年立也、養藤氏窮女一門也、在東五條京極、往年有勾當、樋口北、京極西隅、

造營



支道按此御  
設實にさる  
御取さ承り  
侍りそは勤  
學院の中  
酒殿社を置  
すれし思合  
すべくこそ

三代實錄、貞觀元年二月十一日丁酉、右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣良相奏請、以私第一區建崇親院、安置藤原氏無居宅者、便隸施藥院、厥所須付物、令施藥院司掌之、又云、割封戸入莊田、給其費用、崇親院中一小堂安置佛像、

連胤云、實錄に神社を建立の事は見えずと雖も、斯る所には、必らず神社も在しと推量るべし、さて山槐記院號のみにて社名を載せず、尤文字の違ひおれど、朱雀院穀倉院等の鎮守を加へられければ、爰も加はるべき所也、依て暫く臆斷のまゝを記し置て、後勘をまつと云、

### 白川熊野

未考

### 法輪一居士

未考

### 今西宮

未考

### 市姫神社

祭神三女神起○名勝志に、大市姫を祭るといへ、其説なし。○今京極西、五條南、金光寺境内に在す、○名勝志に、市堂は或京程園在、北小路南、七條北、堀川西、市町北傍、

祭祀

金光寺縁起に、東市屋市姫大明神三座、延暦十四年五月七日、贈相國冬嗣公、祭宗像大神于

爲和集に  
一市ひめの  
神のいかに  
ののいかに  
ばのいかに  
つむらむ

東西市爲守護神、因號市姫、九月七日祭之、拾遺抄に、市門は七條猪隈なり、市屋あり、まつりある所也、着駄祭なり、夏冬二度あり、昔はその市にてあきなひはしけり、

雜事

山槐記に、治承三年正月六日乙丑、今日東宮御五十日也、云々、早且遣買市餅、買餅之事社坐、市屋東方、市、直米一石、市姫社、膝突經之幣加、、下知令致、川意例也。、三長記に、建久六年十月戊午、今日姫宮御五十日也、云々、向東市買餅、

### 新玉津島社

祭神紀伊國玉津島明神同體○五條南、烏丸西、玉津島町に在す、

鎮坐 社職

堯憲深祕抄に、等持院殿御時、御靈夢ありて、五條俊成卿の屋地に玉津島を勸請、すなはち經賢法印を彼別當職に補せられ、于今致懇祈者也、昆玉集に、爲家卿わかゝりし時は、新玉津島に百首の哥奉りて、毎月六度づ、和歌奉納ありしと也、その宮は五條にある也、祖父俊成卿の勸請の宮所也、

造營

新編古今集に、應永廿四年、新玉津島社造替の比、權大僧都堯孝よませ侍ける百首の中に、社頭祝といふ事を、權中納言雅縁、今こゝにうつすもたかき宮の哉もとの渚の玉津島姫、○薩戒記、永享六年十一月廿九日、堯孝僧都來問、女裝束事、是新玉津島回祿後有造營、仍被調



納神服之故也、僧都爲別當故也、

連胤云、貞治の比當社可合の事あり、今略之、

### 滋野井社

祭神鞠靈○今廢亡せり鞠肥云、滋野井のつじに坐す、中御門と四洞院の間也、或云當社は後鳥羽院御勸請と云々、

祭祀

諸神記に、鞠神、中御門西洞院東類、滋野井小社三座、是鞠神也、此地成通卿舊跡、一計奈林、二春陽花、三樹尊、形骸額金色文申日以紀氏祭之、故年始鞠用二件日、○兼邦百首抄に、彦田鞠の坪にあるてまりの神ともわらはる、

### 山井神

祭神詳ならず○今廢亡せり願注書勸に、一條東洞院に山井と云神おはすめり、

### 道祖神社

祭神猿田彦大神○今今出川通北二町、京極西二町、幸神町に在す、幸神と稱す、名勝志に、出雲路道祖神是也、京極東歟と云り、源平盛衰記に、奥州名取郡笠島道祖神は、都賀茂河原西一條北邊におはする出雲路道祖神

女也、

雜事

明月記に、嘉祿二年十月六日、夜方長曉鐘之程、北方有火、出雲路道祖神舍屋相連無空地、北方殊恐

支道接此は  
元は決て塞  
神三柱を祀  
りしものな  
らむか猿田  
彦大神も天  
八衝に云々  
れしにや

### 河崎惣社

祭神詳ならず○今廢亡せり

祭祀

明月記に、天福元年七月七日、川崎惣社祭、殊結構哥舞叫喚、民戶景氣似豐年、

### 福大神社

祭神詳ならず○今一條北、腹屋町西に在す、

名勝志云、冷泉家洞院、一説此社高倉九條殿地にあり、寛永年中、九條御第被造時、民家一條堀川邊贈替地、于今稱福大神町、御社今坐九條殿第、春日社傍被祭之、

雜事

古今著聞集に云、知足院殿何事にてかさしたる御堂深かりける事侍けるに、御歎のあまり、大權房と云勅諭の僧の有けるに、だきにの法を行せられたり、略初行ふに、七日に志るしなし、其時すでに七日に験なし、いかにと仰られければ、道場を見せらるべく、頼もしき志るしひ也と申ければ、則人をつかはして見せられければ、狐一疋來て供物等をくひけり、更に人にもそるゝ事なし、扱其後七日を延行るゝに、満する日、知足院殿御盡ね有けるに、容顏美



麗なる女房御枕を通りけり、其髪かさねの衣のすそより三尺斗あまりたりけり、餘にうつくしうえんにおぼしけるまゝに、その髪に取つかせ給ぬ、女房見歸て、さまわしういかにかくはと申ける聲けはひ顔のやう、すべて此の世のたぐひにあらす、天人のあまくだりたらんもかくやと覺えさせ給て、いよ／＼忍びわへさせ給はて、つよく取とめさせ給ひけるを、女房あしく引はなちて通りぬと思しめしける程に、その髪きれにけり、かた腹いたく淺ましくおぼす程に、御夢さめぬ、うつ／＼に御手にものゝかにしてあるを御覽じければ、狐の尾なりけり、不思議に思召て、大権房を召て、其やうを仰られければ、さればこそ申候つれ、いかにもむなしかるまじく候、年來嚴重のまるし覺え候つれども、是程にあらたなる事はいまだ候はず、御望の事明日午刻に必かなひ候べし、中申がごとく次の日午刻に、御悦の事公家より申されたりけるとぞ、中申のいき尾はきよき物に入て、深く納にけり、やがて其法を習はせ給て、さしたる御望などの有けるには、みづから行はせ給けり、必驗有けるとぞ、妙音院の護法殿にをさめられける、いかゞ成ぬらん、其いき尾の外もまた別の御本尊有けるとかや、花園のおとこの御跡冷泉東洞院に御わたりありし時も、ほこらを搦ていはれたりけり、福大神とてその社當時もおはしますゆゑ、此福大神の不思議おほかる中に、寛喜元年の比七條院に、式部大夫國俊といふ者あり、その子息に左衛門尉なにかしとかやいひて、四條大納言家に祖候の間、夕暮に彼亭冷泉万里小路より退出の時、大炊の御門高倉邊にてたちとままりて、おなおもしろの筆の音やといひて、行もやらすうちかたぶきておもしろがりけり、略中

扱家に行付てやがて胸をやみいだまて、あさましく大事なり、そのうへ物くるはしくて、西をさして出んと志たれば云々、その時法深房いまだ俗にて、大炊御門東洞院の山かの中納言の局の家の北の對をかりうけてゐられたりけり、この病者もなたへゆびをさしてゆかんとするを、父たがもとへゆかんと思ふかと問ければ、病者うなづきけり、母爰にかの福大神の所爲とさとりて犬を追のけつ、下

連胤按るに、當社は紀貫之靈社也といふ、續藤原集に洛衢中に福大神と云小祠あり、是則紀貫之を祝ひ貴たる社也とあり、さるに著聞集の文を見る時は全く狐のいき尾にぞ有ける、さては名跡志に所祭稻荷大明神と云り、こは世俗に狐をも稻荷明神として祭ること、なりしより後、かの著聞集なる狐のいき尾の古事を附會してかくいへるものか、

道祖神

祭神猿田彦大神○在所詳ならず

名勝志に、或京程圖在五條南西洞院東南半町、一本巽角四分一云々、今按新町西、五條面民家後園近世迄有二小社、土人稱首途神、予今有社跡、是道祖神歟可尋と云へり、

雜事

今昔物語に、延喜天皇の御代に、五條道祖神在ます所に、下○宇治拾遺に、道命阿闍梨於和泉式部道命阿闍梨傳大納言として色にふけりたる僧ありけり、和泉式部にかよひけり、經をめてたく讀けり、それが和泉式部がりゆきてふしたりけるに、目さめて經を心をすましてよみけるは



どに、八巻よみはて、曉にまどろまんとする程に、人のけはひのしければ、あれは誰ぞと問ければ、おのれは五條西洞院の邊に候翁に候、この御經をこよひ承りぬる事、生々世々わすれがたく候といひければ、道命法花經をよみ奉ることは常の事也、こよひしもかくいはるゝぞといひければ、五條の道祖のいはく、清くて讀まいらせ給ふときは、梵天帝釋をはじめ奉りて聽聞せさせ給へば、翁などは近付まいりて承るにおよび候はず、こよひは御行水も候はで讀奉らせ給へば、梵天帝釋も御聽聞候はぬ隙にて、翁まいりて承さふらひぬる事の忘れがたく候なりとの給ひけり、東宮隨筆同下○新猿樂記に、五條道祖奉資餅千葉手、

繁昌社

祭神長門前司女靈宇治拾遺○高辻北、室町西に在す、班女社ともいふ、

名勝志に、天正年中當社社遷東山左女牛八幡境内、然有奇瑞、又令坐舊地、今猶東山有針女社と云り、

鎮坐

宇治拾遺に、長門前司といひける人のむすめ二人ありけるが、おねは人の妻にて有ける、いもうとはいとわかくてみやづかひしける、後には家にいたりけり、わざと有つきたる男もなくて、只時々かよふ人などぞ有ける、高辻室町わたりにぞ家はありける、中南の面の西の方なる妻戸口にぞ、常々人にあひ物などいふ所なりける、廿七八許なりける年いふじくわづらひて失にけり、其妻戸のくちにぞやがて臥たりける、さてあるべきことならねば、したて、

鳥部野へいでぬ、扱例のさほうにとかくせんとて車より取おろす、櫃かろくとしてふたいさゝかあきたり、あやしくておけてみるに、いかにも露ものなかりけり、さりとてあらんやはとて、人々走歸りてもしやとみれば、この妻戸口に本のやうにて打伏たり、中又ひつぎに入て、此度はよく誠にしたゝめて、夕つかたみる程にひつぎより出て妻戸口にふたり、いとあさましきわざかなとて、又かき入むとてよろづにすれど、さらばくゆるかず、すべき方なくて、只こゝにあらんとおぼすか、さらばやがて爰にも置奉らむとて、妻戸口の板布をこぼちてそこにおろさんとしければ、いとかるらかにあろされたれば、そこに埋みてたかくと探にてあり云々、高辻よりは北、室町よりは西、高辻面に六七間計か程は小家もなくて、其塚ひとつぞ有ける、いかにしたる事にか、塚のうへに社をぞひとついひすへておなる、この比もいまにありとなん、

東寺八幡宮

祭神石清水同躰○大宮西、九條東寺境内に在す、

鎮坐

東寶記云、當寺影向僧形之御體現于空中、其遷座元由者、桓武天皇延曆遷都之初、東寺草創之刻、爲帝都鎮護有勸請之儀、王城之降臨以之爲初、此時亦奉安置御躰、至嵯峨聖代、平城天皇御事出來之時、與大師有御密談、先御立願成就之後、去弘仁年大師奉勸重勸請之、此時三所尊躰御影現空中、中三所御躰法體、俗并武内宿禰親影現虚空、初寫紙形、後刻



木像、安<sub>二</sub>置社壇<sub>一</sub>、中三所中僧形、八幡大菩薩右女躰、神功皇后左俗躰、仲哀天皇寺家相傳之樣如此、而去正中  
遷宮之時、執行嚴伊親入<sub>二</sub>社殿<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>御躰<sub>一</sub>、相<sub>レ</sub>語寶菩提亮禪僧正云、中御躰御首上無<sub>レ</sub>物、  
左右俱女躰也、但御手持聊有<sub>二</sub>差畧<sub>一</sub>、中此事彼僧正自筆記有<sub>レ</sub>之、傳聞男山左右御躰有<sub>二</sub>此兩  
說<sub>一</sub>云々、

雜事

圓太曆云、正和四年十二月十八日、東大寺八幡宮神輿二基、鳳皇振<sub>二</sub>弄干<sub>一</sub>內裏北面、二條同日  
神輿二基、被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>千束寺鎮守八幡宮<sub>一</sub>、

高倉八幡宮

祭神石清水同躰歟○三條坊門今御池高倉東に在す○薩戒記、應永卅三年三月六日、三條八幡  
宮、別當濟僧正

康富記、享德四年七月二日、等待寺鎮守より赤氣指<sub>レ</sub>北出云々、此鎮守赤山明神、八幡大菩薩、  
吉備大臣、北野等四所勸請之、

鎮座

諸神記云、康永三年等待院源尊氏勸請、兼豐奉行之、

雜事

普廣院殿御元服記、正長二年三月九日、御元服、三十諸社神馬勝方新八幡六條篠村御所鎮守、

道祖神社

祭神の下原  
本缺文なり

祭神

○上御靈社前に在す、有<sub>二</sub>康永四年將家喜捨文<sub>一</sub>、以上山城志

河崎天神社

祭神菅公靈歟○今廢亡せり名勝志に、河崎宮、今按洛陽七處製音内、寺絶了、本殿今在<sub>二</sub>清和院<sub>一</sub>

雜事

薩戒記に、應永卅二年六月一日、東北院參詣、辨才天、次北隣天神御廟、○二水記に、永正十七  
年五月五日、今日高國陣所河崎天神社、一大永七年十月十三日、今日大樹御出張、於<sub>二</sub>河崎天  
神邊<sub>一</sub>見物也、

三寶院天滿宮

祭神明か也○今廢亡せり

祭祀

康富記、文安元年八月十六日壬戌、正親町高倉西南角天滿宮祭禮也、

雜事

改曆雜事記に、長祿二年八月晦、神靈入洛、奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>三寶院天神堂<sub>一</sub>、○親長卿記に、長亨二年四  
月七日於<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>者天滿宮如<sub>二</sub>內裏鎮守<sub>一</sub>咫尺也、仍先被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>付祈謝之儀<sub>一</sub>、兼俱卿致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、

高松神明

祭神伊勢兩宮歟○姊小路北、西洞院東に在す、

社職



正徹書の中に、姉小路神明主豊文といふ人の哥合の時の哥に、待堪戀、「さりとると頼む夕の空ながら身をうき雲に山風ぞふく、

名勝志に、當宮昔神職、叙位例あり、今社僧領之と云り、

雑事

親長卿記に、明應四年三月八日、參、姉小路神明、自濃州、依有宿願也、同五年正月廿四日、參詣高松神明、此參詣度々事也、自濃州二年、依有宿願也、今日結願也。

七社

祭神日吉七座○大宮北七社町に在す○傳曰、永正八年八月、遊佐河内守屯于此、以上山城志

五所八幡宮

祭神五所別宮○今京極鞍馬口北に在す、花御所八幡宮と稱す、名勝志に、一説此社室町殿鎮守也、時人號御所八幡宮、室町殿殿後廢後被遷此地と云り、

鎮坐

神祇拾遺に、五所八幡事、筑前大分宮、肥前千栗宮、肥後藤崎宮、薩摩新田宮、大隅正八幡、件五座皆外國なれば、參詣も便りおれとて、後柏原院御宇大永七年に、山城國小山庄に遷さる、

住吉川宮

祭神住吉同躰歟○今廢亡せり○諸社根元記に、大炊御門万里小路住吉別宮、但馬前司高房鎮守、

支道云此は  
上の中山に  
下の給ひて  
はといか  
いかに  
はといか  
いかに

石神社

祭神岩靈○今上立賣大宮西二町許に在す

名勝志云、冷泉院岩神社者、舊在二條猪熊、近世被移六角堀川西云々、名跡志云、傳云此石始堀川西二條南にあり、中比今の地に移す、

雑事

西陣岩神記云、元岩神社地有靈石、寛永年中社頭六角被遷時、其巖巨大曳事不輒、故舊地に殘置たり、然るを中和門院御所に召れて、御池の邊に居させ玉ひけるとなん、然れども怪異の事あるに依て、北御門邊に出し置せ給ひしを、同七年遊乘院とて、常に御祈など承りし僧の申受るによつて給ける、其時今の地に移せるとぞ、女房奉書に見ゆ、件の靈石を於此稱岩神、

女院の御所様より申との御事にて候、岩神をれんしやう院へつかはされ候ま、そもじ様よく御申つけ候て道の程なんくせ候はぬやうに、御ひかせ候への上にて候、下  
はつみなかとの守殿  
いつみ

六孫王權現

祭神源經基王靈○八條北、壬生西、万祥山大通寺遍照心院境内に在す、

名勝志云、今按此所元爲六宮地、十四卷系圖云、經基王於西八條池爲龍令住之、此所今爲律院云々、



神位

元祿十四年五月廿七日、被奉授正一位位記、稱六孫王權現宮、

神社殿録第四之卷目錄

山城國上

山城國一百二十二座

大五十三座並月次新嘗就中十一座預<sub>二</sub>和嘗祭<sub>一</sub>

小六十九座

乙訓郡十九座大五座小十四座

羽東師坐高御産日神社大月次新嘗

與杼神社

乙訓坐火雷神社名神大月次新嘗

石作神社

御谷神社

向神社

茨田神社

神川神社

箕原神社

入野神社

自玉手祭來酒解神社名神大月次新嘗元名山崎社

大井神社

走田神社

國中神社

大藏神社大月次新嘗

石井神社

久何神社

小倉神社



神足神社  
 葛野郡二十座大十四座小六座  
 葛野坐月設神社名神大月次新嘗  
 木島坐天照御魂神社名神大月次相嘗新嘗  
 鹽川神社  
 阿刀神社  
 松尾神社二座並名神大月次相嘗新嘗  
 深川神社  
 鹽川御上神社  
 櫛谷神社  
 平野祭神四社並名神大月次新嘗  
 梅宮坐神四社並名神大月次新嘗  
 天津石門別稚姫神社名神大月次新嘗  
 伴氏神社大月次新嘗  
 大酒神社元名大辟神  
 愛宕郡二十一座大八座小十三座  
 賀茂別雷神社亦名若雷名神大月次相嘗新嘗  
 出雲井於神社大月次相嘗新嘗  
 賀茂御祖神社二座並名神大月次相嘗新嘗  
 出雲高野神社  
 賀茂山口神社

賀茂波爾神社  
 久我神社  
 小野神社二座祓  
 末刀神社  
 須波神社  
 鴨川合坐小社宅神社名神大月次相嘗新嘗  
 貴布禰神社名神大月次新嘗  
 伊多太神社  
 鴨岡本神社  
 三井神社名神大月次新嘗  
 太田神社  
 高橋神社  
 大柴神社  
 片山御子神社大月次相嘗新嘗



神社要錄第四之卷

畿内一之上

○山城國上

中臣朝臣連胤謹撰

畿内神六百五十八座

大二百三十一座小四百二十七座

大以下原書分注也便宜に就て本行細字に記す下皆是に倣ふべし

畿内は音讀也日本紀ウチククニ、北山○日本紀、崇神天皇十年十月乙卯朔、詔群臣曰、今返者悉伏誅、畿内無事、仁德天皇四年二月己未朔甲子、詔封畿之内尙有不給者、况於畿外諸國耶、孝德天皇大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、即宣改新之詔曰、初修京師、置畿内國司郡司、云々、凡畿内東自名懸横河以來、南自紀伊兄山以來、兄此西自赤石楠淵以來、北自近江狹々波合坂山以來、爲畿内國、田令義解云、畿猶疆也、言王畿之内也、分注大小若干座の事は、首卷に云り、下皆是に倣ふべし、

山城國一百二十二座

山城は夜萬之呂と訓べし、和名抄國郡山城、假字上源唱朝臣爲方之時、奏明以河陽離宮爲國府、式廿二上部拾芥抄國郡山城國上、○日本紀略、延曆十三年十月辛酉、車駕遷于新京、同年十一月丁丑、詔曰、略山勢實合前開、云々、此國山河襟帶、自然作城、因斯形勝可制新號、宜改山背國爲山城國、云々、○日本紀、神代天津彦根命、是凡川内直、山代直等祖也、古事記、神代天津日子根命、凡川内國造、略山代國造、云々等之祖也、舊事紀、國造餘尊初都桓原、

即天皇位、救養其功能、寄賜國造、略以天一目命爲山代國造、云々、また山城國造、桓原朝御世、阿多禰命爲山城國造、また山背國造、志賀高穴穗朝御世、以曾能振命定賜國造、同紀、天伊岐志邇保命、山城國造等祖、日本紀、天武天皇白鳳十二年九月、山背直賜姓曰連、同十四年六月、山背連賜姓曰忌寸、姓氏錄、山城國山背忌寸、天津比古根命子天麻比止都禰命之後也、

大五十三座

並月次新嘗就中十一座預相嘗祭

小六十九座

並官幣

乙訓郡十九座

乙訓は於止久爾と訓べし、和名鈔郡名乙訓、假字上式廿二上部拾芥抄國郡乙訓、○日本紀、垂仁天皇十五年二月乙卯朔甲子、喚丹波五女納於掖庭、云々、八月壬午朔、立日葉酢媛命爲皇太后、唯竹野媛者、因形姿醜、返於本土、則羞其見返、到葛野自墮輿而死之、故號其地謂墮國、今謂弟國、謂作乙訓也、古事記、垂仁又到弟國之時、遂墮峻淵而死、故號其地謂墮國、今云弟國也、日本紀、繼體天皇十二年三月、遷都弟國、古事記傳廿五、卷に、右弟國と云し地は、今の井内村今里村のあたりなり、井内村に乙訓明神の社あり、又今里村なる法皇寺と云寺は、昔は乙訓寺と云つと、或書に云り、宇治拾遺物語に、長岡の邊をすぎて、乙訓川のつらをつらと思へば、又寺戸の岸をのぼる、云々、といへり、連胤按るに、彼の弟國といひし地は、いかゞ知らねども、其證に引る井内村乙訓明神

諸本並官幣の三字を脱す今例に據て補ふ



と云は、角宮と稱る社にて、乙訓明神社にはあらず、こは山城名跡志に杜撰の説を擧たるを據としたる謬也、委しくは乙訓坐火雷神社の條に辨せり、又今里村法皇寺を乙訓寺と或書に云りといふ、或書は即ち雍州府志、名跡志、名勝志也、されば乙訓寺は然もあらんか、爰に採用なければ、更に論辨せず、

羽束師坐高御産日神社 大月次新嘗

羽束師は、波豆賀之と訓べし、和名鈔、部名羽束、假字上の如し○高御産日は、多加美武須毘と訓べし、日本紀、神代皇産靈此云美武須毘とあるに同じ、○祭神明か也社家説に、天兒康命、相殿猿田彦といふ、今從はず、○古川村北方に在す、名跡例祭四月巳日、○式三、臨時祈雨神八十五座大坐云々、羽束石社一座、○日本紀、顯宗天皇三年二月丁巳朔、阿閉臣事代、銜命出使于任那、於是月神著、人謂之曰、我祖高皇産靈、有預鑄造天地之功、云々、四月丙申朔庚申、日神著、人謂阿閉臣事代曰、以幣余田一畝、我祖高皇産靈、事代便奏、依神乞一畝、田十四町、對馬下縣直侍祠、

類社

神祇官坐高御産日神、大月次大和國添上郡宇奈太理坐高御魂神社、大月次同國十市郡目原坐高御魂神社二座、大月次對馬島下縣郡高御魂神社、名跡大

官幣

三代實錄、貞觀元年九月八日庚申、山城國羽束志神、遣使奉幣、爲風雨祈焉、

後撰集  
人未らす  
「わすらし  
ておもしろ  
さの成るな  
や身のはつ  
いふの杜と  
むむ

雜事

續日本紀、大寶元年四月丙午、敕、山背國波都賀志神神稻、自今以後給中臣氏、  
連胤按るに、高御産日神は神祇官八神の中に坐て、殊更に崇め給ふは誰も知るところ也、さて當社は葛野郡葛野坐月讀神社、同郡木島坐天照御魂神社に相對へたるに、叙位に預り給はぬをおもふに、對馬島下縣郡に坐すを本社とし、かつ神祇官にて極位を授けられたれば、准らへてありしなるべし、

與杼神社

與杼は假字也○祭神淀姫神社○水垂村に在す、今は紀伊郡に屬す、山城例祭九月十日、○明德記に、山名陸奥守氏清ハ、二千餘騎、淀大明神御前ニ浮橋ヲ掛テ、久我繩手ヲ直達ニ、西ノ岡ヲ經テ、下桂ヘ打テ出、とあるも、今の社地によく符合へり、

類社

肥前國佐嘉郡與止日女神社

連胤按るに、こはもとより同神也、以下此類は更に辨せず、爰に做ふべし、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授山城國正六位上與度神從五位下、

社領

御朱印高拾九石、又社人拾四石、

古今集  
人未らす  
「山城のよ  
どのわかに  
もつりにだ  
にこの人た  
のむ我そは  
かなき



連胤按るに、水垂社縁起云、名勝志 謹考山城國乙訓郡水垂邑大荒木森奉勸請之淀姫大明神者、中豐姫而、神功皇后之御妹、應神天皇之叔母也、云々、金龍寺開山千觀阿闍梨平素深信八幡宮、而于塞于煥參詣陸續也、是以結菴淀邊、而便其跋涉、於是踐焉、丁於此時、千觀嘗謂、神功之廣田、應神之鳩嶺者、雖知人崇家敬、而及至御妹御叔母、則其祠在海外僻境、而識者幾希也、神道之闕典豈無遺憾哉、於是親到鳳關、恭奏原廟素願、天顏有善、屢蒙許可、故應和年中飛錫航海、而自肥前國佐嘉郡河上社、奉勸請此地、畢、時村上帝殊勅賜正一位淀姫大明神尊號、といへるは何の事ぞや、此縁起者應安年中藤原實利所作と名勝志に載る社撰委託なれば、論なれど、標榜のため、に疑たり、ひならず此縁起に泥むことなけれ 此延喜式に載せしを、後なる應和に肥前國より勸請し奉るといふ、時代の前後にて明か也、されど肥前國與止日女神同躰なる事は、舊來の社傳なるべし、さて此地を大荒木森といふ、慥なる證なし、故に都名所圖會拾遺にも今さだかならずと云り、

大井神社

大井は於保爲と訓べし○祭神在所等詳ならず

山城志に、在香掛村、今稱千見明神と云り、然れども他書にかくいへるものなく、もとより地名なるべきに、此邊に大井てふ名の残れる所もなければ、今從はず、連胤按るに、こは葛野郡松尾神社の末社掘神を祭れるより、掘神は今も大井社と稱して、即ち大井川の北臨川寺の西に在す、 の號を稱したるにて、當郡の地名にはおらざるべし、故に廢れたるならむ、

類社

伊勢國鈴鹿郡大井神社二座、尾張國山田郡、常陸國那賀郡、丹波國柴田郡、出雲國秋鹿郡大井神社、各一

連胤按るに、各國祭神詳ならずといへども、かならず水神なるべく、かつ神號より地名に押移れるもあるべし、御井神は御井神社とあれば各別なるべし、

乙訓坐火雷神社

名神大月次新嘗

火雷印木大  
雷に作るは火  
雷也今ト部  
兼永柳本に  
依て改む

乙訓は郡名に同じ、火雷は褒能伊加都知と訓べし、○祭神建角身命頭○在所廢亡の後、向日神社和殿に在す、社家 ○式三、臨時 名神祭二百八十五座、中 山城國乙訓神社一座、祈雨祭神八十五座、並云々、乙訓社一座、○山城風土記云、 所謂丹塗矢者、乙訓社坐火雷命、在賀茂建角身也、云々、同下

廣隆寺由來記云、此記は明應八年に記したるよし、山城國乙訓郡有二字社、號乙訓社、今向日明神是也、とみえたるは、古今の盛衰を志らずして書なせるもの也、 連胤按るに、由來記は世に流布すといへども、心をとめて見る人少し、さては所以ある此神社の廢亡せるを、かつは歎きかつは羨みて、近き頃に至り、好事の徒が同郡井内村に坐す角宮を、火雷神社と申しなし、を、山城名跡志元禄十五年 を書し時、初めて其由を記し、此後正徳元年に著したる名勝山城志、享保十九年に火雷神社在井内村一稱角宮、見廣隆寺記、此記に見えと妄に志にはまかりす 書しを、宣長が主張し、弟國の地の證として、古事記傳に擧たるより、皆然る事かと思ひま



どひ來りたり、從ふべからず、

類社

宮中大膳職火雷神社、大和國忍海郡葛木坐火雷神社二座、並名神大月同國宇智郡、和泉國大鳥郡、上野國那波郡火雷神社、各一大和國廣瀨郡穗雷命神社、

連胤 按るに、火雷命と稱し奉るに四神あり、一には日本紀、神代一書曰、在胸曰火雷二、には大膳職火雷神、是はたぐ炊釜の三には乙訓坐火雷神、是は建角身四には御靈八所の一座火雷神、是は管領大相國の靈、火を指ていふ、等也、神名の同じきを以て、同神とは申しがたき事、楠玉姫命に同じ、爰に類社として舉しは、たゞ同名の社を集め置のみ、同神の社といふにはあらず、以下此類多し、見わくべし、

神位

續日本紀、延曆三年十一月丁巳、遣兵部大輔從五位上大中臣朝臣諸魚、叙乙訓神從五位下、以遷都也、遷都の時也、日本紀略、弘仁十三年八月庚申、奉授乙訓神從五位下、下は上文德實錄、嘉祥三年七月丙戌、進山城國火雷神階授從五位上、是正五位下の誤なる、  
古本を得て正すべし、三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授山城國正五位下乙訓火雷神從四位下、

官幣 神寶

續日本紀、大寶二年七月癸酉、詔在山背國乙訓郡火雷神、每旱祈雨、頗有徵驗、宜入大幣及月次幣例、寶龜五年六月壬申、奉幣於山背國乙訓社、以豺狼之恠也、三代實錄、貞觀

元年七月十四日丁卯、遣使諸社、奉神寶幣帛、右兵衛佐從五位下源朝臣至、爲乙訓社使、外此祈雨止雨の奉幣年月今略す

修理

續日本紀、延曆三年十一月乙丑、遣使修理乙訓社、是長岡宮に遷都の時也

社職

扶桑略記、天曆七年二月十二日、神祇官失火、登高倉消火者、山城國乙訓社祝部良茂、可令給祿、中右記大治二年二月條にも見えたり

怪異

續日本紀、寶龜五年正月乙丑、山背國言、去年十二月於管内乙訓社、狼及鹿多、野狐、一百許每夜鳴、七日而止、

雜事

日本紀略、延曆十三年十二月庚戌、遷置山城國乙訓社佛像於大原寺、初西山探薪人休息此社、便利木成佛像、稱有神驗、衆庶會集驚耳目、故遷、

石作神社

石作は以之都久利と訓べし、和名鈔、和名上、假名上、石作、の如し、○祭神石作連祖神歟、○在所廢亡の後、大歲神社相殿に在す、社家、○舊事紀、天孫建麻利尼命、石作連等祖、姓氏錄、山城國石作、火明命之後也、國史に遊獵石作丘、譜陵、式に石作陵など見えたり







の條下に辨じ置り、さて向日社、上社と稱す乙訓社下社と稱すは同處に鎮坐せしが、承久の亂に乙訓社は頽敗して、其後當社相殿なりしが故に、かゝる誤りも起れるものなるべし、

神位

三代實錄、貞觀元年正月廿七日甲申、奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>山城國正六位上向神從五位下<sub>一</sub>、

大歲神社

大月次新嘗

大歲は於保登志と訓べし○祭神大歲神神祇○灰方村に在す、今壹森明神と稱す、山城例祭九月廿一日、○古事記、神代速須佐之男命、大市比賣生子大年神、神祇拾遺云、向日向日トハ、大歲神子ニテ御坐、此社ノ北ニ當テハイ方ト云村ニ、大歲神鎮坐云々、當社と向神社は神祇ある事、今もなほいぢぢるしき也

類社

大和國高市郡大歲神社二座、和泉國大島郡大歲神社、登遠江國長上郡、但馬國二方郡、石見國那賀郡大歲神社、各一攝津國住吉郡草津大歲神社、伊豆國那賀郡仲大歲神社、

宣長云、諸國に大歲神社と云が多かるは、此神を齋へるも有べし、又其處々にて穀の事に功有し神を然稱名けて祭れるも有べし、漢籍にいゆる大歲とは痛く異なり、字の同きに付てな思ひまかひそと云り、連胤按るに、數社の中なれば彼漢籍なる大歲を祭るも交りなむ、うは播磨國佐用郡天一神玉神社の例あり、

茨田神社

茨田は伊婆良多と訓べし○祭神詳ならず○築山村に今茨田森といふ小林あり、是舊跡也、

上人○姓氏錄、山城國茨田連、彦八井耳命之後也、

山城志に、或云在<sub>二</sub>上久世村、今稱<sub>二</sub>綾戸明神<sub>一</sub>と云り、其證なければ今從はず、

石井神社

石井は伊波爲と訓べし○祭神詳ならず○岩藏山に在す、金藏寺鎮守神と稱す、山城例祭月

日

類社

越後國三島郡、同國沼垂郡石井神社、各一武藏國荏原郡磐井神社、近江國滋賀郡石坐神社、

連胤按るに、各國祭神詳ならず事、前なる國中神社に同じ、

神位

三代實錄、元慶四年十月十三日癸巳、授<sub>二</sub>山城國正六位上石坐神從五位下<sub>一</sub>、

連胤云、此神位井と坐の字違を以て、考證、比保古等に別社とす、名勝志今は祭事記に従ふ、

猶考ふべし、

神川神社

神川は加牟加波と訓べし○祭神詳ならず○鴨川村に在す、今住吉明神と稱す、名勝志

考證、名勝志等に、今謂賀茂川村者神川之轉也と云り、然るべし、また山城志に、今稱<sub>二</sub>雲宮、<sub>一</sub>神菴和歌集云、等持院贈左大臣家爾、住吉社違造豆、歌講世其例志時、<sub>一</sub>乘而從、我君世乃、長岡爾、跡袁也垂志、住吉神、其山莊故趾今呼<sub>二</sub>池上<sub>一</sub>と云り、連胤按るに、等持院贈左大